古島榎崎遺跡

福岡県筑後市大字古島所在遺跡の調査
筑後市文化財調査報告書
第72集

2006

筑後市教育委員会

古島榎崎遺跡

古島榎崎遺跡（第１～３次調査）

2006

筑後市教育委員会

序

本書は、平成９・10年度にかけて筑後市教育委員会が実施した「古島榎崎遺跡」埋蔵文化財発掘調査の記録であります。

当地は、筑後市の南西部、標高５～６m位の低位段丘上に立地し、一帯は米や麦、苺栽培を中心とした農業が盛んに行われている地域であります。当遺跡周辺では、これまでの調査によって縄文時代から中近世にかけての遺跡が確認されており、今回の発掘調査によって新たに縄文時代前期、弥生時代中期～後期、中世の遺跡データを加えることができました。

本書が、地域における文化財保護思想普及の一助となり、また、学術研究の資料として広く活用されることになれば幸いと存じます。最後になりましたが、本書の刊行にあたり、多大なご協力を賜りました関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

筑後市教育委員会
教育長　城戸　一男

例　言

1.本書は、筑後市教育委員会が平成9・10年度にかけて実施した「古島榎崎遺跡（第1～3次調査）」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2.本書に掲載した発掘調査の原因、調査機関等の調査に関わる経過については、各調査の「(1) はじめに」の部分で記載した。
3.発掘調査から報告書作成に至るまでの諸作業は、筑後市教育委員会が行い、発掘調査で出土した遺物並びに記録した図面類・写真類等は、当教育委員会で所蔵・保管を行っている。
4.調査に用いた測量座標は、国土調査法第Ⅱ座標系（日本測地系）を基準としており、本書に示される方位はG.N.を示している。従って、本文中に記される遺構の角度はこれを基準としたものであり、水準についてはT.P.を基準としている。
5.本書に使用した図面類に関して、遺構実測図は末吉隆弥（現：川崎町教委）、江崎、奥村太郎、上村英士、小林勇作、遺物実測図は佐々木寿代、図版浄書は横井理絵、丸山裕見子が作成した。
6.本書に使用した写真類に関して、遺構写真は末吉、上村、小林、遺物写真は小林が撮影した。
7.本書に使用した遺構番号は、頭に調査次数並びに種別記号を表記し、種別は以下の記号を用いた。
　種別記号：「SA－柵列」「SB－掘立柱建物」「SD－溝」「SI－竪穴住居」「SK－屋内土坑・土坑」「SP－柱穴・ピット」「SX－周溝状遺構・不明遺構」
8.本書の執筆と編集は小林が担当した。

目　次

Ⅰ．調査組織 …… 1
Ⅱ．位置と環境 …… 3
Ⅲ．調査成果 …… 9
　1.古島榎崎遺跡（第1次調査）
　　(1) はじめに …… 9
　　(2) 検出遺構 …… 9
　　(3) 出土遺物 …… 36
　　(4) 小結 …… 80
　2.古島榎崎遺跡（第2次調査）
　　(1) はじめに …… 91
　　(2) 検出遺構 …… 91
　　(3) 出土遺物 …… 92
　　(4) 小結 …… 92
　3.古島榎崎遺跡（第3次調査）
　　(1) はじめに …… 95
　　(2) 検出遺構 …… 96
　　(3) 出土遺物 …… 103
　　(4) 小結 …… 118
Ⅳ．まとめ …… 122
Ⅴ．古島榎崎遺跡出土の炭化米 …… 126

Ⅰ．調査組織

本書に掲載した発掘調査は、複数年度にわたって実施したため、以下に各年度の発掘調査組織を記述する。なお、整理作業及び報告書作成については調査終了後、随時行ってきたが、主として平成17年度に行った部分が多く、組織は当該年度を記載することとした。

【調査組織】

1.古島榎崎遺跡第1次調査（平成9年度）

総括	教育長	森田　基之
	教育部長	津留　忠義
庶務	社会教育課長	山口　逸郎
	社会教育係長	田中　清通
	社会教育係	永見　秀徳
		小林　勇作（調査担当）
		田中　　剛
		上村　英士（嘱託：4/1～5/31・職員：6/1～）
		柴田　　剛（嘱託・現：伊万里市教育委員会）
		立石　真二（嘱託：8/1～・現：瀬高町教育委員会）

2.古島榎崎遺跡第2・3次調査（平成10年度）

総括	教育長	牟田口和良（4/7～）
	教育部長	下川　雅晴
庶務	社会教育課長	山口　逸郎
	社会教育係長	田中　清通
	社会教育係	永見　秀徳
		小林　勇作（調査担当）
		田中　　剛
		上村　英士
		柴田　　剛（嘱託・現：伊万里市教育委員会）
		立石　真二（嘱託・現：瀬高町教育委員会）

3.報告書作成（平成17年度）

総括	教育長	城戸　一男
	教育部長	菰原　　修
庶務	社会教育課長	田中　僚一
	社会教育係長	角　　恵子
	社会教育係	永見　秀徳
		小林　勇作（報告書担当）
		上村　英士
		阿比留士朗（嘱託）

4.発掘調査参加者

石橋香代美・池末桂子・井上むつ子・牛島蓉子・江崎末廣・江崎貴浩・太田黒三枝・大塚政夫・奥村太郎・小野カトリ・小野清次・小野ミノブ・加藤礼子・桃島美恵子・北島清・近藤ヨシ子・近藤都・末吉隆弥（現：川崎町教育委員会）・角里子・瀬戸八重子・田島ヤス子・田中ミドリ・田中峰子・壇ちゑこ・鶴芳輝・土井八重子・富安英子・東末子・平井良治・平尾仁子・深町順子・深町美智子・馬場孝司・馬場千鶴子・村上幸子・森山美津子・矢次和枝・吉開朝子・吉田喜美子・吉田裕・渡辺茂喜・渡辺泰子

5.整理作業参加者

整理補助員　仲文恵・佐々木寿代・横井理絵・丸山裕見子・猿渡式子

整理作業員　野口晴香

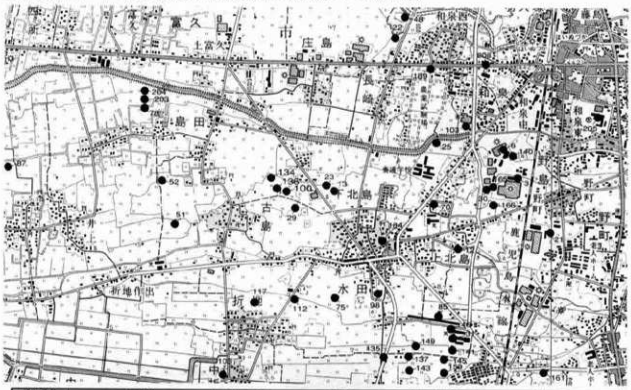
発掘調査から報告書作成に至るまでの間、以下の方々にご指導・ご鞭撻を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）

藤尾慎一郎・小林謙一（国立歴史民俗博物館）、小田和利（福岡県教育庁南筑後教育事務所）、山田元樹（大牟田市役所）、坂井義哉（大牟田市教育委員会）、猿渡真弓（高田町教育委員会）、東竜雄（山川町教育委員会）、塚本英子（久留米市教育委員会）、大塚恵治・山田郎子（八女市教育委員会）、尾崎源太郎（広川町教育委員会）、大島真一郎（黒木町教育委員会）

Ⅱ．位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部にあたる。市域をJR鹿児島本線と国道209号線が縦断し、国道442号線が横断する。また、市南西部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市域地は、国道に沿って市の中心部に形成されている。

当遺跡は、筑後市の南西部、標高5.5m位の低位段丘上に立地する。一帯は、水稲栽培を中心とする水田や畑、苺栽培等のハウス棟が展開し、周辺はこれまでの発掘調査成果によって弥生時代の集落が点在することが知られている。南方約200m地点の「下北島榎崎遺跡(註1)」では、弥生時代中期の掘立柱建物6棟や溝等が確認されている。更に当遺跡の東方約200m地点にあたる「下北島久清遺跡(註2)」では、弥生時代後期の掘立柱建物11棟、周溝状遺構1基等が検出されており、掘立柱建物の柱穴基底部からは柱支えの礎板が多数認められた。また、当地よりやや離れた水田地区では、弥生時代中期の集落である「水田杉ノ元遺跡(註3)」や「水田山伏遺跡(註4)」が点在し、掘立柱建物等が検出された。これらの集落跡は古墳時代以降やや影を潜めることとなるが、中世に勢力を一段と強めた安楽寺領水田荘は水田天満宮を中心に大きく展開し、近世では在郷町「水田町(註5)」として和傘製作や焼き物等の特産地として発展した。



遺跡番号	遺跡名	遺跡番号	遺跡名	遺跡番号	遺跡名
100	古島榎崎遺跡1次	048	若菜湖ノ江遺跡1次	140	上北島井原口遺跡2次
134	古島榎崎遺跡2次	051	古島島相遺跡1次	141	水田上仁良葉遺跡1次
136	古島榎崎遺跡3次	052	島田三反田遺跡1次	143	水田上平霊石遺跡2次
003	狐塚遺跡1次	070	高江柳遺跡1次	145	水田上仁良葉遺跡2次
006	上北島井原口遺跡1次	075	水田正吹遺跡1次	149	水田上平霊石遺跡3次
012	上北島前田遺跡1次	078	島田外屋敷遺跡1次	159	常用ニラバ遺跡1次
013	蔵数森ノ木遺跡2次	085	水田杉ノ元遺跡1次	161	熊野屋敷遺跡1次
021	上北島平塚遺跡1次	087	井田梨ノ内遺跡1次	165	上北島花畑遺跡2次
022	長崎坊田遺跡1次	098	水田下松町遺跡1次	166	上北島塚ノ本遺跡1次
023	下北島久清遺跡1次	103	和泉近道遺跡1次	184	水田上町遺跡1次
025	下北島榔引遺跡1次	112	水田伊勢ノ脇遺跡1次	189	和泉柯町遺跡1次
029	下北島榎崎遺跡1次	117	折地長岡寺遺跡1次	203	島田彼岸田遺跡2次
030	上北島花畑遺跡1次	135	羽大塚寺ノ脇遺跡1次	204	島田彼岸田遺跡1次
031	水田山伏遺跡1次	137	水田上平霊石遺跡1次	206	和泉トノエ遺跡1次
046	水田山伏遺跡2次				

※遺跡番号は当市採用の遺跡番号を示す。

Fig.1　古島榎崎遺跡周辺遺跡分布図（1/25,000）

【註】
1.『榎崎遺跡』　筑後市文化財調査報告書　第7集　筑後市教育委員会　1991
2.『筑後市内遺跡群Ⅲ』　筑後市文化財調査報告書　第73集　筑後市教育委員会　2006
3.『筑後市内遺跡群Ⅱ』　筑後市文化財調査報告書　第33集　筑後市教育委員会　2001
4.『筑後市内遺跡群Ⅲ』　筑後市文化財調査報告書　第44集　筑後市教育委員会　2006
5.『筑後市史－第一巻－』　筑後市　平成9年

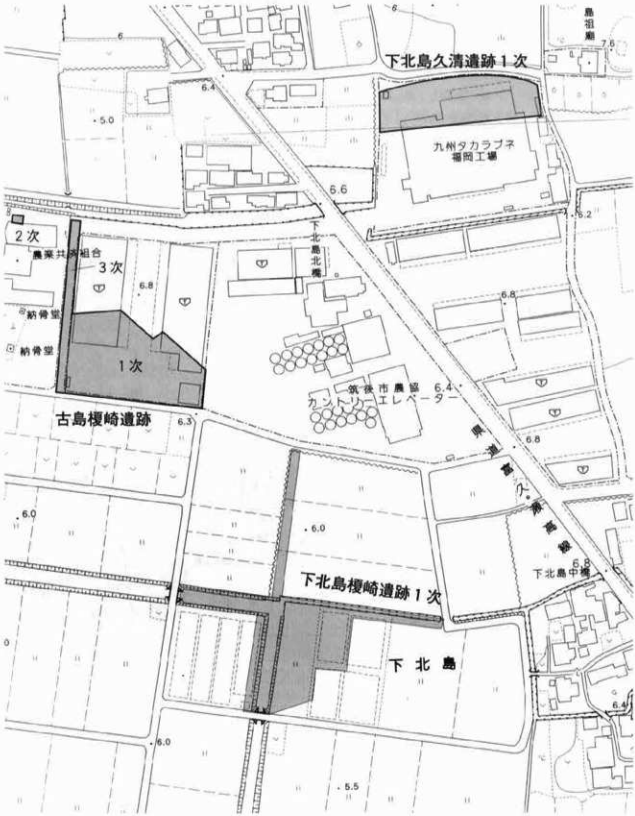


Fig.2　古島榎崎遺跡発掘地調査地点位置図（1/25,000）

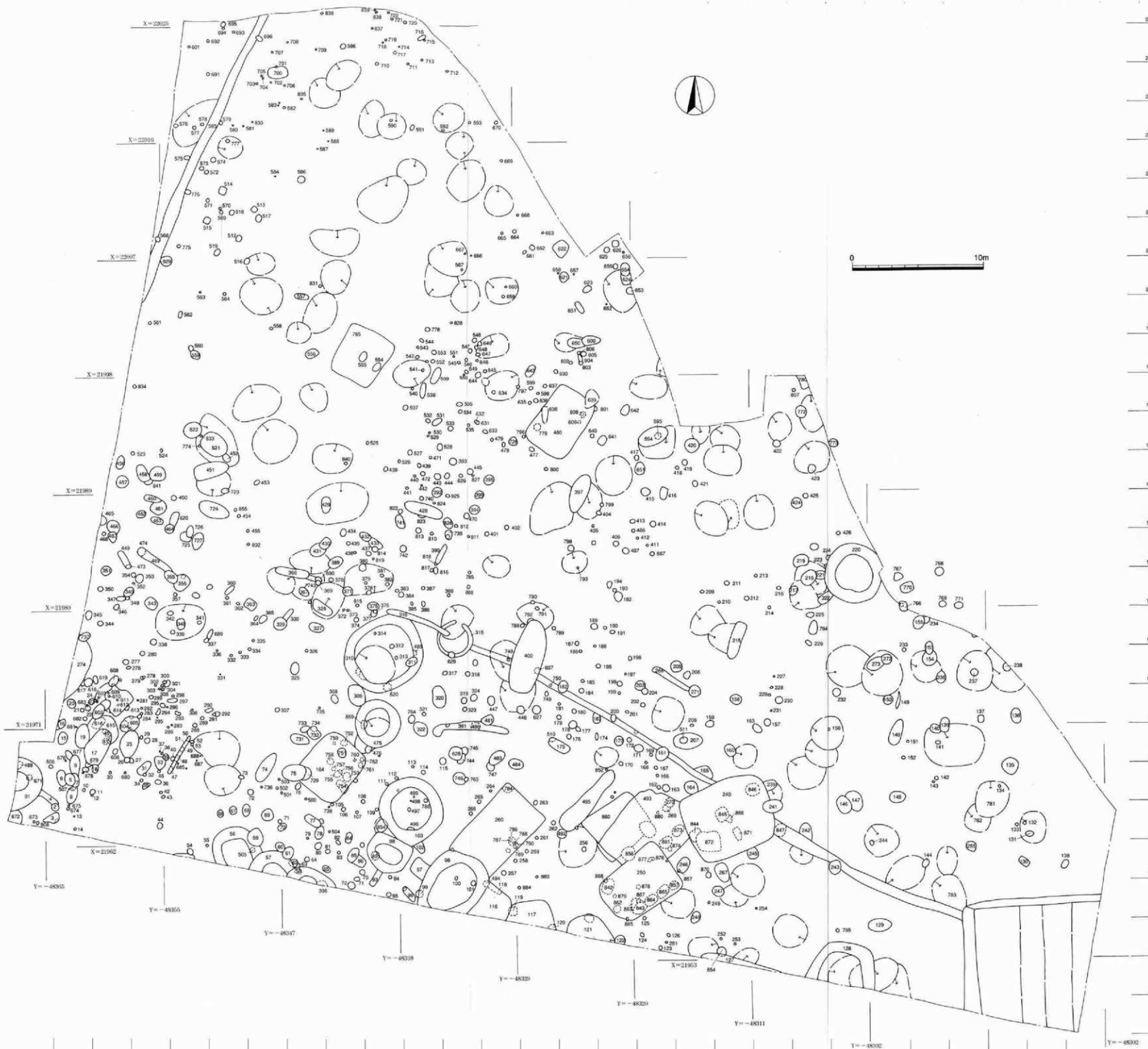


Fig.3 古島榎崎遺跡（第1次調査）遺構略側図（1/200）

Fig.4　古島榎崎遺跡（第１次調査）遺構平面実測図（1/200）

Ⅲ．調査成果

1.古島榎崎遺跡（第1次調査）

(1) はじめに

当遺跡は筑後市大字古島字榎崎470外に所在する。筑後西部地区県営干拓地等農地整備事業に係る非農用地の造成工事に伴う発掘調査で工事面積約9,900㎡のうち、遺跡が確認された約3,900㎡を調査対象範囲とした。発掘調査は平成9年4月18日から同年7月30日の約3ヶ月間実施し、上村英士・末吉隆弥（現：川崎町教育委員会）らの協力を得て小林勇作が担当した。この間、考古学的手法による表土剥ぎ・遺構検出・遺構掘削・実測作業・写真撮影・整理作業等を行い、報告書作成作業は平成17年度に実施した。調査の結果、竪穴住居・掘立柱建物・周溝状遺構・溝・土坑等の多くの遺構が確認され、縄文土器・弥生土器・土師器・石器等パンコンテナー40箱相当にも及ぶ貴重な出土遺物を得ることができた。以下は、主要な遺構と遺物について報告する。

(2) 検出遺構

竪穴住居

当調査区で検出された竪穴住居の殆どは強い削平を受けており、遺構が僅かに残存した程度の極めて悪い状態であった。遺構の平面プランが方形状または長方形状で検出され、竪穴内部がほぼ平坦な床面で構成される遺構について「竪穴住居」と認定した。出土遺物から弥生時代後期を主体とする竪穴住居と想定されるが、当該期の竪穴住居に付随すると思われる柱穴や炉跡、屋内土坑等が欠落するものもあった。そのため、同種の遺構として全体プランが検出されず居住空間であったか否か判然としない遺構については、後述の「不明遺構」として報告することにした。

1SI104（Fig.5、Pla.4・5）

調査区の南西部U7区に位置し、掘立柱建物（1SB897・898）及び土坑（1SK075）に切られる。全体の平面プランは南北にやや長い角の取れた隅丸長方形状を呈し、長軸5.10m×短軸4.08m、深さは最大で0.16mを測る。主軸の方位はN-29° 32′ 19″ -Eを示す。住居の主柱穴はP1・2の2本と思われるが、P2は掘立柱建物（1SB897-P3）に切られているためプランは不明である。P1は屋内土坑（1SK729）の下位で検出され、幅0.40前後、床面からの深さ0.45mを測る。更に柱穴底部からは径0.15mの柱痕跡も認められた。住居の床面は地山が削り出されたままの状態で使用されており、竪穴内部の中央には炉跡（1SK757）と思われる遺構が検出された。炉跡は0.40×0.50mの楕円形状を呈し、床面からの深さは0.09mを測る。屋内土坑は床面の南壁付近で1SK729を、東壁付近では1SK783を検出し、この他に床面には複数のピットや窪み（S752・755・756・759・760～762）が認められた。屋内土坑（1SK729）は不整形状を呈する土坑であり、幅1.30～1.45m、床面からの深さは0.17mとやや幅広で浅い。ここからは大量の炭化米が出土しており、この炭化米をサンプルとして炭素14年代測定法（註-1）による分析を行ったところ【炭素14年代（14C BP）：2020±30】【較正年代（cal BC）：105BC－AD60 95.4％】の分析結果が示され、この結果については後章に参照することとする。もう一方の屋内土坑である1SK783は平面形が楕円形状を呈した擂鉢状の土坑であり、幅0.85～0.94m、深さは0.14mを測る。1SI104覆土中からは縄文土器（片）、弥生土器（甕・壺・高坏・片）、1SK729からは弥生土器（壺）、1SK783からは石器等が出土しており、弥生時代後期に属すると思われる。

1SI240（Fig.5、Pla.4・6）

調査区南東部K6区に位置した当調査区で検出した最も大きい竪穴住居であり、当住居の先後関係（古→新）は1SB900→1SI240→1SK241となる。平面プランは隅丸長方形を呈し、長軸6.88m×短軸5.55m、深さは0.21m前後、短軸の方位はN-20° 54′ 50″ -Wを示す。床面は地山をほぼ平坦な状態で削り出して

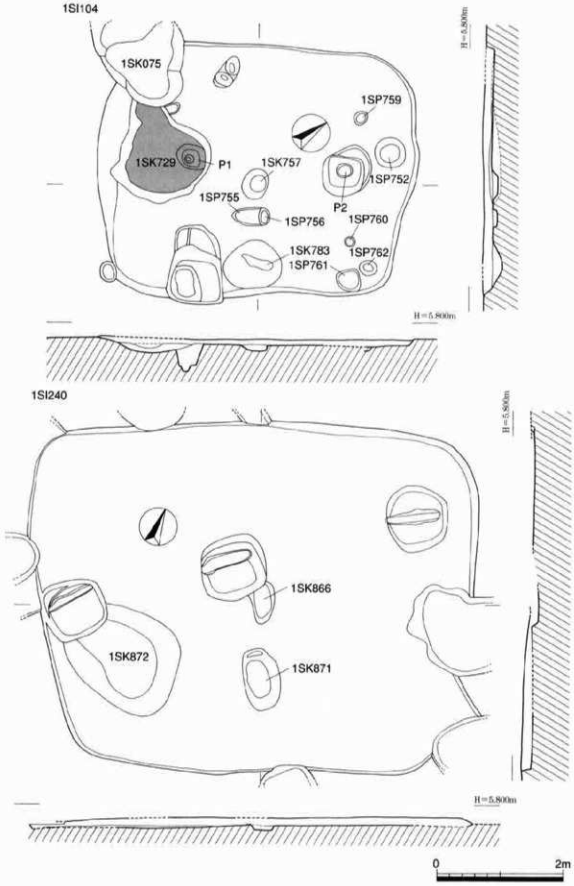


Fig.5 竪穴住居（1SI104・240）実測図（1/60）

使用されていたが、建物の主柱穴は確認されなかった。住居のほぼ中央に楕円形を呈した炉跡が確認され、幅0.36m、長さ0.68m程度、床面からの深さは0.27mを測る。更に、床面からは屋内土坑が検出され、1SK871は炉跡の南側に、1SK872は西壁付近に位置する。1SK871は楕円形状を呈し、長さ0.97m、幅0.58m、深さ0.29mを測り、1SK872は楕円形状を呈し、幅1.50m、深さ0.12mを測る。何れも出土遺物には恵まれていないが、住居内からは縄文土器（片）、弥生土器（甕・壺・片）、石器（石包丁）等が出土しており、弥生時代後期後半以降終末期の範疇に属すると思われる。

1SI250（Fig.6、Pla.6）

調査区南東部M4区に位置する。竪穴住居（1SI240）の南西部で検出し、竪穴住居（1SI493）、掘立柱建物（1SB894・899）に切られる。住居の平面プランは隅丸長方形状を呈し、長軸5.84m×短軸4.03m、深さは0.10m前後と僅かに住居の痕跡を残す程度の状態であり、短軸の方位はN-30°26′47″-Wを示す。床面は地山をほぼ平坦な状態で削り出して使用されていたと思われ、中央部からは炉跡と思われる隅丸方形状のピットが検出された。炉跡は長さ0.52m、幅0.47mを測り、内底には小ピットが認められる。床面からの深さは最大で0.23mを測る。建物の主柱穴は確認されておらず、屋内土坑（1SK864・875）、及びピット（1SP876・877・879）が検出された。1SK864は住居の南壁中央付近に位置した隅丸長方形状の土坑であり、長さ1.02m、幅0.76m、深さ0.16mを測る。内底両縁は10cmほど更に窪んだ状態である。一方の1SK875は住居南東部隅で検出した楕円形状の土坑であり、幅0.70～0.83m、深さ0.4mを測る。住居内からは屋内土坑（1SK864）から僅かに弥生土器（片）が出土しているのみであるが、弥生時代後期の所産と思われる。

1SI260（Fig.6、Pla.7）

調査区南端部P5区に位置し、住居の南西部は1SX098を切る。平面プランは縦長の長方形状を呈し、西壁長6.87m×短軸4.00m、深さ0.15m前後を測る。住居の掘り方の周囲では、壁に沿ってピット列（P1～9）が検出された。ピットの配列状況からは、屋根からの垂木を支えていた柱の痕跡と想定される。P2～4間は1.10～1.20m、P5～9間は1.15～1.30mを測り、P4・5・7～9の底部で径10cm前後の柱痕跡が認められた。住居の方位は長軸でN-34°21′46″-Wを示す。床面は地山をほぼ平坦な状態で削り出しており、床面からは屋内土坑（1SK784）及びピット（1SP785・789・790）は検出されたが、建物の主柱穴及び炉跡は確認できなかった。1SK784は北西隅で検出された楕円形状の土坑であり、幅0.78～0.92m、床面からの深さは0.50m、遺物は弥生土器（片）が出土する。住居内からは縄文土器（片）、弥生土器（鉢・甕・片）等が出土しており、弥生時代後期以降に属すると思われる。

1SI480（Fig.7、Pla.7）

調査区中央部やや北よりのO6区に位置する。南北方向に細長い竪穴住居であり、北東隅及び西壁部は現代の攪乱を受ける。住居の平面プランは隅丸長方形状を呈し、長軸5.30m×短軸3.56m、深さは0.14m前後と残存状態は悪い。住居の方位は長軸でN-28°0′33″-Eを示す。床面は地山をほぼ平坦な状態で削り出して使用されていたと思われ、床面からはピット（1SP778・807・808）が検出された。しかし、建物の主体である柱穴、炉跡は確認されなかった。住居内からは東壁中央に近い床面直上で弥生土器（甕）が出土し、弥生時代後期前半に属すると思われる。

1SI493（Fig.7、Pla.4）

調査区南東部M6区に位置する。竪穴住居（1SI860）を切り、竪穴住居（1SI240・250）に切られるといった複雑な切り合い関係にあることから全体規模の詳細は欠くが、長軸6.60m×短軸5.20m、深さ0.09m、平面プランは隅丸長方形状を呈していたものと復元される。住居の方位は長軸でN-36°13′07″-Eを示し、床面は地山をほぼ平坦に削り出して使用されていた。中央には長さ1.27m×幅1.00m×深さ0.17mを測る楕円形状の炉跡が検出され、この他、屋内土坑（1SK856・861・873）、ピット（1SP269・270・874）が認められた。1SK856は住居の南壁中央付近に位置した楕円形状の土坑で径0.96m前後、深さ0.30m、1SK861は住居の東壁中央付近に位置した楕円形状の土坑で長さ1.07m、幅

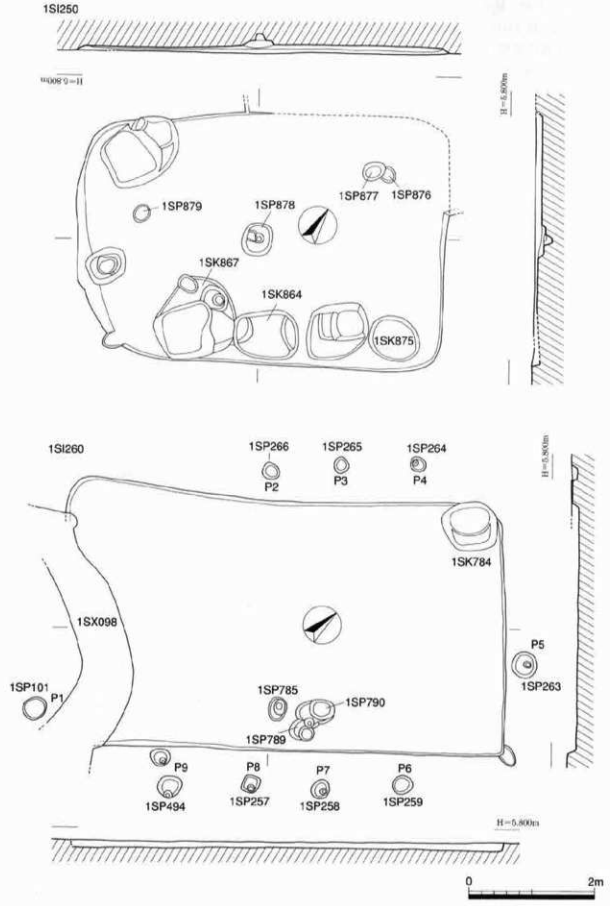


Fig.6 竪穴住居（1SI250・260）実測図（1/60）

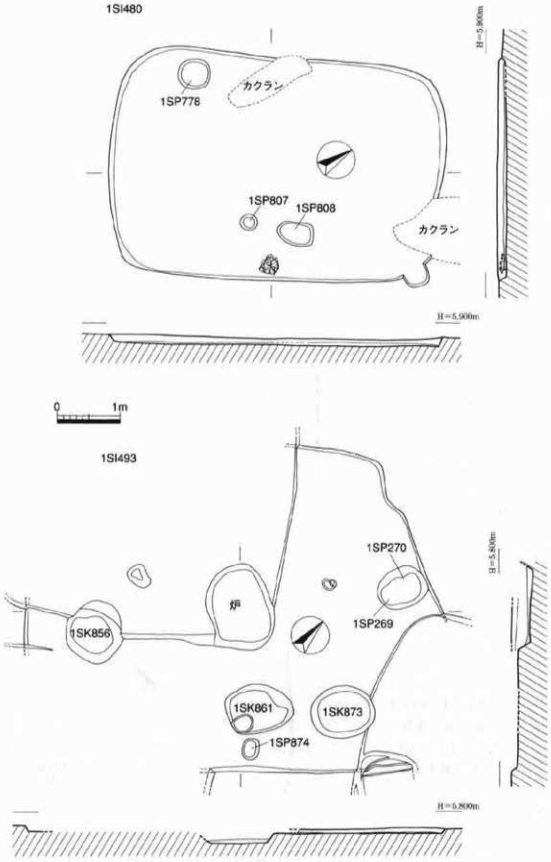


Fig.7　竪穴住居（1SI480・493）実測図（1/60）

0.80m、深さ0.12m、1SK873は1SK861北側に隣接した楕円形状の土坑で長さ1.02m、幅0.84m、深さ0.15mを測る。住居内からは縄文土器（鉢・片）、弥生土器（甕）が出土しており、弥生時代後期前半に属すると思われる。

1SI765（Fig.8、Pla.8）

調査区中央部T17区に位置する。平面プランは隅丸長方形状を呈し、長軸4.32m×短軸3.71m、深さ0.09m前後、住居の方位は長軸でN-25° 43′ 50″ -Eを示す。床面は地山をほぼ平坦に削り出しており、中央には長さ0.67m×幅0.51m×深さ0.07mを測る楕円形状の炉跡（1SK555）が検出された。屋内土坑（1SK554）は、西壁中央付近で検出され、平面プランは楕円形状を呈し、長さ0.70m、幅0.46m深さ0.13mを測る。住居内からは石器、1SK554・555からは弥生土器（器台・片）が出土し、弥生時代後期以降に属すると思われる。

1SI860（Fig.8、Pla.4）

調査区南東部N6区に位置する。当住居は竪穴住居（1SI493）に切られ、土坑（1SK495）に隣接する。平面プランはほぼ正方形状を呈し、一辺4.23～4.43m、深さ0.09m前後、住居の方位は主軸でN-30° 10′ 24″ -Wを示す。床面は地山をほぼ平坦に削り出されて使用されている。他の住居に見られた炉跡、屋内土坑はなく、建物の主体である柱穴も検出されなかった。住居内からは弥生時代中期後半～後期前半までの弥生土器（鉢・甕・壺・高坏・片）、石器等が出土しており、遺構はこの時期に属するものと思われる。

掘立柱建物

1SB881（Fig.9、Pla.9）

調査区東端のD9区で確認した梁行1間×桁行2間の東

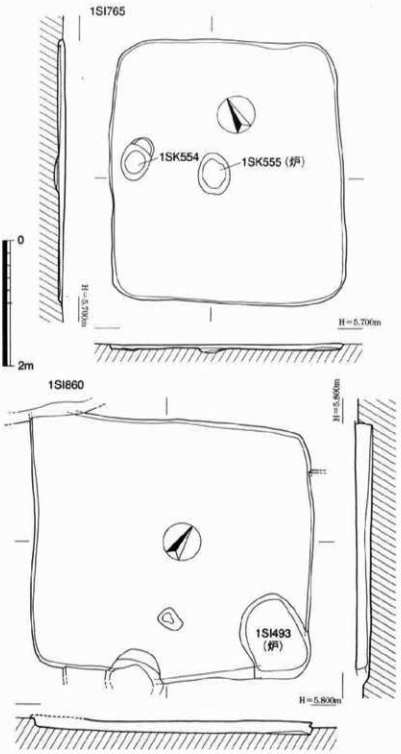


Fig.8 竪穴住居（1SI765・860）実測図（1/60）

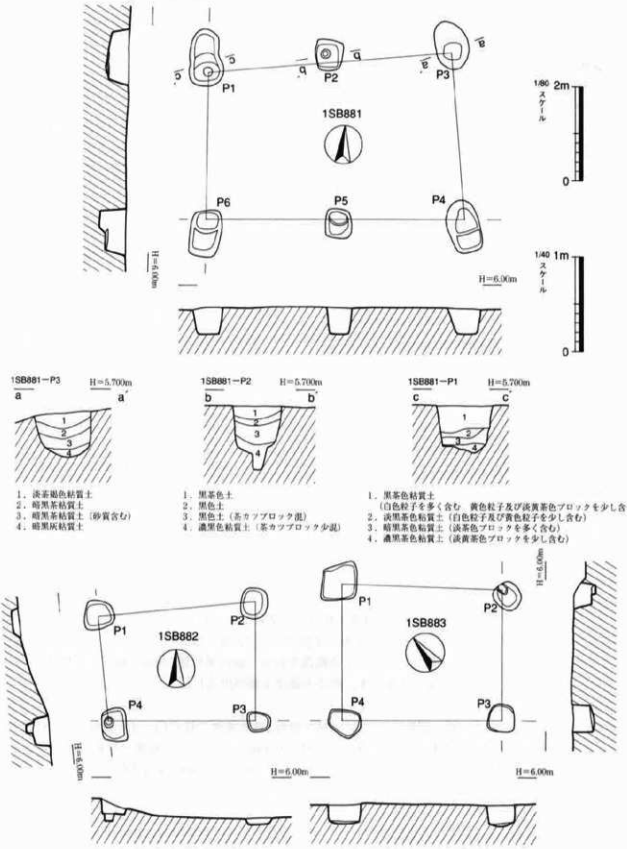


Fig.9　掘立柱建物（1SB881～883）実測図（1/40・1/80）

西棟建物で柱穴P1～6を検出した。深さは0.39～0.54mを測り、平面プランは隅丸方形状または楕円形状を呈する。柱穴P1・4～6の内部で建物外方へ展開するテラスを認め、更にP1・2では底部に径20cm前後の小ピットを確認した。土層観察では柱痕跡を確認できなかったため柱が抜き取られた可能性がある。梁行方位はN-5°42′38″-Wを示し、梁行平均長3.30m、桁行平均長5.30mを測る。P1・2・4から弥生土器片が出土している。

1SB882（Fig.9）

調査区東端F12区に位置する梁行1間×桁行1間の建物で柱穴P1～4を検出した。P4は丘陵裾部で確認された柱穴で、深さは0.48mを測り、底部には柱痕跡とみられる径20cm前後の小ピットを認め、P1～3は深さ0.15m程度と残存状況が悪い。なお、この状況によりP2は当建物の南に隣接する1SB901-P2と重複する柱穴として復元した。柱穴の平面プランは隅丸方形または楕円形状を呈し、梁行平均長2.37m、桁行平均長は3.20mを測る。梁行方位はN-3°10′47″-Wを示し、P3・4から弥生土器が出土した。

1SB883（Fig.9、Pla.9）

調査区東端のI15区で確認し、梁行1間×桁行1間の建物で柱穴P1～4を検出した。平面プランは円形・楕円形であり、深さは0.33～0.45mを測る。P2底部で径20cm前後の小ピットを認め、柱穴からは縄文土器、弥生土器、黒曜石等が出土した。梁行平均長2.83m、桁行3.4mを測り、梁行方位はN-38°57′21″-Eを示す。

1SB884（Fig.10、Pla.10）

調査区東側J12区に位置する梁行1間×桁行1間の建物である。柱穴P1～4の平面プランは楕円形を呈し、P2～4の底部で径20cm程度の小ピットが確認された。深さ0.35m前後、梁行平均長1.88m、桁行平均長は1.93mを測る。梁行方位はN-29°44′41″-Eを示し、出土遺物は皆無であった。

1SB885（Fig.10、Pla.10）

1SB884西隣で検出した梁行1間×桁行1間の建物でK12区に位置する。当調査区内で確認された掘立柱建物群のなかで最も小規模な建物である。柱穴P1～4を検出しており、深さ0.23m、平面プランはほぼ円形を呈する。P3・4の底部には柱痕跡とみられる径20cm前後の小ピットを認め、梁行平均長1.50m、桁行平均長は1.63mを測る。梁行方位はN-23°29′54″-Eを示し、P3・4から弥生土器が出土した。

1SB886（Fig.10）

調査区ほぼ中央N13区に位置した梁行1間×桁行1間の建物で柱穴P1～4を検出した。平面プランは円形・楕円形を呈し、各柱穴の底部すべてに柱痕跡と思われる小ピットを確認し、径は10～15cm程度を測る。梁行平均長2.38m、桁行平均長は2.73mを測る。梁行方位はN-14°49′35″-Eを示し、P1から弥生土器が出土している。

1SB887（Fig.10）

調査区中央部、竪穴住居（1SI480）の東隣で検出した梁行1間×桁行1間の建物でM16区に位置する。建物は柱穴P1～4で構成され、深さ0.32m前後、平面プランは方形・楕円形を呈する。P1・3・4の底部には柱痕跡とみられる径20cm前後の小ピットが確認された。梁行平均長2.85m、桁行平均長は3.35mを測り、梁行方位はN-35°54′35″-Eを示す。P3から弥生土器が出土した。

1SB888（Fig.10）

調査区北部東よりのN20区に位置する。梁行1間×桁行1間の建物で柱穴P1～4を検出した。柱穴の平面プランは楕円形・隅丸方形状を呈し、深さは0.31～0.43m、P1～3では底部に柱痕跡とみられる径20cm前後の小ピットが認められた。梁行平均長2.70m、桁行平均長3.78m、梁行方位はN-30°57′49″-Wを示し、P1～3で弥生土器、サヌカイト片が出土している。

1SB889（Fig.11、Pla.10）

調査区中央部R14区で検出した梁行1間×桁行1間の建物である。建物は柱穴P1～4で構成され、深さ0.33～0.44m前後、平面プランは隅丸方形・楕円形を呈する。P1柱穴底部で径20cm弱の小ピットを認め

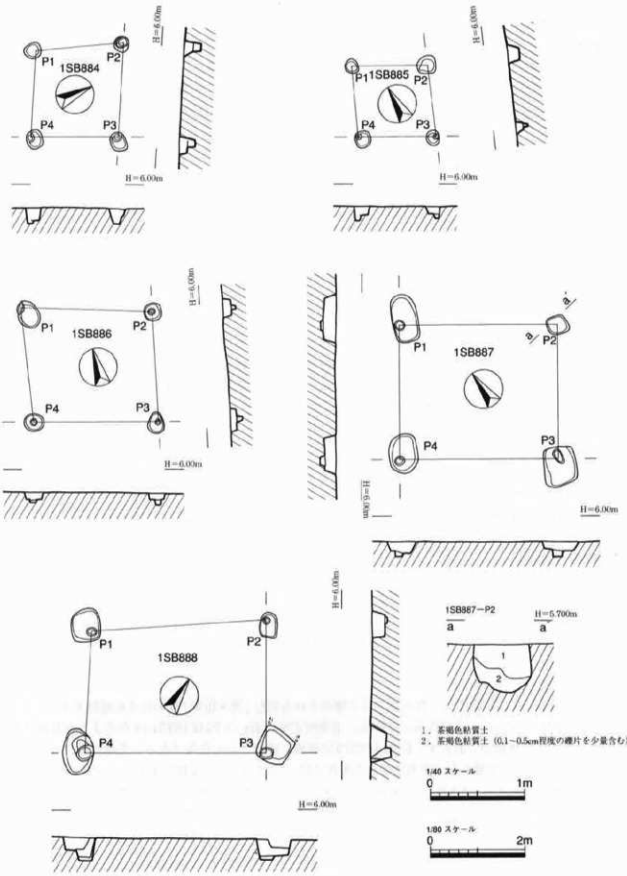


Fig.10　掘立柱建物（1SB884～888）実測図（1/40・1/80）

たが、土層観察では柱痕跡を確認することはできなかったため柱は抜取られた可能性が考えられる。梁行平均長2.40m、桁行平均長は2.95mを測り、梁行方位はN-24° 20′ 27″ -Eを示す。柱穴からは縄文土器、弥生土器、黒曜石片が出土した。

1SB890（Fig.11、Pla.11）

調査区北部西よりのX21区に位置し、1SB891に隣接する。梁行1間×桁行1間の建物で柱穴P1～4で構成される。柱穴の平面プランは方形または楕円形状であり、P2・4では柱痕跡と考えられる径20～25cmを測る小ピットが確認された。更に土層観察ではP3で径12cmの柱痕跡が観察され、深さは0.30～0.35mを測る。梁行平均長2.50m、桁行平均長は2.93mを測り、梁行方位はN-32° 0′ 19″ -Eを示す。縄文土器、弥生土器が出土した。

1SB891（Fig.11、Pla.11）

1SB890に隣接した建物で調査区北部西よりのX21区に位置する。梁行1間×桁行1間の建物で柱穴P1～4で構成される。梁行平均長は2.20m、桁行平均長は3.18mと1SB890と比べ、やや桁行が長い建物となる。柱穴の平面プランはほぼ楕円形状を呈し、P4底部では径20cm弱の小ピットを確認した。P2土層断面では柱を支える際の裏込めは、小礫を含む粘質土で埋められていた状況が顕著に観察された。しかし、どの柱穴からも柱痕跡は確認されておらず、柱は建物廃絶後に抜取られた可能性が考えられる。柱穴の深さは0.25m前後を測り、桁行方位はN-18° 59′ 47″ -Eを示す。P4柱穴から僅かに弥生土器が出土した。

1SB892（Fig.12）

調査区西端で検出した建物でAA12区に位置する。建物の西側は調査区外へ展開するため建物規模については不明であるが、柱穴P1～4を検出し、東部の2間分を確認した。柱穴の平面プランは隅丸方形または楕円形状であり、深さは0.17～0.39m、P1では土層断面で径20cmの柱痕跡を確認した。P2～4間は3.45m、柱間の平均長は1.725mを測る。方位はN-40° 10′ 45″ -Eを示し、各柱穴から弥生土器が出土している。

1SB893（Fig.12、Pla.11）

調査区南東部K8区に位置した梁行1間×桁行1間の建物である。柱穴P1～4で構成され、柱穴の平面プランは隅丸方形状を呈する。深さは0.48～0.59mを測り、P3柱穴内ではテラスを認める。梁行平均長2.60m、桁行平均長は2.73mを測り、梁行方位はN-39° 48′ 20″ -Wを示す。各柱穴から弥生土器が出土した。

1SB894（Fig.12）

調査区南東部L4区に位置する。柱穴P1～4で構成される梁行1間×桁行1間の掘立柱建物で、P1は竪穴住居（1SI250）に切られていることから先行する建物と捉えられる。柱穴の平面プランは隅丸方形または楕円形状を呈し、深さは0.45～0.57m、P3・4底部では柱痕跡と考えられる径10～15cmの小ピットが確認された。梁行平均長2.43m、桁行平均長3.25mを測り、桁行方位はN-45° 54′ 33″ -Wを示す。各柱穴からは弥生土器が出土している。

1SB895（Fig.12、Pla.12）

調査区南部S9区に位置する。柱穴P1～4で構成される梁行1間×桁行1間の掘立柱建物であり、P1・2は周溝状遺構（1SX310）と切り合っている。遺構検出時においてP2は1SX310を切るように検出されたがP1の存在には気付いておらず、P1は1SX310完掘後に確認された柱穴である。先後関係について後に検証したところ、やや疑わしいが当建物が周溝状遺構（1SX310）よりも後出するものと思われる。また、P3は当建物に隣接する1SB896-P2と重複する。事実上、切り合いはあったものと思われるが、検証はできなかったため先後関係については不明である。柱穴の平面プランは隅丸方形または楕円形状を呈し、深さは0.22～0.56m、P3底部では柱痕跡とみられる径15cmの小ピットが確認された。梁行平均長2.80m、桁行平均長3.03mを測り、梁行方位はN-42° 08′ 15″ -Eを示す。柱穴からは縄文土器、弥生土器、石器が出土している。

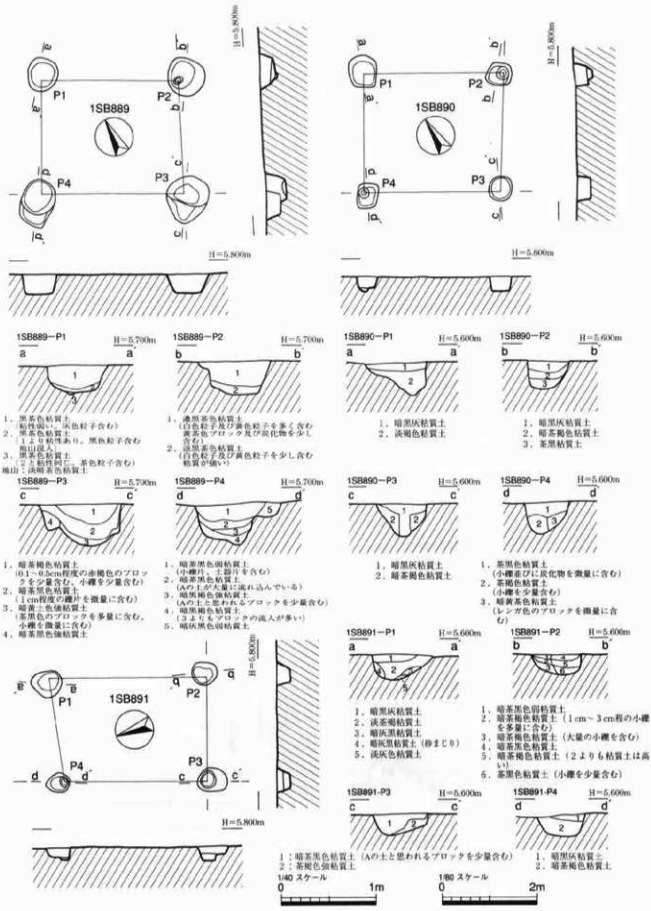


Fig.11　掘立柱建物（1SB889～891）実測図（1/40・1/80）

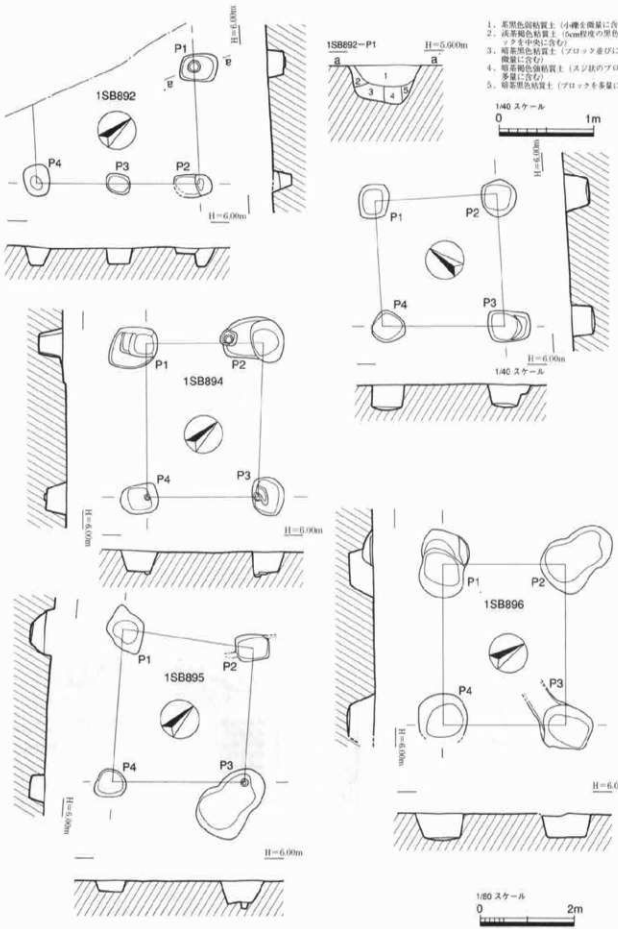


Fig.12　掘立柱建物（1SB892～896）実測図（1/40・1/80）

1SB896（Fig.12、Pla.12）

1SB895に隣接した掘立柱建物でR8区に位置する。先述したとおり柱穴P2は1SB895-P3と切り合いはあったものと思われるが、先後関係については現段階で不明である。梁行1間×桁行1間の建物で柱穴の平面プランは楕円形状を呈する。深さは0.52m程度を測り、梁行平均長は2.60m、桁行平均長は3.40m、桁行方位はN-31° 40′ 31″ -Eを示す。柱穴からは縄文土器、弥生土器、石器が出土した。

1SB897（Fig.13、Pla.12）

調査区南部U8区に位置する。柱穴P1～4で構成される梁行1間×桁行1間の掘立柱建物であり、P2は周溝状遺構（1SX475）に切られ、P3は竪穴住居（1SI104）を切るように確認された（P2は平面図作成の段階で図化し忘れていたため1/100から作成した上場ラインのみを平面図に作図した）。柱穴の平面プランは隅丸方形または楕円形状を呈し、深さは0.59～0.63m、P3底部では柱痕跡とみられる径25cmの小ピットが確認された。梁行平均長2.65m、桁行平均長2.85mを測り、桁行方位はN-37° 37′ 34″ -Eを示す。柱穴からは縄文土器、弥生土器、石器が出土した。

1SB898（Fig.13、Pla.13）

調査区南端部U5区に位置する梁行1間×桁行2間の掘立柱建物である。柱穴はP1～6を確認しており、竪穴住居（1SI104）及び周溝状遺構（1SX057・058・103）と複雑に切り合う。検証したところこれらの先後関係（古→新）は1SX057・1SI104→1SB898→1SX058・103と復元される。各柱穴の平面プランは隅丸長方形・楕円形状を呈し、深さは0.60～0.74m、P5底部からは径18cmの柱痕跡が確認された。梁行平均長3.75m、桁行平均長6.15mを測り、桁行方位はN-42° 58′ 08″ -Eを示す。柱穴からは縄文土器、弥生土器、石器が出土した。

1SB899（Fig.13）

調査区南端部N3区に位置した梁行1間×桁行1間の建物であり、柱穴P1・2は竪穴住居（1SI250）に、P4は不明遺構（1SX121）に切られる。柱穴の平面プランは不整円形・方形状を呈し、深さは0.56～0.61mを測る。P3底部からは柱を支えていたと思われる礎板痕跡が確認され、幅10cm前後、長さ45cm前後を測る。梁行平均長は2.80m、桁行平均長は2.85m、桁行方位はN-32° 09′ 08″ -Eを示す。柱穴からは弥生土器、石器が出土した。

1SB900（Fig.14）

調査区南東部K5区に位置した梁行1間×桁行2間の掘立柱建物で竪穴住居（1SI240）に切られる。柱穴はP1～6を検出し、平面プランは隅丸長方形または楕円形状を呈する。深さは0.58m前後を測り、P1～4の土層断面で径14～22cmの柱痕跡と礎板痕跡が確認された。更に、P1～3・4の柱穴底部からは柱を支えていたと思われる礎板痕跡が確認された。この礎板痕跡は横長に窪んだ溝状の痕跡に柱があったと思われる部分がやや幅広に拡張しているといった状況である。溝状部分は幅10～20cm、長さ75～85cm、柱支え部幅は20～25cmを測る。梁行平均長3.68m、桁行平均長5.60mを測り、梁行方位はN-35° 09′ 15″ -Wを示す。柱穴からは弥生土器が出土した。当調査区で最も最大の掘立柱建物となる。

1SB901（Fig.14）

調査区東端E11区に位置した梁行1間×桁行1間の建物で柱穴P1～4を検出した。当建物は1SB882と隣接しており、P4以外の柱穴は残存状態が悪い状況であったが、今回はP2は1SB882-P2と重複する柱穴として復元した。柱穴の平面プランは隅丸方形または楕円形状を呈し、梁行平均長2.50m、桁行平均長は3.03mを測る。梁行方位はN-26° 33′ 54″ -Wを示し、P4から縄文土器・弥生土器が出土した。

欄列

調査区の南西部に位置する。この付近はピットが集中している場所であり、どのようなセット関係にあるのか非常に苦慮したところであるが、ピットの規模から建物の想定は除外し、ここでは次のような欄列として報告することとした。

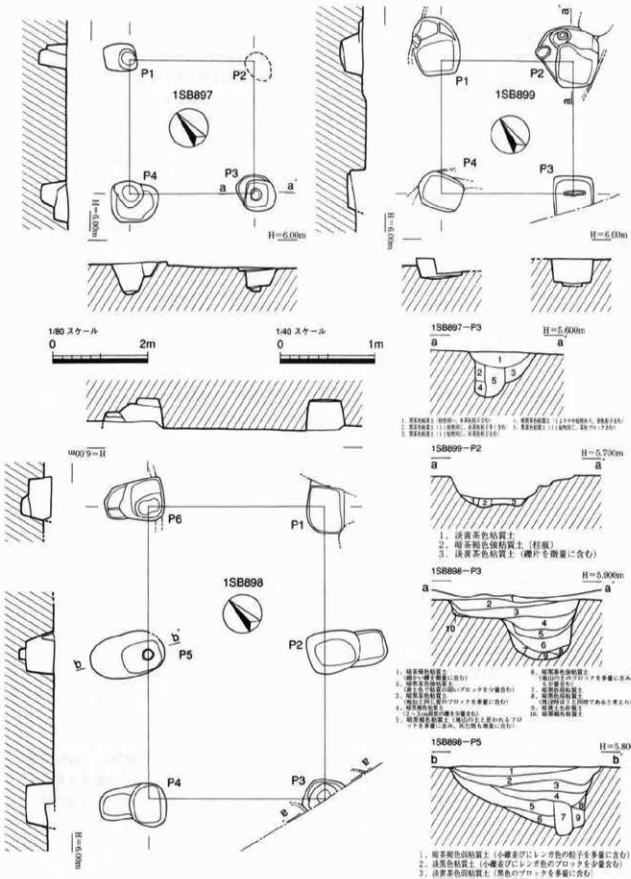


Fig.13　掘立柱建物（1SB897～899）実測図（1/40・1/80）

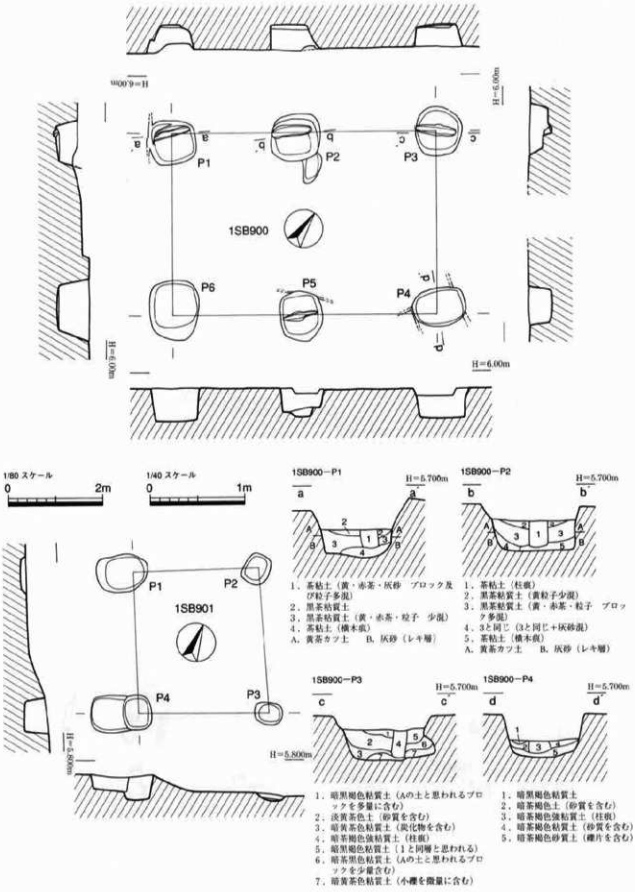


Fig.14 掘立柱建物（1SB900・901）実測図（1/40・1/80）

1SA902（Fig.15、Pla.13）

調査区南西部、Z7地区で確認した北西－南東方向の列でN-49° 31′ 29″ -Wを示す。P1～4の3間を確認し、柱穴は円形または楕円形を呈する。柱穴間の平均長は2.46m、深さは0.22～0.30mを測る。

1SA903（Fig.15、Pla.13）

調査区南西部、AB9地区で確認した北東－南西方向の列でP6は1SA902-P1と重複するため関連性が高いものと思われる。しかし、柱穴間の平均長は1.58mと大差であり、深さは0.20～0.36mを測る。N-45° -Eを示し、P1～6の5間を確認した。

1SA904（Fig.15、Pla.13）

調査区南西部、Y9地区に位置する。北西－南東方向の列でP1～6の5間を確認し、P6は1SA903-P1と重複するため関連性が高いものと思われる。方位はN-35° 09′ 15″ -Wを示し、柱穴間の平均長は1.58mと1SA903とほぼ同等になる。深さは0.12～0.28mを測る。

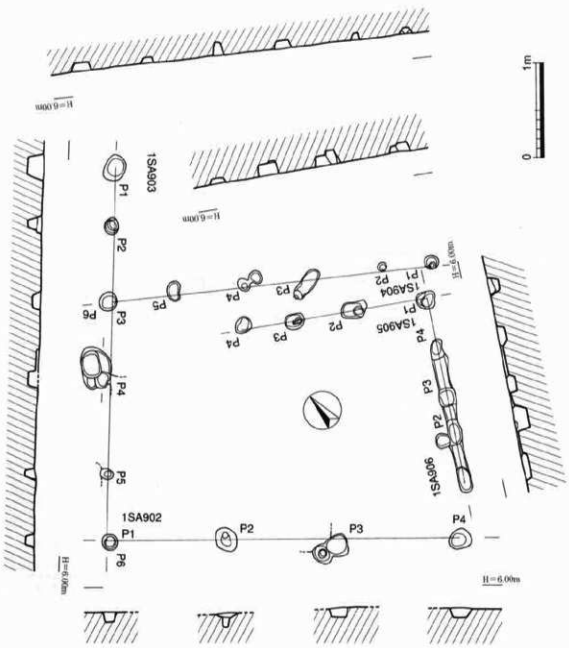


Fig.15 柵列（1SA902～906）実測図（1/80）

1SA905（Fig.15、Pla.13）

調査区南西部、Y9地区で確認した北西－南東方向の列でN-53° 07′ 48″ -Wを示す。P1～4の3間を確認し、柱穴は不整円形または隅丸方形を呈する。柱穴間の平均長は1.33m、深さは0.12～0.30mを測る。P1は1SA906-P5と重複し、セット関係にあるものと考えられる。

1SA906（Fig.15、Pla.13）

調査区南西部、Y8地区に位置する。北東－南西方向の列でP1～5の4間を確認した。P1～4間は布掘り状を呈し、P5は1SA905-P1と重複する。柱穴間の平均長は0.97m、深さは0.14～0.31mを測り、方位はN-29° 41′ 26″ -Eを示す。

周溝状遺構

1SX001（Fig.16、Pla.14）

調査区南西隅のAC7区に位置する。遺構の西側は調査区外へ展開するため全体プランについては不明であるが、円形タイプの周溝状遺構と考えられ、現状で外径4.00m、内径1.22m、深さ0.30m前後を測る。出土遺物は弥生土器（甕・壺・片）、石器が出土し、弥生時代中期後半から後期前半に属すると考えられる。

1SX056（Fig.16、Pla.14）

当遺構は調査区南端部W5区に位置する。周溝状遺構（1SX057）及び土坑（1SK059）に切られ、東方向へ1SX057→1SX058と連続して切り合う。遺構の南側は調査区外へ展開するために全体プランは不明であるが、平面プランはやや角のある方形状のタイプと想定され、現状で外幅3.50m、内幅2.07m、深さ0.15m前後を測る。黒茶色粘質土を基調とする埋土でレンズ状に自然堆積していた。遺物は弥生土器（片）、石器が出土したのみで図示に耐えない。

1SX057（Fig.16、Pla.14）

調査区南端部V5区に位置する。周溝状遺構（1SX056）を切り、周溝状遺構（1SX058）及び掘立柱建物（1SB898）に切られる。遺構の南側は調査区外へ展開するため全体プランは不明である。現状から平面プランは円形状のタイプと想定され、外径4.07m、内径1.85m、深さ0.34m前後を測る。黒茶色粘質土を基調とする埋土であり、遺物は弥生土器（片）、石器を認めたが図示に耐えない。

1SX058（Fig.16、Pla.14）

調査区南端部V4区に位置する。周溝状遺構（1SX057）を切り、掘立柱建物（1SB898）に切られる。遺構の南側は調査区外へ展開するため全体プランは不明である。深さは0.12m前後を測り、埋土は黒茶色粘質土を基調とする。遺物は弥生時代中期後半に属する弥生土器（甕・壺・片）、石器（磨製石剣）を認めるが、切り合いから混入品の可能性もある。

1SX088（Fig.16、Pla.15）

調査区南端部S5区に位置し、周溝状遺構（1SX103）南端部を僅かに切るように検出された。全体プランはやや扁平ではあるが円形タイプに属する周溝状遺構と考えられ、長軸3.35m、短軸2.65m、深さ0.21m前後を測る。溝の断面形はU字状もしくは逆台形状を呈し、黒茶色粘質土を基調とした埋土がレンズ状に堆積する。覆土中からは縄文土器（片）、弥生土器（甕・壺・片）、石器が出土し、弥生時代後期前半以降に機能していたと思われる。

1SX098（Fig.17、Pla.15）

調査区南端部S5区に位置し、竪穴住居（1SI260）を切るように検出した。遺構南部は調査区外へ展開するが、全体プランは長細い円形タイプの周溝状遺構と考えらる。外幅4.75m、内幅3.00m、深さは最大で0.48mを測る。溝の断面形は概ね逆台形状を呈し、黒茶色粘質土を基調とした埋土がレンズ状に自然堆積する。覆土中からは縄文土器（鉢・片）、弥生土器（甕・器台・片）、石器が出土し、弥生時代中期後半に機能していたと思われる。

1SX103（Fig.16、Pla.15）

調査区南端部S6区に位置し、周溝状遺構（1SX088）に切られる。全体プランからは円形タイプと思わ

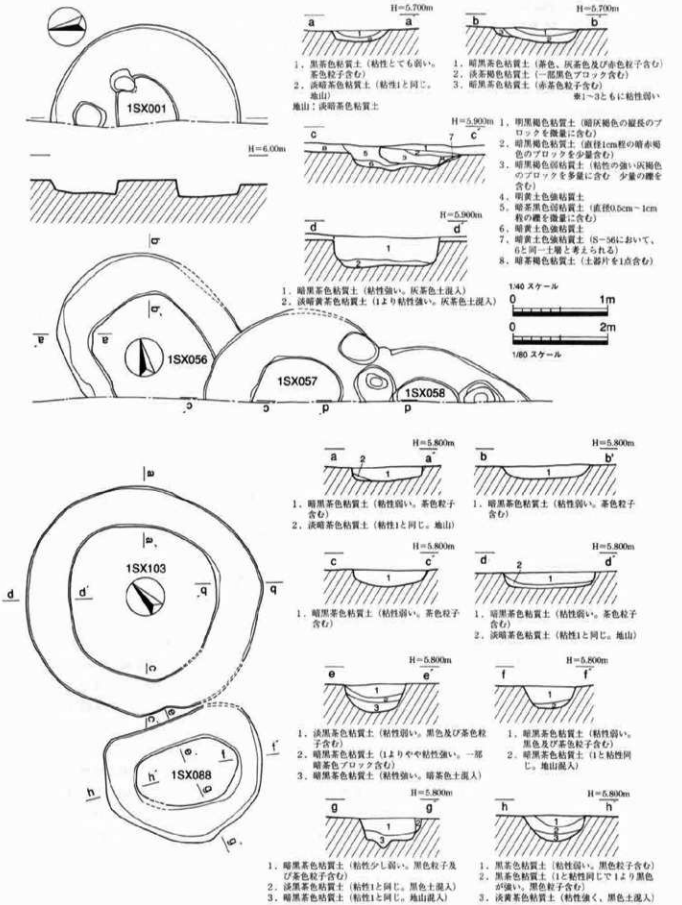


Fig.16　周溝状遺構（1SX001・056～058・088・103）実測図（1/40・1/80）

れる。外径の最大幅4.95m、内径の最大幅3.35m、深さ0.24m前後を測る。溝の断面形は概ね逆台形状を呈し、黒茶色粘質土を基調とした埋土である。覆土中からは縄文土器（鉢）、弥生土器（甕・壺・片）、石器が出土し、弥生時代後期以降に機能していたと思われる。

1SX128（Fig.17、Pla.15）

調査区南東部H2区に位置する。周溝状遺構（1SX088）に切られる。遺構南部は調査区外へ展開するため全体プランは不明であるが円形タイプの周溝状遺構と思われる。現状で外径の最大幅5.40m、内径の最大幅3.95m、深さ0.45m程度を測る。溝の断面形は逆台形状を呈し、黒茶色粘質土を基調とした埋土である。覆土中からは弥生土器（鉢・甕・壺・高坏・器台・支脚・片）、石器（砥石）等が出土し、弥生時代中期後半以降後期前半に属すると思われる。

1SX220（Fig.18、Pla.16）

調査区東端部H12区に位置する。全体プランは円形タイプに属し、外径の最大幅4.75m、内径の最大幅

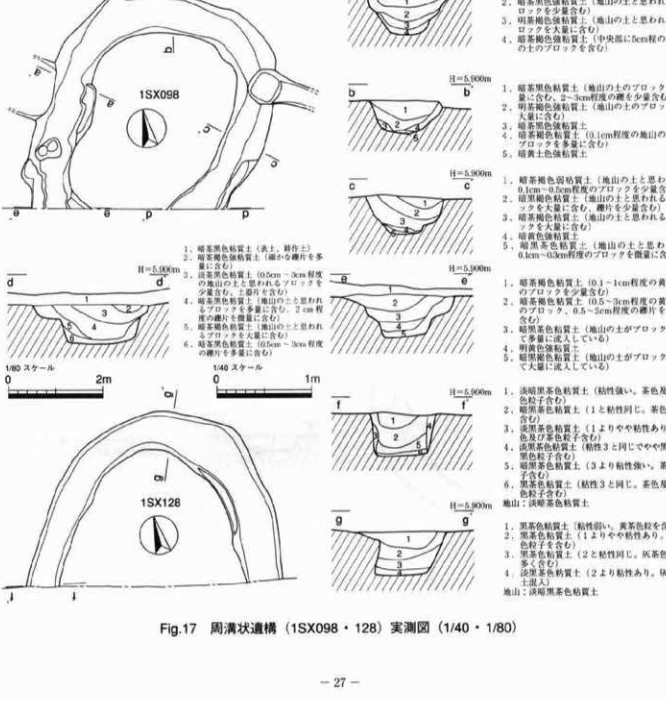


Fig.17　周溝状遺構（1SX098・128）実測図（1/40・1/80）

2.95m、深さは0.44m前後を測る。溝の断面形は逆台形状を呈し、黒茶色粘質土を基調とした埋土が自然堆積する。覆土中からは縄文土器（鉢）、弥生土器（甕・片）、石器が出土し、弥生時代後期以降に機能していたと思われる。

1SX310（Fig.18、Pla.16）

調査区中央部やや南よりのS10区に位置する。当調査区で確認した最も大きい周溝状遺構であり、掘立柱建物（1SB895）及び溝（1SD316）に切られる。全体プランからは方形または円形のどちらのタイプに属するかは不明である。外径の最大幅6.15m、内径の最大幅3.35m、深さ0.24m前後を測る。溝の断面形

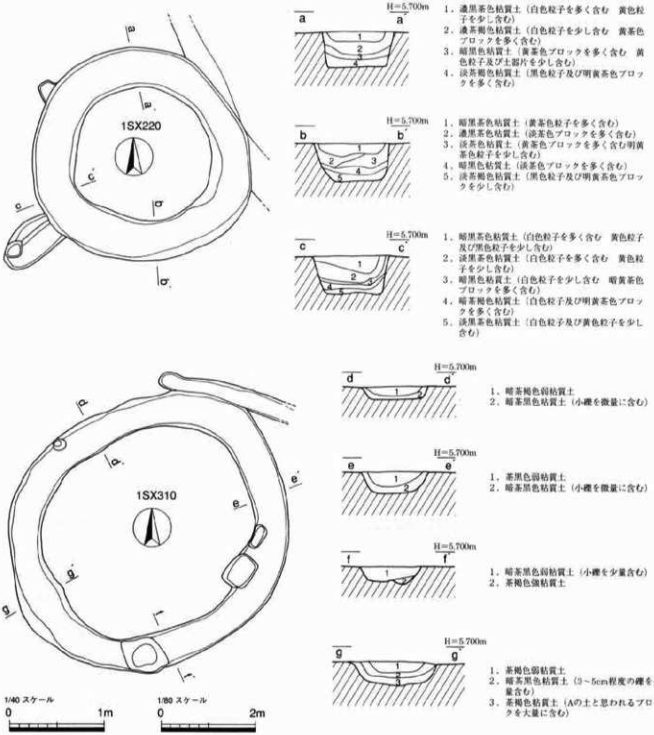


Fig.18　周溝状遺構（1SX220・310）実測図（1/40・1/80）

は概ね逆台形状を呈し、黒茶色粘質土を基調とした埋土が堆積する。覆土中からは縄文土器（鉢）、弥生土器（甕・壺・片）、石器が出土し、弥生時代後期以降に機能したと思われる。

1SX315（Fig.19、Pla.16）

調査区中央部R10区に位置する。当調査区内で最も小さい円形を呈した周溝状遺構であり、規模は外径最大幅2.90m、内径最大幅2.23m、深さ0.03m前後を測る。当遺構は残存状態が悪いために溝（1SD200・316）と切り合いについては判然としなかった。黒茶色粘質土を基調とした埋土で縄文土器（片）、弥生土器（片）、石器が出土した。

1SX475（Fig.19、Pla.17）

調査区中央部やや南よりのZ13区に位置する。掘立柱建物（1SB897）を切る円形タイプの周溝状遺構であり、外径最大幅3.65m、内径最大幅2.03m、深さ0.41m前後を測る。断面形は概ね逆台形状を呈し、黒茶色粘質土を基調とした埋土がレンズ状に堆積する。覆土中からは縄文土器（鉢）、弥生土器（甕・器台・片）、石器が出土し、弥生時代後期前半以降に機能していたと思われる。

溝

1SD200・316

調査区南下半部を東西方向にはしる溝であり、途中は1SD200及び1SD316で途切れる。1SD200は約42.5m、1SD316は約5.2m分を検出し、やや離れた西側では溝状遺構（1SD366・743）が確認されている。一連の溝である可能性が強い。当溝は竪穴住居（1SI240）・掘立柱建物（1SB900）・周溝状遺構（1SX315）・土坑（1SK400）に切られ、方位はN-65° 40′ 50″ -Wを示す。溝は極めて残存状態が悪く、1SD200から僅かに弥生土器（片）が出土したのみで図示には耐えない。

1SD585（Fig.20）

調査区西端部を南北方向にはしる溝であり、南北の両端部は調査区外へ延びる。約24.5m分を検出し、幅0.50～0.70m、深さ0.30～0.35m、方位はN-24° 06′ 08″ -Eを示す。溝の断面形は概ね逆台形状を呈

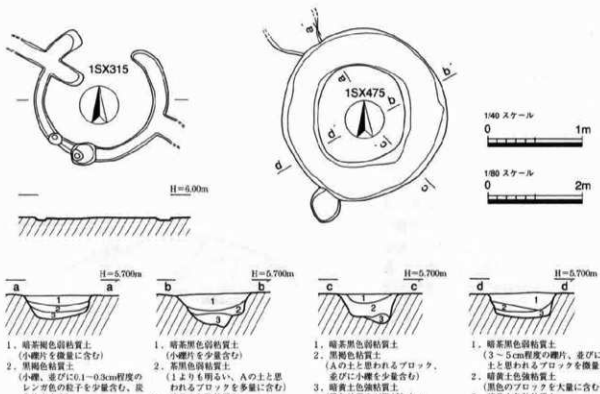


Fig.19　周溝状遺構（1SX315・475）実測図（1/40・1/80）

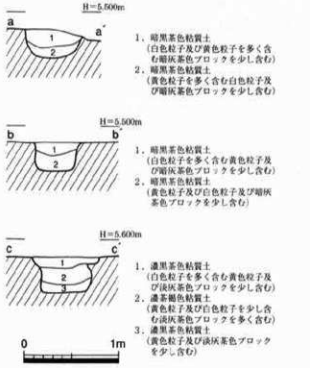


Fig.20　溝（1SD585）
土層断面実測図（1/40）

し、黒茶色粘質土を基調とした埋土が堆積する。縄文土器（片）、弥生土器（甕・壺）が出土した。

不明遺構

1SX116（Fig.21）

調査区南端部Q4区に位置する。当遺構は調査時に竪穴住居である可能性が考えられたが、遺構の深さは最大で0.06mと極めて残存状態が悪く、また東部は不明遺構（1SX117）を切り、西部は周溝状遺構（1SX098）に切られ、南部は調査区外へ展開することなど全体的に詳細な部分がつかめなかったことから不明遺構とした。出土遺物は縄文土器（片）、弥生土器（片）、石器が認められており、弥生時代後期以降の遺構である可能性が考えられる。

1SX117（Fig.21）

調査区南端部P3区に位置し、先述した不明遺構（1SX116）に切られる。1SX116と同様に調査時は周辺で検出した竪穴住居である可能性が考えられた

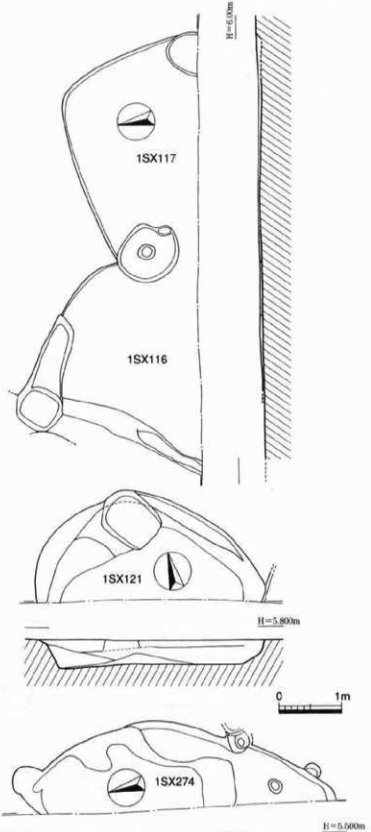


Fig.21　不明遺構（1SX116・117・121・274）
実測図（1/60）

が、全体規模の不確定や残存状態が悪かったことなどから不明遺構とした。出土遺物は縄文土器（片）、弥生土器（片）、石器が認められており、弥生時代後期以降の遺構であると思われる。

1SX121（Fig.21）

調査区南端部N3区に位置した半円状の遺構である。掘立柱建物（1SB899）に切られ、南半部は調査区外へ展開するため全体規模は不明である。深さは最大で0.48mを測り、遺構内部の北縁には細長いテラスを呈する。出土遺物は弥生土器（甕・器台・片）、須恵器（甕）、土師器（小皿）、瓦器（塊）、磁器（片）、石器（敲石・砥石）等が認められており、中世以降の遺構であると思われる。

1SX274（Fig.21）

調査区南西端部AB9区に位置した半円状の遺構であり、西部は調査区外へ展開する。遺構は南部から北部にかけて徐々に深くなっており、最大で0.37mを測る。黒茶色粘質土を基調とした埋土であり、覆土中からは弥生土器（甕・器台・片）が出土しており、弥生時代後期以降に属すると思われる。

土坑

1SK017（Fig.22）

調査区南西端部AA8区に位置する。遺構は1SP018に切られ、1SK019・615、1SP041・045・079を切る。平面プランは不整楕円形状を呈し、長軸4.03m、短軸2.45m、深さ0.18mを測る。遺構底部は凹凸が著しく、埋土は黒茶色土を基調とする。弥生時代後期に属すると思われる弥生土器（甕・片）、石器（石鏃）等が出土した。

1SK025（Fig.22）

調査区南西端部Z8区に位置する。遺構は1SP026に切られ、1SK0603・604を切る。平面プランは不整楕円形状を呈し、長軸2.20m、短軸1.28m、深さ0.18mを測る。埋土は黒茶色土を基調とし、弥生土器（片）が僅かに出土した。

1SK397（Fig.22、Pla.17）

調査区中央部O14区に位置する。平面プランは楕円形状を呈し、長軸3.23m、短軸1.35m、深さ0.39mを測る。遺構内の北縁にテラスを認め、底部はほぼ平坦な状態を呈する。埋土は黒茶色土を基調とし、縄文土器（片）、弥生土器（甕・器台・片）が出土しており、弥生時代後期に機能していた可能性が考えられる。

1SK400（Fig.22、Pla.18）

調査区中央部P10区に位置する。当調査区で確認された最も大きい土坑であり、平面プランはほぼ楕円形状を呈する。東西にはしる溝（1SD200）を切り、長軸5.53m、短軸2.12m、深さ0.34mを測る。遺構底部はほぼ平坦であり、埋土は黒茶色粘質土を基調とする。遺物は縄文土器（片）、弥生土器（甕・壺・高坏・器台・片）、石器（敲石）等が出土し、弥生時代後期前半以降に機能していた可能性が考えられる。

1SK428（Fig.22）

調査区中央部R14区に位置する。平面プランは楕円形状を呈し、南部はS-823を切る。長軸3.06m、短軸0.79m、深さ0.11mを測る。遺構底部はほぼ平坦であり、埋土は黒茶色土を基調とする。遺物は縄文土器（片）、弥生土器（甕・壺・片）、石器（砥石）等が出土し、弥生時代後期前半以降に機能していた可能性が考えられる。

1SK430（Fig.22、Pla.18）

調査区中央部やや西よりのU13区に位置する。平面プランは楕円形状を呈し、南西部は1SK431を切る。幅0.76m、深さ0.35mを測り、遺構底部からは弥生時代後期前半に属する甕が横たわった状態で確認された。他に弥生土器（器台・片）も出土しており、当該期に機能していた可能性が考えられる。

1SK431（Fig.22）

先述した1SK430に切られた状態で検出された土坑で、調査区中央部やや西よりのU13区に位置する。平面プランは楕円形状を呈し、幅0.94m、深さ0.38mを測る。埋土は黒茶色土を基調とし、遺物は弥生土

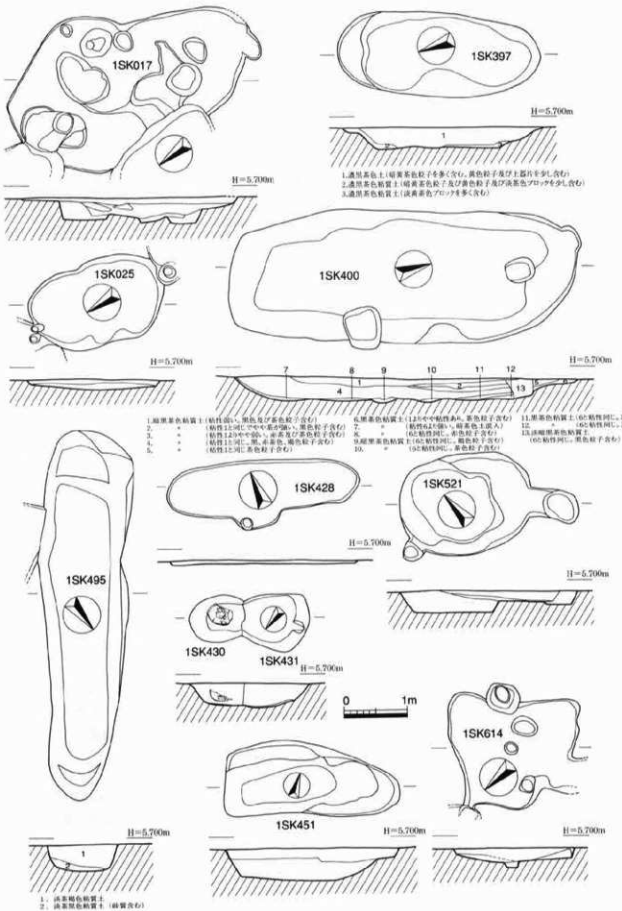


Fig.22

土坑（1SK017・025・397・400・428・430・431・451・495・521・614）実測図（1/40）

器（片）が僅かに出土したのみである。

1SK451（Fig.22）

調査区西側X15区に位置する。平面プランは楕円形状を呈し、遺構内のほぼ周縁にテラスがめぐる。長軸2.78m、短軸1.10m、深さはテラス部で0.15～0.17m、底部は最大0.52mを測る。埋土は黒茶色土を基調とし、遺物は縄文土器（片）、弥生土器（甕・片）、石器等が出土した。

1SK495（Fig.22）

調査区南部O6区に位置した細長い楕円形状の土坑であり、遺構の南東部隅は竪穴住居（1SI860）と僅かに接するが、切り合いは遺構内の北東部及び南西部の両端にテラスを認め、底部は概ねフラットな状態である。長軸5.90m、短軸1.31m、深さは最大0.56mを測り、埋土は黒茶色土を基調とする。遺物は弥生時代中期後半～後期前半を主体とする弥生土器（甕・壺・鉢・高坏・器台・片）、石器（敲石）等が出土した。

1SK521（Fig.22）

調査区西側X16区に位置し、S-452を切るように検出した。平面プランは楕円形状を呈し、長軸2.08m、短軸1.64m、深さは最大0.35mを測る。埋土は黒茶色土を基調とし、遺物は縄文土器（片）、弥生土器（甕・高坏・片）、石器等が出土した。弥生時代後期前半以降に機能していた可能性が考えられる。

1SK614（Fig.22）

調査区南西部AA9区に位置した不整形な土坑であり、長軸2.00m、短軸1.70m、深さは最大で0.23mを測る。埋土は黒茶色土を基調とし、遺物は弥生時代後期前半に属する弥生土器（甕・壺・器台・高坏・片）、石器（砥石）等が出土しており、当該期に機能していた可能性が考えられる。

ピット

1SP343（Fig.23）

調査区西部Z12区に位置する。平面プランは隅丸方形状を呈し、幅0.73～0.98m、深さは最大で0.47mを測る。底部中央部からは小ピットを認められ、柱穴であった可能性が考えられる。土層観察から柱は抜き取られた可能性が考えられる。弥生土器（甕・高坏・片）が出土している。

1SP416（Fig.23）

調査区東側H14区に位置する。平面プランは楕円形状を呈し、幅0.93～1.20m、深さは最大で0.23mを測る。縄文土器（片）、弥生土器（壺・片）、石器（砥石）が出土している。

1SP457（Fig.23）

調査区西側Z15区に位置する。平面プランはほぼ楕円形状を呈し、幅0.93～1.12m、深さは最大で0.43mを測る。土層観察からは径27cmの柱痕が確認されていることから柱穴であった可能性が考えられる。弥生土器（甕・片）、石器（石鏃）が出土している。

1SP458（Fig.23）

調査区西側Z15区に位置する。平面プランはほぼ楕円形状を呈し、幅0.93～1.17m、深さは最大で0.43mを測る。弥生土器（甕・鉢・高坏・片）が出土している。

1SP461（Fig.23）

調査区西部Y14区に位置する。平面プランはほぼ楕円形状を呈し、遺構北部はS-460に切られる。幅1.00m前後、深さは最大で0.47mを測る。黒茶色粘質土を基調とした埋土であり、弥生土器（甕・鉢・片）が出土している。

1SP465（Fig.23）

調査区西端部AA14区に位置する。遺構東部はS-466と接し、西部は調査区外へ展開するために遺構の規模については不明である。黒茶色土を基調とした埋土であり、弥生土器（甕・器台・片）が出土した。

1SP627（Fig.23）

調査区中央部P9区に位置する。平面プランは隅丸方形状を呈し、幅0.73m前後、深さは最大で0.42m

を測る。底部に柱痕跡と思われる小ピットを認め、柱穴であった可能性が考えられる。黒茶色粘質土を基調とした埋土であり、弥生土器（甕・片）が出土している。

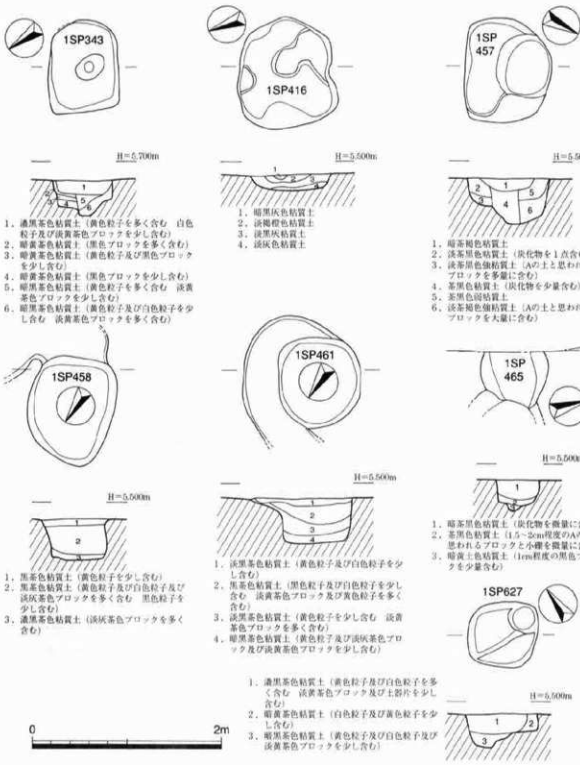


Fig.23　ピット（1SP343・416・457・458・461・465・627）実測図（1/40）

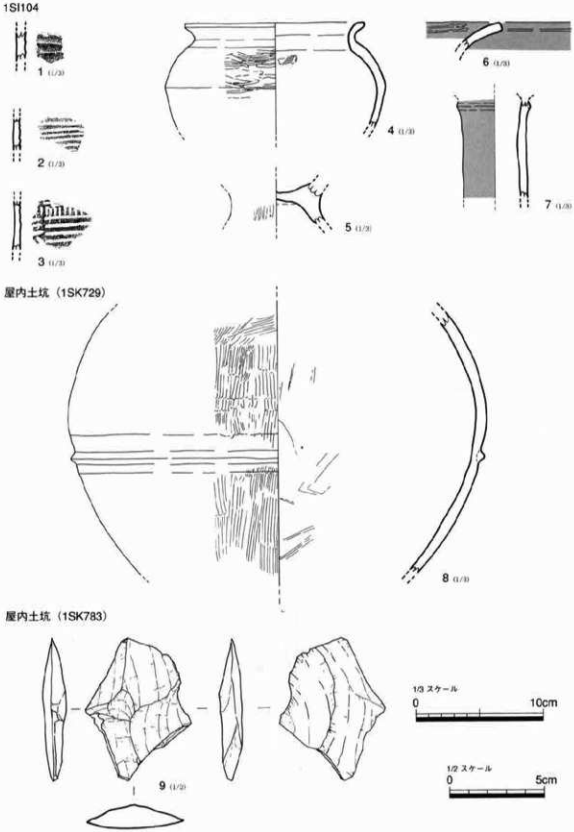


Fig.24　竪穴住居（1SI104）出土遺物実測図（1/3・1/2）

(3) 出土遺物

竪穴住居

1SI104 (Fig.24、Pla.19)

縄文土器

鉢 (1～3)　1～3はすべて細片である。胎土に滑石を含み、外面には沈線文を施す。曽畑式土器と思われ、縄文時代前期の所産と考えられる。

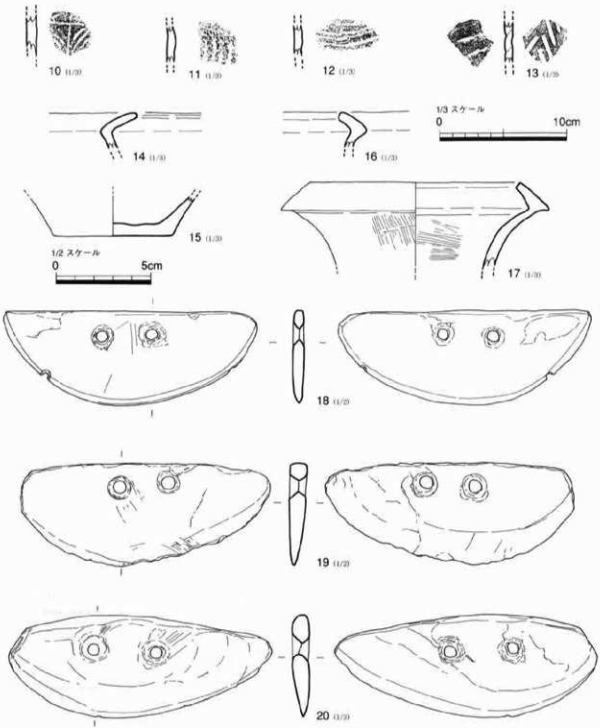


Fig.25　竪穴住居 (1SI240) 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

弥生土器

甕（4・5）　4は口縁部は弧状に小さく外反し、口径14.2cmを復元する。外面肩部付近にミガキ痕が残り、内面は工具ナデで仕上げる。肩部付近に煤が付着する。5は脚台が貼付けられるタイプの底部細片である。

高坏（6・7）　6は口縁部細片であり、外面には丹塗りが施される。7は脚部の細片で上位に断面三角形状の貼付突帯、外面には丹塗りが施される。

1SI104 屋内土坑

1SK729（Fig.24、Pla.19）

弥生土器

壺（8）　胴部の破片でやや扁平な球形を呈する。最大径は32.6cmを復元し、断面三角形状の貼付突帯を1条施す。

1SK783（Fig.24、Pla.19）

石器

使用剥片（9）　石材はサヌカイト製である。長さ7.5cm、幅5.6cm、厚さ1.2cm、重さ33.1ｇを計測する。

1SI1240（Fig.25、Pla.19・20）

縄文土器

鉢（10～13）　10～13はすべて細片であり、外面には沈線文を施す。13は胎土に滑石を含む。曽畑式土器と思われ、縄文時代前期の所産と考えられる。

弥生土器

甕（14・15）　14は「く字状」を呈する口縁部細片で上面はやや丸みを帯びる。15は底部細片で平底を呈する。底部から胴部にかけてはほぼ直線的に立ち上がる。

壺（16・17）　共に稜線のある袋状口縁を呈する細片である。17は朝顔形に開く頸部を呈するものと思われる。

石器

石包丁（18～20）　18・19は外湾刃半月形を呈した磨製石包丁である。刃部は両刃、体部に円形を呈する紐孔を表裏面から2孔穿たれる。18は片岩製であり、長さ13.4cm、幅4.9cm、厚さ0.6cm、重さ64.3ｇ、19は緑泥片岩製であり、長さ13.2cm、幅5.3cm、厚さ0.9cm、重さ83.1ｇを計測する。20は杏仁形を呈した粘板岩製の磨製石包丁であり、刃部は両刃、体部に円形の紐孔を表裏面から2孔穿つ。長さ13.8cm、幅5.4cm、厚さ0.9cm、重さ85.2ｇを計測する。

1SI260（Fig.26、Pla.20）

縄文土器

鉢（21～26）　21・22は口縁部細片であり、21は外面に沈線文、22は内外面に沈線文、端部に刺突文を施す。23～26は細片で、25・26は胎土に滑石を含み、26は焼成前に3.5mmの穿孔が穿たれている。何れも曽畑式土器と思われ、縄文時代前期の所産と考えられる。

弥生土器

鉢（27・28）　27は丸みを帯びた口縁部を呈する。28は底部細片で平底を呈し、底径は3.4cmを測る。

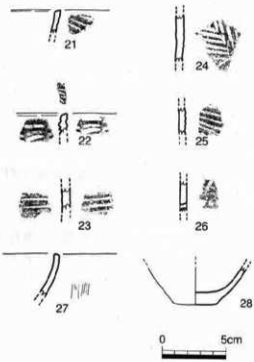


Fig.26　竪穴住居（1SI260）
出土遺物実測図（1/3）

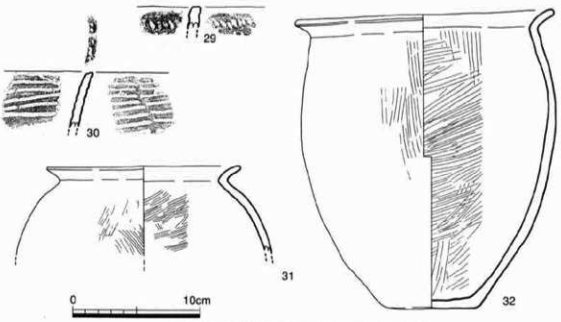


Fig.27　竪穴住居（1SI480）出土遺物実測図（1/3）

1SI480（Fig.27、Pla.20）

縄文土器

鉢（29・30）　共に口縁部細片であり、29は内外面に刺突文、30は内外面に沈線文、端部に刺突文を施す。曽畑式土器と思われ、縄文時代前期の所産と考えられる。

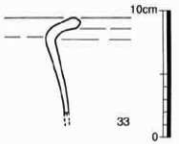


Fig.28　竪穴住居（1SI493）
出土遺物実測図（1/3）

弥生土器

鉢（31・32）　31は「く字状」口縁を呈し、口径は15.1cmを復元する。32は「く字状」口縁に緩やかな胴部と平底を呈する中型の甕で、胴部の最大径はやや上半にある。胴部から底部にかけてやや内湾した底部を呈し、口径20.2cm、底径7.2cm、器高23.3cmを測る。外面に煤が付着する。

1SI493（Fig.28、Pla.20）

弥生土器

甕（33）　「く字状」を呈する口縁部の細片で胴部は張らない。

1SI765（Fig.29、Pla.21）

石器

石鏃（34）　石材はサヌカイト製。二等辺三角形状を呈するが、先端部は欠損する。表面にはネガティブ面、裏面にはポジティブ面、裏面基端部に自然面を認める。表面左辺及び裏面右辺にリタッチを加えて刃部を作り出す。重さ6.9gを量る。

円盤（35）　ほぼ円形を呈した磨製円盤であり、石材は片岩製である。径は3.2cm前後、厚さ0.4cm、重さ6.8gを計測する。

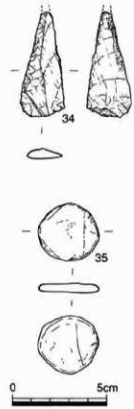


Fig.29　竪穴住居（1SI765）
出土遺物実測図（1/2）

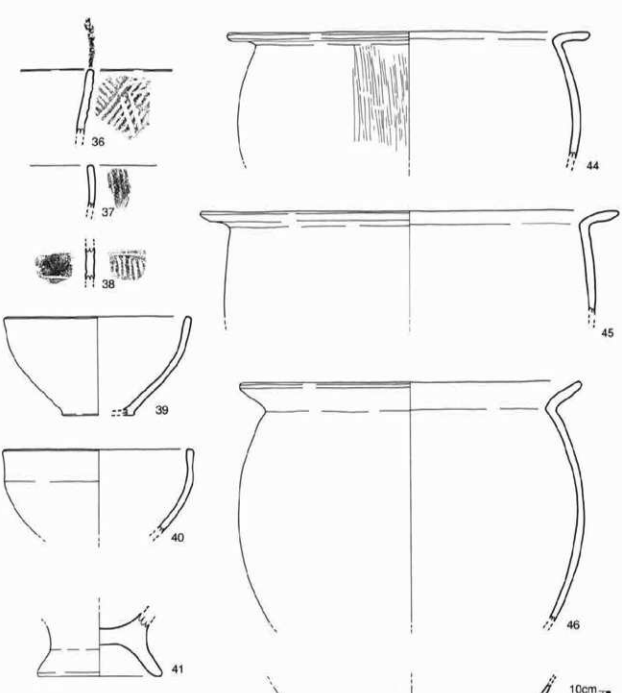


Fig.30　竪穴住居（1SI860①）出土遺物実測図（1/3）

1SI860（Fig.30・31、Pla.21・22）

縄文土器

鉢（36～38）　36・37は口縁部の細片で、胎土に多くの滑石を含む。36は口縁端部に刺突文、外面に沈

線を施し、38は内外面に沈線文、端部に刺突文を施す。曽畑式土器か？

弥生土器

鉢（39・40）　39は口径14.8cm、底径5.7cm、器高7.8cmを復元する。口縁部はやや丸みを帯び、底部は平底を呈する。40は口径15.0cmを復元する。体部と口縁部の境に稜線を認め、口縁部は外反気味に立ち上がる。

甕（41～48）　41・42は台付甕の底部である。41は「ハ」字状に開いた脚台を呈し、底径9.6cmを復元する。42は外反した「ハ」字状の脚台を呈し、底径10.0cmを復元する。43は底部破片で底径8.6cmを復元する。底部から胴部への立ち上がりは緩やかに内湾した曲線を描く。44は「逆L字状」口縁を呈し、胴部は緩やかな曲線を描く。口径は28.6cmを復元する。45は「逆L字状」から「く字状」へと移行する段階の土器と思われる。口縁端部は断面三角形状にやや肥厚し、口径33.0cmを復元する。46はやや長めの「く字状」口縁を呈し、口径27.0cmを復元する。47・48は最大径を口径よりも胴部に持つタイプであり、口縁部は丸みを帯びた「く字状」口縁を呈する。47は口径24.0cmを測り、48は口径30.8cm、胴部最大径61.4cmを復元する。大きさから甕棺と思われ、胴部には断面三角形状の貼付突帯を1条施す。

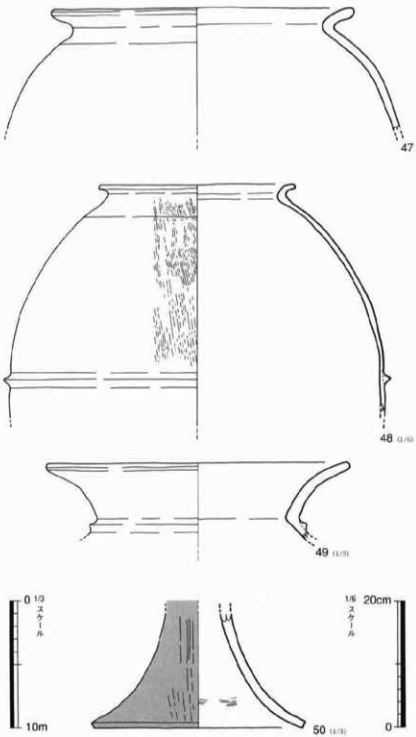


Fig.31　竪穴住居（1SI860②）出土遺物実測図（1/3・1/6）

壺（49）　口縁部破片で口径は23.8cmを復元する。肩部から口縁部にかけての頸部はラッパ状に外反し、境には断面三角形状の貼付突帯を施す。

高坏（50）　脚部の破片で緩やかに大きく外反する。脚部径は16.6cmを復元し、外面には丹塗りが施されている。

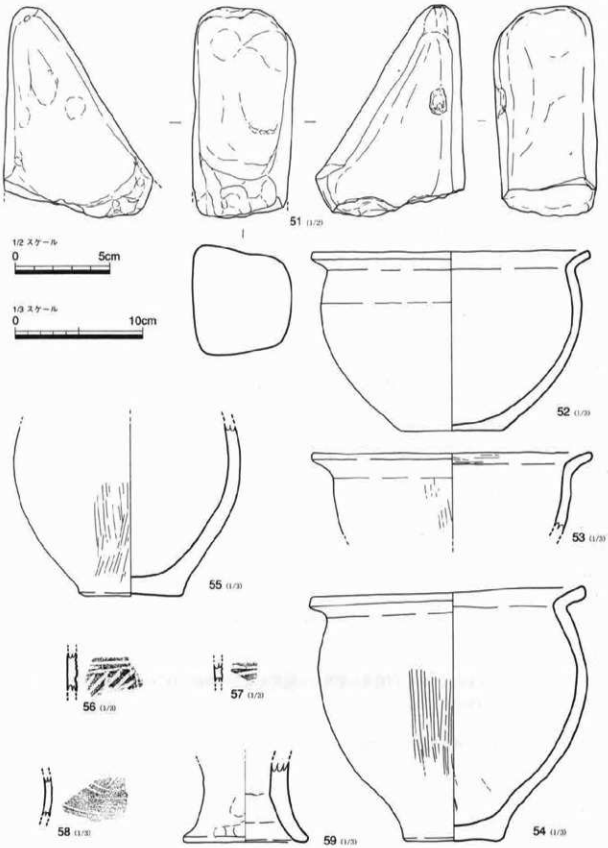


Fig.32　掘立柱建物（1SB881～883・889）出土遺物実測図（1/3・1/2）

掘立柱建物

1SB881-P4（Fig.32、Pla.22）

石器

砥石（51）　石材は安山岩製で長さ11.1cm、最大幅5.2cm、厚さ5.8cm、重さ570.0ｇを計測する。表裏面及び両側面を砥面として使用している。

1SB882-P3（Fig.32、Pla.22）

弥生土器

鉢（52）　「く字状」を呈する口縁部で底部は平底になる。口径21.8cm、底径8.0cm、器高14.2cmを復元する。

1SB882-P4（Fig.32、Pla.22）

弥生土器

鉢（53～55）　53は口径22.0cmを復元し、口縁部は緩やかに外反する。54は口径21.3cm、底径8.0cm、器高19.6cmを測る。口縁部は「く字状」を呈し、胴部は丸みを持ちながら上半に最大径を保つ。底部は平底を呈し、胴部にかけては底部を意識するように内湾気味に立ち上がる。55は54と同様な器形を呈し、底径8.2cmを測る。

1SB883-P4（Fig.32）

縄文土器

鉢（56）　口縁部細片で外面に沈線文が施される。胎土に滑石を多く含み、曽畑式土器と思われる。

1SB889-P2（Fig.32、Pla.22）

縄文土器

鉢（57・58）　共に細片で外面に沈線文が施される。胎土に滑石を多く含む。

弥生土器

器台（59）　脚部の破片で底径9.6cmを測る。

1SB892-P1（Fig.33、Pla.22・23）

弥生土器

鉢（60）　底径7.6cmを復元する。底部は平底を呈し、底部から胴部への立上がりはやや内湾気味に立ち上がる。

甕（61）　口縁部細片で断面台形状の突帯を貼付け、端部に刻み目を施す。

壺（62）　袋状口縁の端部細片で境には稜線を認める。

1SB892-P3（Fig.33、Pla.23）

弥生土器

鉢（63）　底径5.4cmを復元し、胴部へはほぼ直線的に立ち上がる。

1SB894-P1（Fig.33、Pla.23）

弥生土器

鉢（64）　底径11.6cmを復元する。円盤状に肥厚した底部を呈し、胴部へは外方へ湾曲気味に立ち上がる。

1SB895-P1（Fig.33、Pla.23）

縄文土器

鉢（65）　口縁部細片で外面に刺突文が施される。

石器

石錘（66）　サヌカイト製の縦長菱形状剥片を利用する。長さ3.6cm、幅2.7cm、重さ4.3cmを計測し、錘部の断面形は菱形を呈する。表裏面にはネガティヴ面を大きく残す。未製品か？

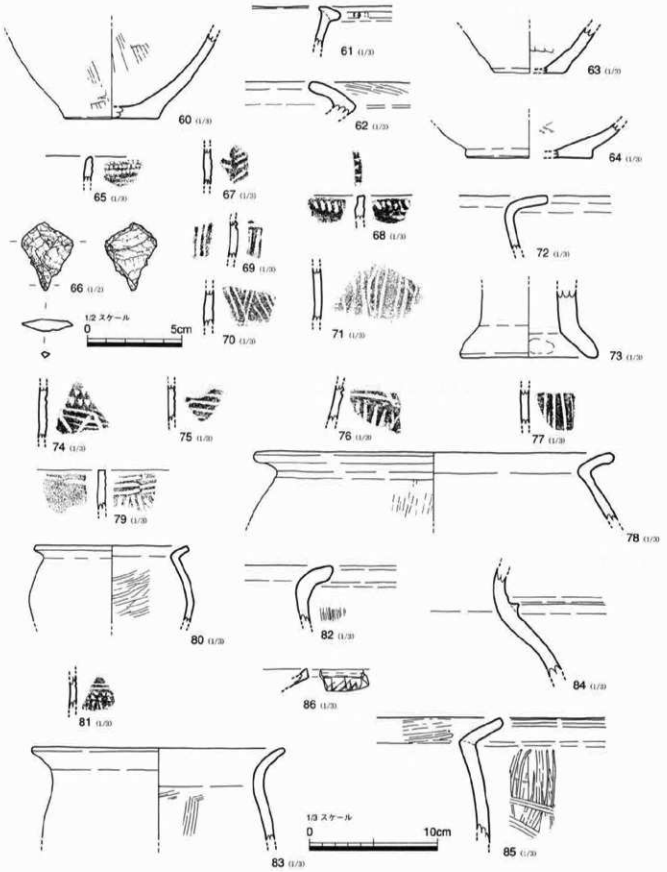


Fig.33　掘立柱建物（1SB892・894～898）出土遺物実測図（1/3・1/2）

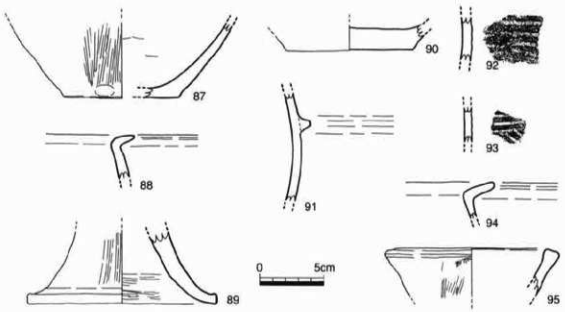


Fig.34　掘立柱建物（1SB899～901）出土遺物実測図（1/3）

1SB895-P2（Fig.33）

縄文土器

鉢（67）　細片で外面に沈線文が施される。胎土に滑石を多く含み、曽畑式土器と思われる。

1SB895-P3（Fig.33・Tab.23）

縄文土器

鉢（68～71）　68は口縁部細片で内外面に刺突文が施される。69～71は外面に沈線文を施す。

弥生土器

甕（72）　口縁部細片で「く字状」口縁を呈する。

器台（73）　下部破片で脚部径は11.0cmを復元する。器厚が厚く、下部は屈曲する。

1SB896-P1（Fig.33）

縄文土器

鉢（74）　外面上位に刺突文、下位に沈線文が施される。胎土に滑石を多く含む。

1SB896-P3（Fig.33）

縄文土器

鉢（75）　細片で胎土に滑石を多く含み、外面に沈線文が施される。曽畑式土器と思われる。

1SB896-P4（Fig.33、Pla.23）

縄文土器

鉢（76・77）　共に曽畑式土器の細片と思われる。胎土に滑石を多く含み、外面に沈線文が施される。

弥生土器

甕（78）　口縁部細片で「く字状」口縁を呈する。口径28.4cmを復元する。

1SB897-P1（Fig.33、Pla.23）

縄文土器

鉢（79）　口縁部細片で内外面に沈線文が施される。

1SB898-P1（Fig.33、Pla.23）

弥生土器

鉢（80）　口径12.0cmを復元する。口縁部は「く字状」を呈し、胎土に微砂粒、角閃石、金雲母を含む。

1SB898-P2（Fig.33、Pla.24）

縄文土器

鉢（81） 外面に刺突文が施されている。胎土は微砂粒、角閃石、金雲母を含む。

弥生土器

甕（82・83） 82は肥厚した口縁部を呈する。83は緩やかに外反する口縁部を呈し、口径は20.0cmを復元する。

壺（84） 壺の頸部から肩部にかけての細片で境には断面三角形の貼付突帯が1条施される。

1SB898-P4（Fig.33、Pla.24）

弥生土器

甕（85） 「く字状」に鋭く屈曲した口縁部を呈する。

不明（86） 細片で外面に暗文が施される。

1SB899-P2（Fig.34、Pla.24）

弥生土器

鉢（87） 底部破片で底径9.1cmを復元する。平底を呈し、若干底部を意識した作りとなっている。

甕（88） 「く字状」口縁を呈し、端部にしたがって細く尖り気味になる。

1SB899-P3（Fig.34、Pla.24）

弥生土器

高坏（89） 脚部細片で脚裾部径は14.8cmを復元する。端部にかけて細く開き、端部は平坦である。

1SB900-P5（Fig.34、Pla.24）

弥生土器

甕（90） 大型の底部細片で底径10.0cmを復元する。肥厚した平底を呈し、甕棺である可能性が考えられる。

壺（91） 胴部破片で断面台形状の貼付突帯を1条施す。

1SB901-P4（Fig.34、Pla.24）

縄文土器

鉢（92・93） 共に細片で外面に沈線文が施される。

弥生土器

甕（94） 「く字状」口縁を呈する。胎土は微砂粒、金雲母を含む。

器台（95） 口径13.8cmを復元する。器台としたが他器種の可能性もある。

柵列

1SA903-P1（Fig.35、Pla.24）

弥生土器

壺（96） 頸部から上半を欠損した壺で胴部最大径24.5cm、底径8.3cmを測る。頸部と肩部の境に断面三角形の貼付突帯を2条を施す。底部は凸レンズ状平底を呈し、胴部にかけての立ち上がりはやや外湾気味である。

1SA903-P4（Fig.35、Pla.24・25）

弥生土器

甕（97・98） 97は口径28.4cmを復元する。「く字状」口縁を呈し、端部にかけては長く上方へやや反る。98は底部破片で底径7.2cmを復元する。平底を呈し、胴部へは丸みを帯びながら立ち上がる。

器台（99） 脚部は直線的に「ハ字状」に開き、脚裾径は13.8cmを復元する。

石器

砥石（100） 石材は安山岩製と思われる。現存の長さ11.0cm、幅7.3cm、重さ565.0gを計測し、表裏面及び側面の4面を砥面として使用している。

1SA903-P5（Fig.35、Pla.25）

弥生土器

甕（101・102）　共に「く字状」口縁を呈する。101は口径21.2cm、102は26.4cmを復元する。

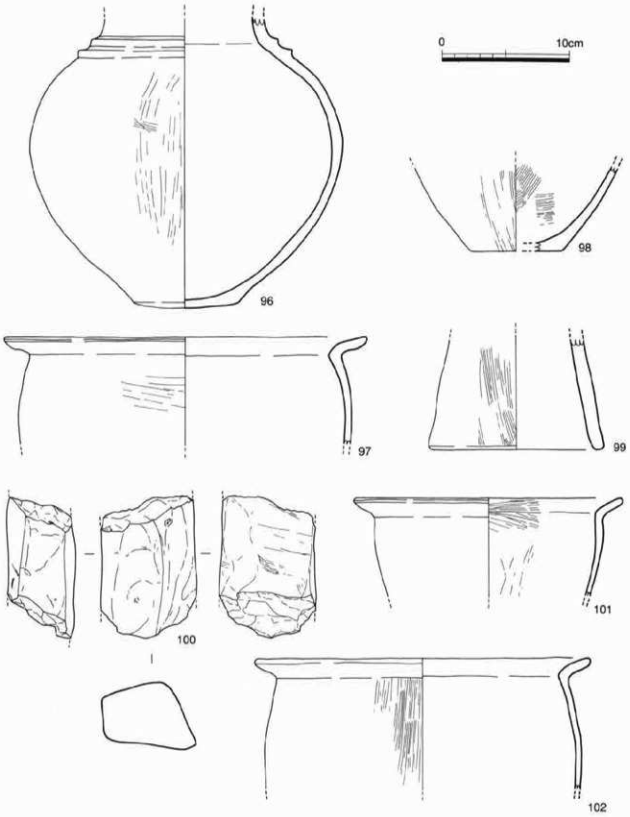


Fig.35　柵列（1SA903）出土遺物実測図（1/3）

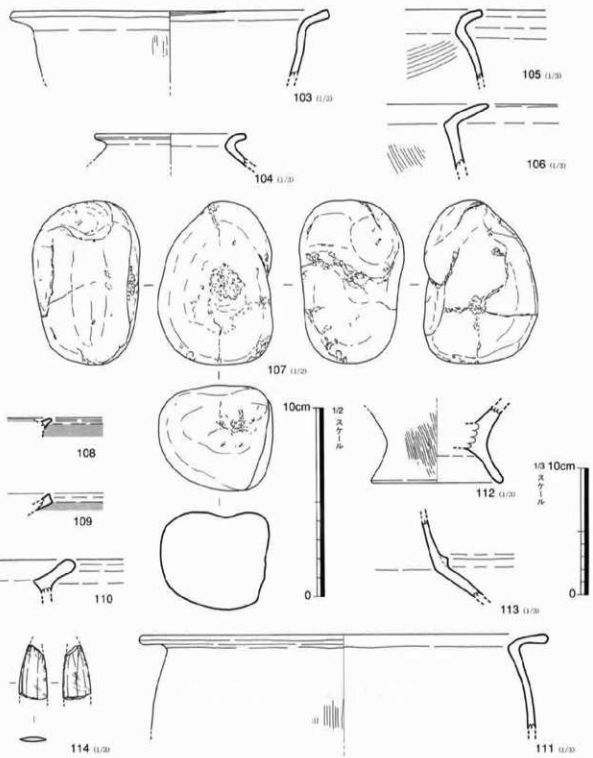


Fig.36　周溝状遺構（1SX001・058）出土遺物実測図（1/3・1/2）

周溝状遺構

1SX001（Fig.36、Pla.25）

弥生土器

鉢（103）　口径25.2cmを復元する。口縁部内面及び体部外面は刷毛目後ナデ、口縁部外面はヨコナデ、

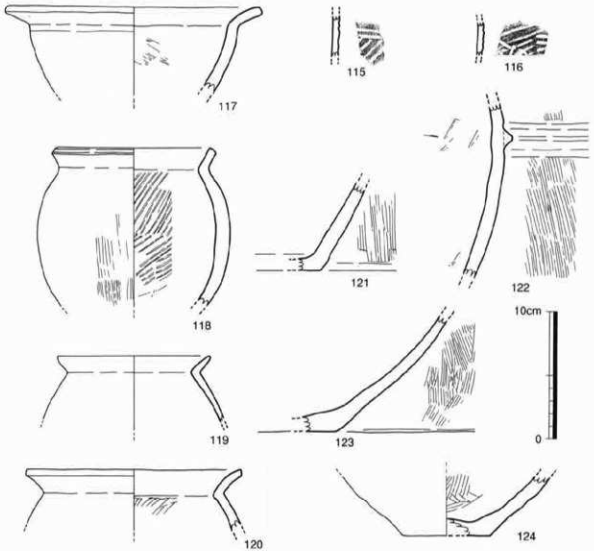


Fig.37　周溝状遺構（1SX088）出土遺物実測図（1/3）

体部内面はナデを施す。

甕（104～106）　104は口縁部が鋭く外反するもので口径12.0cmを復元する。口縁部はヨコナデ、体部内面はナデである。105は口縁部内外面ヨコナデ、体部内面は刷毛目、体部外面は磨耗のため調整不明である。106は「逆L字状」を呈する口縁部細片で上面は僅かに丸みを帯びる。口縁部内外面ヨコナデ、体部内面は刷毛目である。

石器

敲石（107）　石材は安山岩製で周縁及び表裏面の一部に敲打痕を認める。長さ12.9cm、幅9.0cm、厚さ7.6cm、重さ1350.0ｇを計測する。

1SX058（Fig.36、Pla.25・26）

弥生土器

不明（108・109）　共に器種は不明であるが丹塗りが施されており、口縁端部の細片と思われる。

甕（110～112）　110は鋤先形口縁を呈する口縁部細片である。磨耗のため調整不明。111は「逆L字状」口縁を呈し、口径32.2cmを復元する。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面は刷毛目後ナデ、胴部内面はナデの調整が認められる。112は「ハ字状」に開く台付甕で脚裾径は10.4cmを復元する。

壺（113）　頸部から胴部にかけての細片で境に断面三角形の貼付突帯を施す。外面ヨコナデ、内面はナデである。

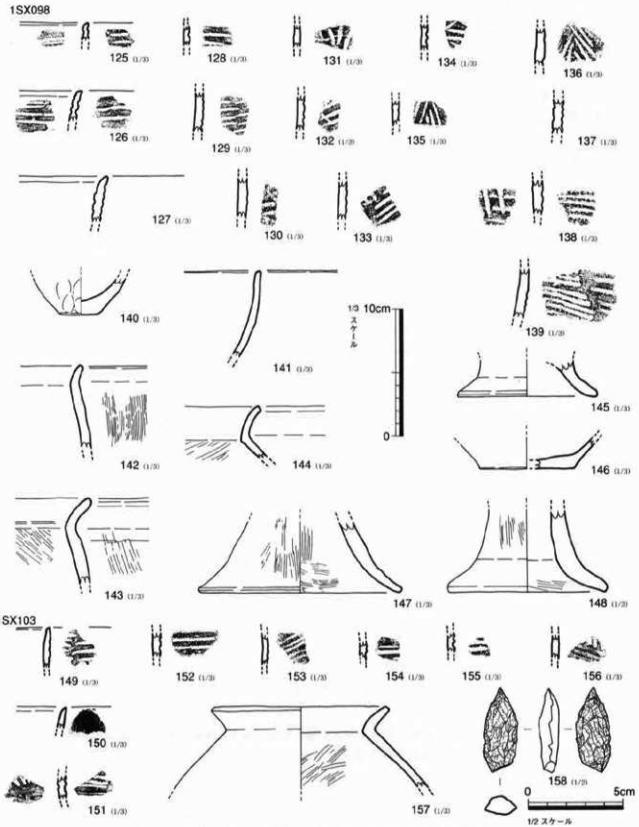


Fig.38　周溝状遺構（1SX098・103）出土遺物実測図（1/3・1/2）

石器

石鏃（114）　磨製石鏃で石材は粘板岩製と思われる。先端及び基部を欠損し、表裏面及び周縁は研磨に

よって整形加工される。

1SX088（Fig.37、Pla.26）

縄文土器

鉢（115・116）　共に体部の細片と思われる。胎土は滑石・微砂粒・金雲母を含み、外面に沈線文を施す。同一固体か？

弥生土器

鉢（117）　口径20.2cmを測る。器肉は厚く、口縁部はやや丸みを帯びながら外方斜めに開く。

甕（118～121）　118は短い「く字状」口縁を呈し、胴部は丸みを帯びる。器肉は厚く、口径12.9cmを復元し、胴部内外面は刷毛目を施す。119は薄手で「く字状」を呈し、口径12.0cmを復元する。120は「鋤先状」から「く字状」へ変わる移行期の甕でやや丸みのある「く字状」口縁を呈し、口径17.0cmを復元する。121は底部細片で平底を呈する。

壺（122～124）　122は胴部細片で外面に断面三角形状の貼付突帯を施す。123は底部細片で底部から胴部にかけては曲線を描きながら立ち上がる。124は底部細片で底径6.8cmを復元する。

1SX098（Fig.38、Pla.26・27）

縄文土器

鉢（125～139）　125～127は口縁部細片で内外面に沈線文が施される。何れも胎土に微砂粒・滑石・金雲母を含む。128～136・139は外面に沈線文、内面はナデを施す細片である。130・131・133は胎土に滑石を含む。137は内外面に沈線文を、138は外面に沈線文、内面に刺突文を施す。曽畑式土器と思われる。

弥生土器

鉢（140・141）　140は底部細片で底径2.9cmを測る。底部は平底で内外面はナデである。141は細片で口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面はナデの調整である。

甕（142～146）　142は「く字状」口縁を呈する細片で口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面刷毛目、内面ナデの調整である。143・144は「く字状」口縁を呈し、外面に煤が付着する。145は台付甕の脚部細片で脚部径は11.0cmを復元する。146は平底を呈する底部細片で底径7.3cmを復元する。

高坏（147）　脚部細片で脚部径は15.6cmを復元する。端部にかけて器肉は薄く、外方へ開く。

器台（148）　脚部の細片で裾部にかけて外反し、底径12.4cmを復元する。

1SX103（Fig.38、Pla.27）

縄文土器

鉢（149～156）　すべて曽畑式土器と思われる。149・150は口縁部細片であり、胎土に滑石を含む。149は外面に沈線文、下方に円形の孔を焼成前に穿つ。139～144は細片で151は内外面に沈線文、152～156は外面に沈線文、内面はナデである。151～155は胎土に滑石が含まれる。

弥生土器

甕（157）　やや短い「く字状」口縁を呈する甕で口径14.0cmを復元する。

石器

石槍（158）　石材はサヌカイト製で長さ4.5cm、幅1.7cm、厚さ1.0cm、重さ8.2ｇを計測する。下端部に自然面を残し、側辺には粗く刃部を作り出す。

1SX128（Fig.39～44、Pla.28～31）

弥生土器

鉢（159～163）　159～161はバケツ型を呈するもので底部は平底を呈する。159は口径10.0cm、底径6.0cm、器高7.7cmを復元し、底部から体部にかけてはほぼ直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。内外面は工具ナデ、外底はナデである。160は口径14.0cm、底径6.7cm、器高10.7cmを測る。底部中央に焼成前に穿たれた径1.4cmの穿孔を認め、甑として利用されたものと思われる。161は159よりも一回り大きく、口径14.0cm、底径8.4cm、器高12.0cmを測る。160・161は外面刷毛目、内面はナデの調整であ

る。162は底部に脚部を呈するものと思われる。口縁部は丸みを帯びた「く字状」口縁を呈し、口径23.6cm、底径5.5cm、現存器高17.4cmを測る。163は底部細片で底径6.4cmを測る。底部は平底を呈し、内外面は刷毛目を施す。

高坏（164～166）　164は丸みを帯びた坏部を呈する細片で、器肉は厚く口径16.4cmを復元する。153は端部がやや垂れ下がった撚先形口縁を呈し、口径32.8cmを復元する。166は脚柱部の細片で坏部内面及

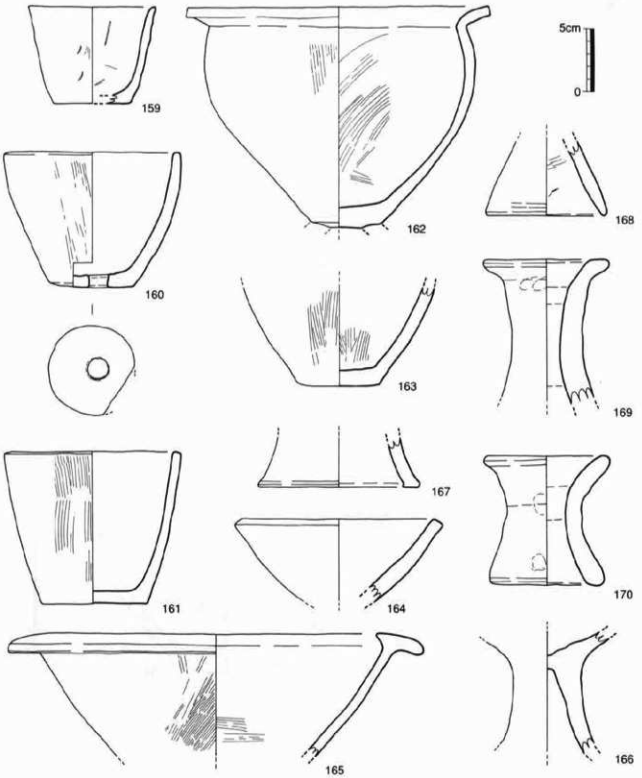


Fig.39　周溝状遺構（1SX128①）出土遺物実測図（1/3）

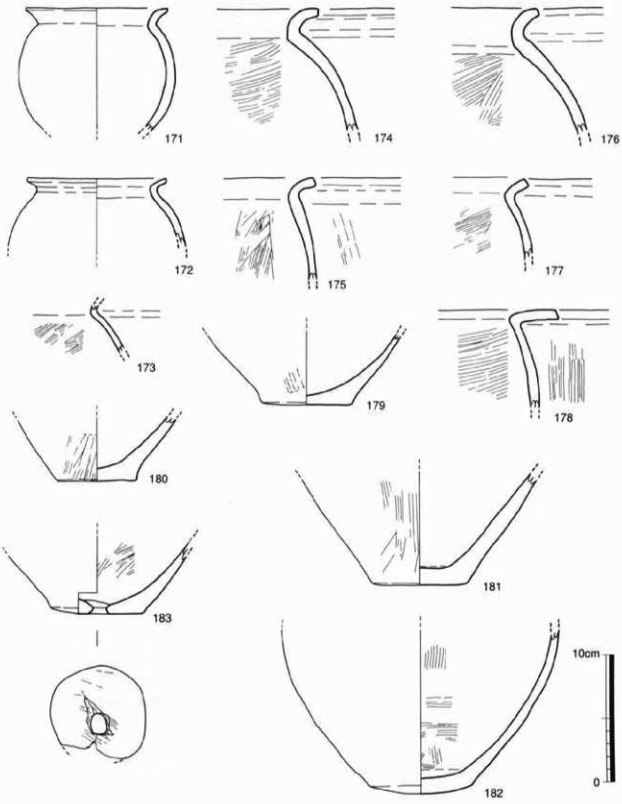


Fig.40　周溝状遺構（1SX128②）出土遺物実測図（1/3）

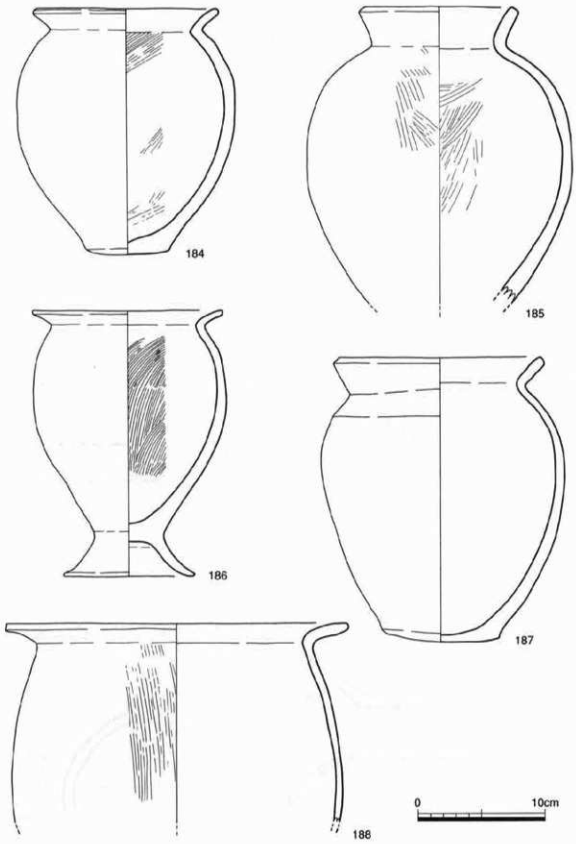


Fig.41　周溝状遺構（1SX128③）出土遺物実測図（1/3）

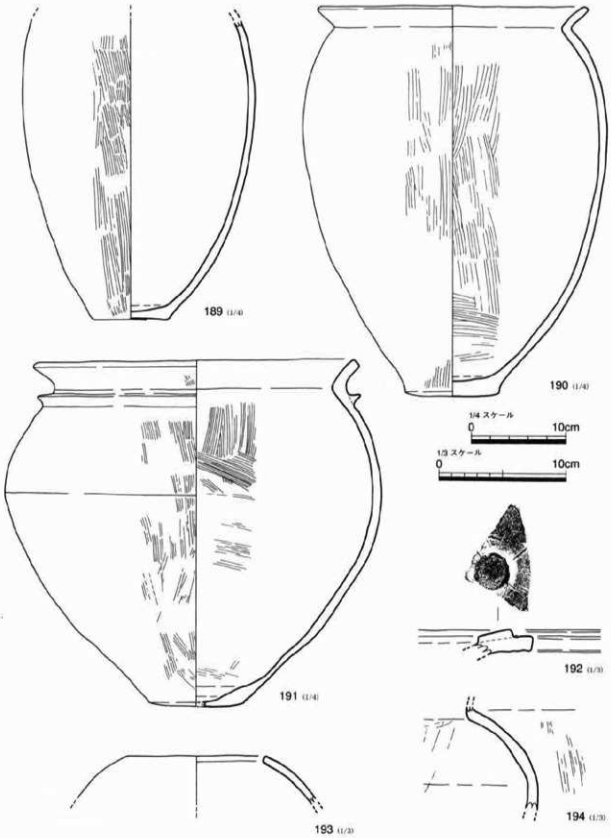


Fig.42　周溝状遺構（1SX128④）出土遺物実測図（1/4・1/3）

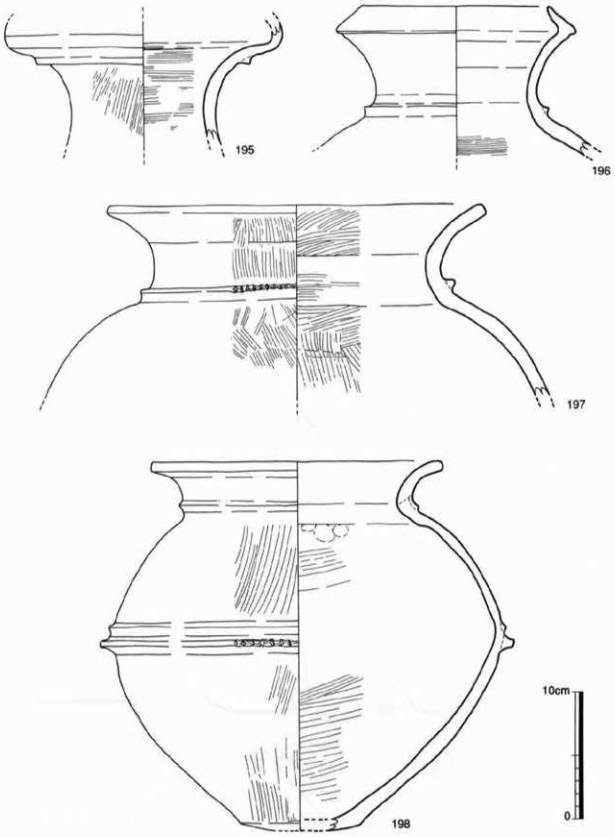


Fig.43　周溝状遺構（1SX128⑤）出土遺物実測図（1/3）

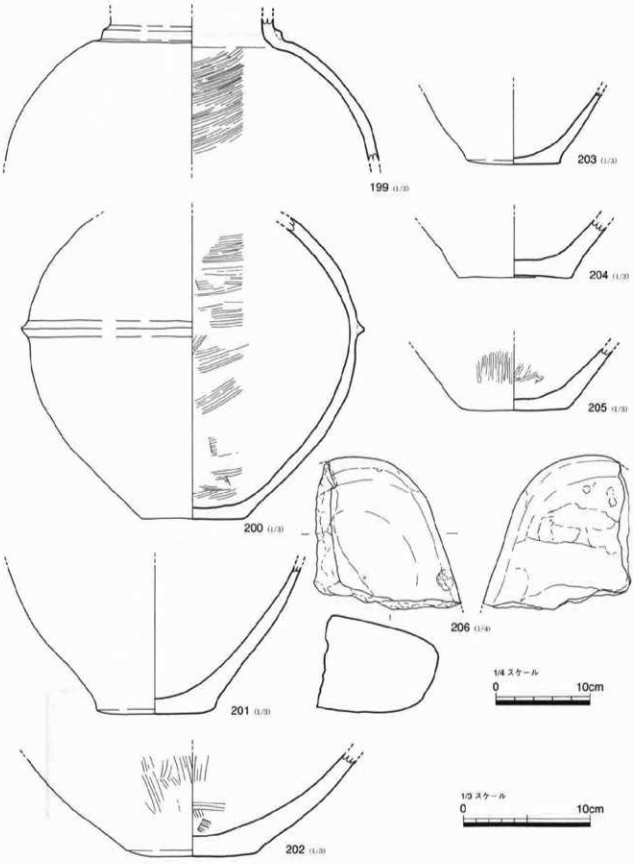


Fig.44　周溝状遺構（1SX128⑥）出土遺物実測図（1/4・1/3）

び脚部内面はナデを施す。外面は磨耗のため調整不明。
支脚（167・168）　共に脚部の細片である。167は脚裾径12.8cm、168は9.3cmを測る。
器台（169・170）　169は脚裾径を欠損し、口径10.0cmを復元する。170は口径10.0cm、脚裾径9.0cm、器高10.2cmを測る。
甕（171～191）　171は口径11.2cmを復元する。口縁部は「く字状」を呈し、胴部は丸みを帯びる。172は口径11.0cmを復元し、口縁部は湾曲した「く字状」口縁を呈する。173は肩部の細片で内面に刷毛目調整を認める。174～178は口縁部細片であり、174～176は湾曲した「く字状」口縁、177は「く字状」口縁、178は「逆L字状」口縁を呈する。179～181は平底を呈した底部破片で179は底径7.1cm、180は底径6.0cm、181は底径7.6cmを測る。182は「凸レンズ状」を呈した底部破片で底径8.0cmを測る。底部から胴部へは曲線を描きながら立ち上がる。183は「凸レンズ状」底部の中央に焼成後穿たれたとみられる円形1孔を認める。瓶として利用された可能性がある。底径7.5cmを測る。184は丸みを帯びた「く字状」口縁を呈し、胴部は丸く、底部は「凸レンズ状」を呈する。胴部最大径は上位にあり、口径14.0cm、底径6.6cm、器高19.5cmを測る。185は口径12.6cmを復元する。口縁部はやや直線的に立ち上がり、胴部は丸みを持ちながら底部へと展開する。186は口縁部は「く字状」を呈する台付甕で口径15.0cm、脚部径10.4cm、器高21.0cmを測る。187は口径15.8cm、底径9.3cm、器高22.5cmを測る。口縁部は「く字状」を呈し、底部は「凸レンズ状」を呈する。胴部は丸く、最大径は上位にあり、19.1cmを測る。188は「逆L字状」から「く字状」へと移行する段階の土器と思われる。口径27.0cmを復元し、外面に煤が付着する。189は平底を呈し、底径8.0cmを測る。胴部は長く、最大径は中位にあり、24.5cmを測る。外面に煤が付着する。190は「く字状」口縁、底部は「凸レンズ状」を呈し、口径28.0cm、底径10.0cm、器高41.3cm、胴部最大径32.6cmを測る。191は口径33.0cm、底径10.0cm、器高36.6cm、胴部最大径39.6cmを測る。「く字状」口縁を呈した口縁部下端部に突帯を貼付け、胴部は丸く底部は平底を呈する。

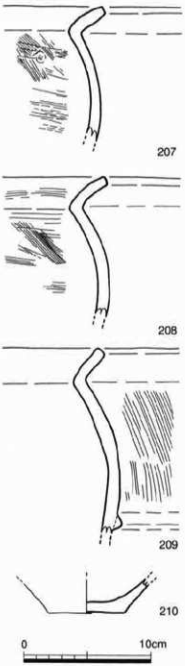


Fig.45　周溝状遺構（1SX220）
出土遺物実測図（1/3）

壺（192～193）　192は鋤先形口縁を呈するものと思われ、上面に径2.7cmの円形浮文を貼り付ける。193は無頸壺で口径10.8cmを復元する。外面に煤が付着する。194は球状胴部細片で肩部はやや張った状態を呈する。195は丸みのある袋状口縁を呈し、口唇部下位に断面三角形の貼付突帯を施す。196は稜線のある袋状口縁を呈し、頸部は朝顔形に開く。頸部と肩部の境に断面三角形の貼付突帯を施し、口径は14.6cmを復元する。197は口径29.2cmを測る。口縁部は朝顔形に外反し、頸部と肩部の境に断面台形状の刻目突帯を貼り付ける。198は口径22.8cm、底径9.6cm、器高30.1cmを測る。口縁部は朝顔形に鋭く外反し、胴部は扁球形を呈する。底部は「凸レンズ状」を呈し、頸部と肩部境には断面三角形状、胴部には断面台形状の刻目突帯を貼り付ける。199は頸部から胴部にかけての細片で頸部と肩部の境に断面三角形状貼付突帯を施す。200は底径8.0cm、胴部最大径26.0cmを復

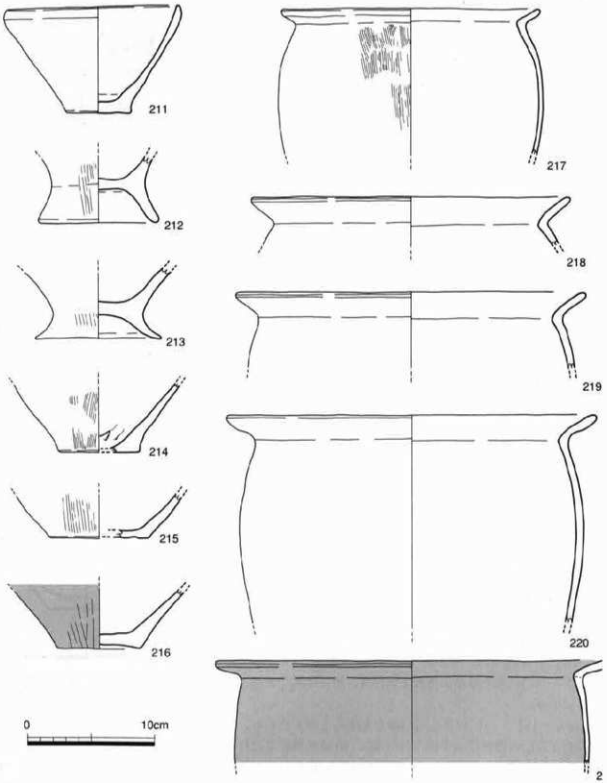


Fig.46　周溝状遺構（1SX310①）出土遺物実測図（1/3）

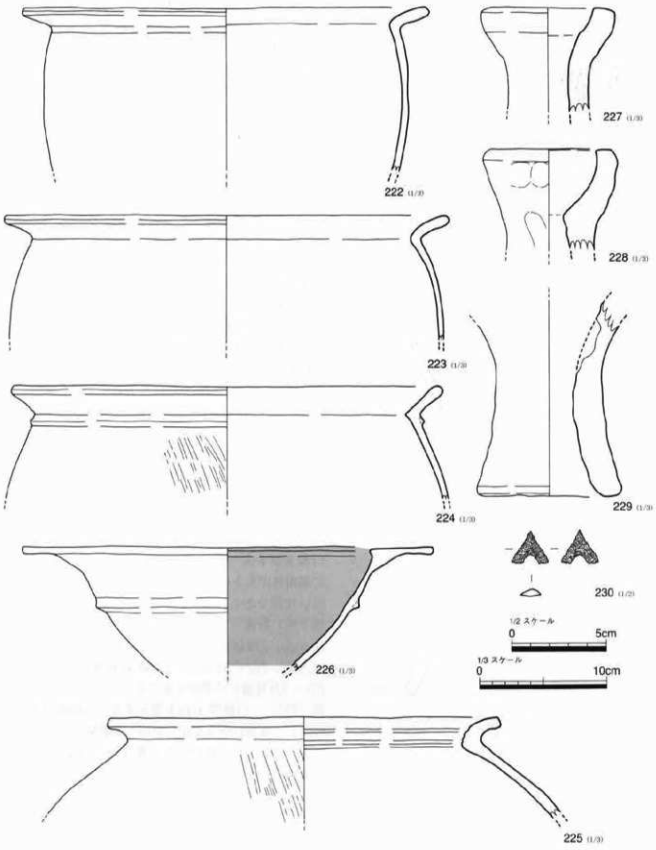


Fig.47　周溝状遺構（1SX310②）出土遺物実測図（1/3・1/2）

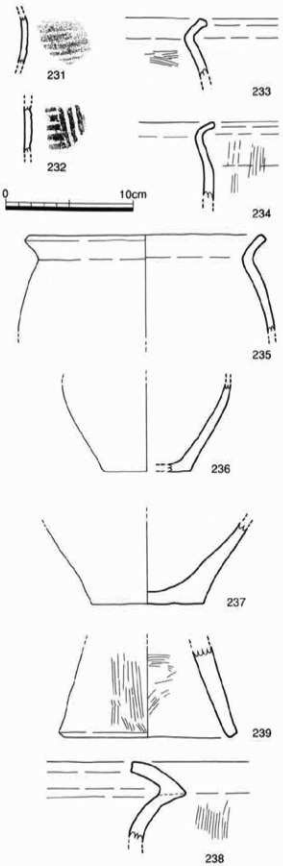


Fig.48　周溝状遺構（1SX315・475）
出土遺物実測図（1/3）

元する。底部は平底を呈し、胴部に断面三角形状の突帯を貼り付ける。201～205は底部破片で204は平底、その他は「凸レンズ状」を呈する。底径は201が9.3cm、202は10.5cm、203は7.4cm、204は9.0cm、205は8.4cmを測る。

石器

台石（206）　安山岩製で表裏面及び側面に打痕、研磨痕を認める。現存の長さは16.2cm、幅は12.9cm、厚さ10.3cmを測る。

1SX220（Fig.45、Pla.31）

弥生土器

甕（207～210）　207～209は口縁部細片で口縁部は「く字状」を呈する。209は胴部に断面三角形の貼付突帯を施す。210は平底を呈した底部細片で底径6.0cmを復元する。

1SX310（Fig.46・47、Pla.31・33）

弥生土器

鉢（211）　口径13.4cm、底径5.2cm、器高8.3cmを測る。底部は平底で底部から口縁部にかけてはほぼ直線的に立ち上がる。

甕（212～224）　212・213は台付甕の底部細片であり、212は脚台部径9.2cm、213は脚台部径10.0cmを復元する。214～216は平底を呈した底部細片であり、214は底径6.4cm、215は底径7.8cm、216は底径6.5cmを測る。215外面には煤が厚く付着する。217は口径20.4cmを復元する。口縁部は上方へやや反りながら「く字状」を呈する。器肉は薄く、外面は細かい刷毛目調整を施す。218～224は「く字状」口縁を呈する一群である。218～220は「く字状」に屈曲角が大きいが221～223は若干「逆L字状」に近い状態である。224は撚先形口縁を呈し、口縁外面下位に断面三角形の貼付突帯を施す。218は口径25.2cm、219は27.2cm、220は口径29.2cm、221は31.0cm、222は32.0cm、223は34.0cmを復元する。221・224外面には煤が付着する。

壺（225）　口径30.4cmを復元する。口縁部は鋭く外反し、肩部は張りながら胴部へと展開する。

高坏（226）　上面が平坦で撚先形口縁を呈する。坏部外面に断面三角形の貼付突帯、表面には丹塗りを施す。口径32.4cmを復元する。

器台（227～229）　227は口径10.6cm、228は口径9.5cm、229は脚裾径11.2cmを復元する。何れも調整はナデである。

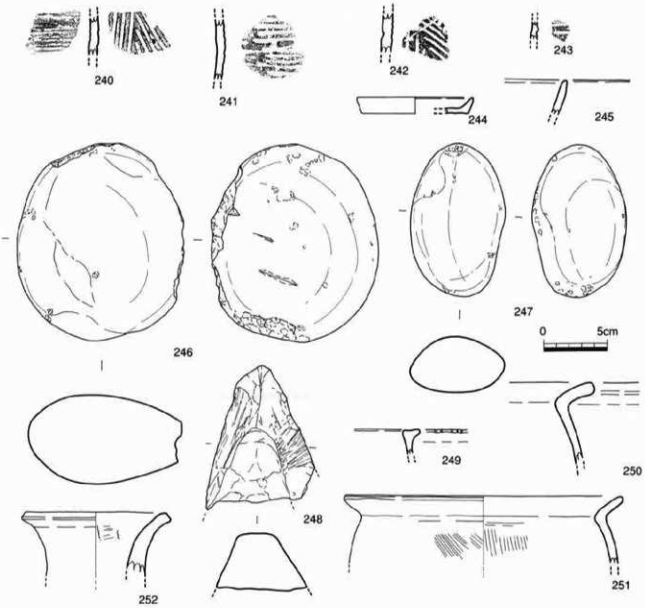


Fig.49　不明遺構（1SX116・121・274）出土遺物実測図（1/3）

石器

石鏃（230）　抉りのある正三角形状を呈する黒曜石製石鏃である。完形で側辺に細かいリタッチを加えて刃部を作り出す。長さ1.8cm、幅1.9cm、厚さ0.4cm、重さ0.6ｇを計測する。

1SX315（Fig.48）

縄文土器

鉢（231）　外面は沈線文、内面はナデを施し、胎土は微砂粒・滑石・金雲母を含む。曽畑式土器と思われる。

1SX475（Fig.48、Pla.33）

縄文土器

鉢（232）　外面は沈線文、内面はナデを施し、胎土は微砂粒・滑石・金雲母を含む。曽畑式土器と思われる。

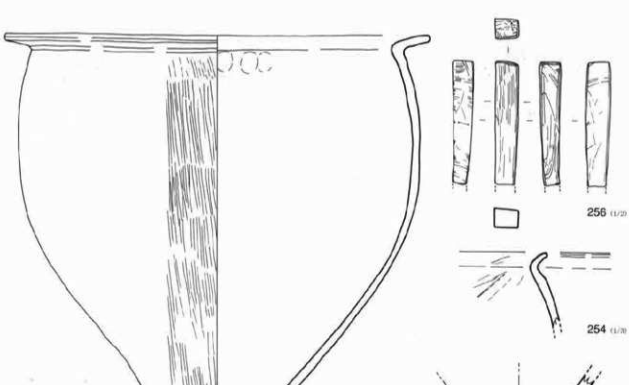


Fig.50　溝（1SD585）出土遺物実測図（1/3・1/2）

弥生土器

甕（233～237）　233～235は緩やかな「く字状」口縁を呈する細片で235は19.0cmを復元する。236は底径7.0cmを測る。平底を呈し、底部から体部にかけては湾曲しながら立ち上がる。237は平底を呈し、底径8.8cmを測る。底部から体部にかけては底部を意識しながらもほぼ直線的に立ち上がる。

壺（238）　口縁部細片で稜線のある袋状口縁を呈する。

器台（239）　底部細片で脚裾径は14.0cmを復元する。内外面は刷毛目で端部はヨコナデ。

不明遺構

1SX116（Fig.49）

縄文土器

鉢（240～243）　すべて細片で外面に沈線文を施す。240のみ胎土に滑石が含まれる。

1SX121（Fig.49、Pla.33）

土師器

小皿（244）　口径9.2cm、底径8.4cm、器高1.3cmを復元する。外底は回転糸切りで内外面はヨコナデである。

瓦器

埦（245）　口縁部細片で内外面にミガキを施す。

石器

敲石（246・247）　共に安山岩製で側辺に敲打痕を認める。246は長さ15.5cm、幅12.1cm、厚さ7.1cm、247は長さ12.1cm、幅7.4cm、厚さ4.5cmを測る。

砥石（248）　石材は砂岩製で側辺を砥面として使用しており、細かい線状痕跡を認める。

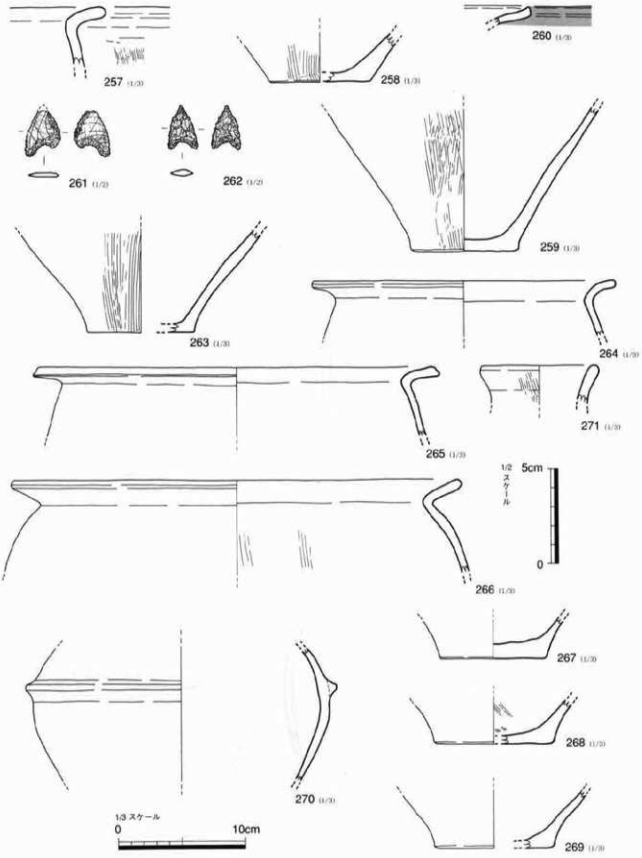


Fig.51　土坑（1SK017・025・397）出土遺物実測図（1/3・1/2）

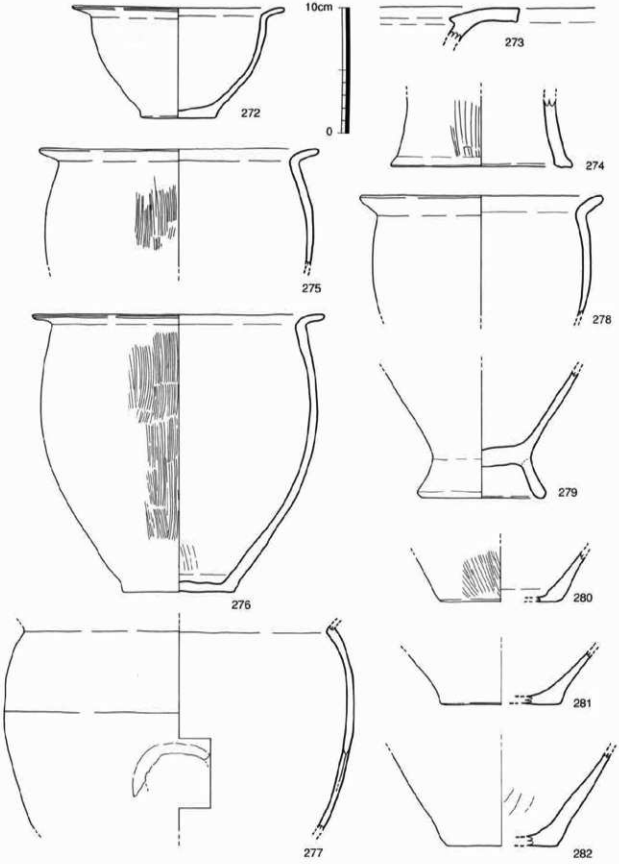


Fig.52　土坑（1SK400①）出土遺物実測図（1/3）

1SX274（Fig.49、Pla.34）

弥生土器

甕（249～251）　249は断面三角状口縁を呈し、端部に刻目を施す。250・251は「く字状」を呈する口

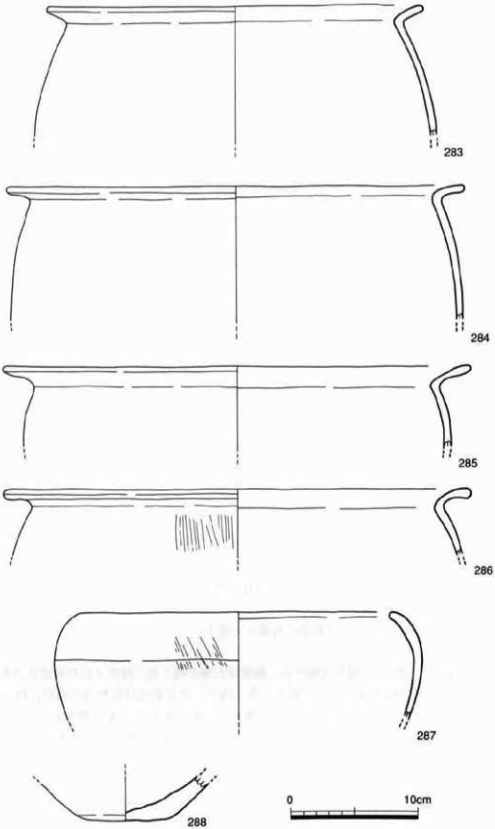


Fig.53　土坑（1SK400②）出土遺物実測図（1/3）

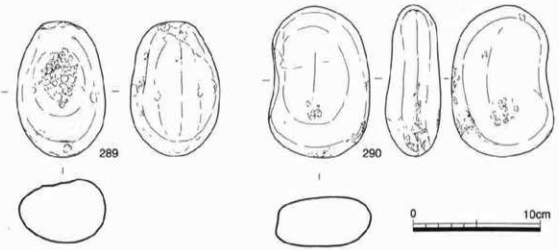


Fig.54　土坑（1SK400③）出土遺物実測図（1/3）

縁部細片であり、251は口径22.0cmを復元する。

器台（252）　口径は11.8cmを復元する。外面はヨコナデ、内面は工具ナデを施す。

溝

1SD585（Fig.50、Pla.34）

弥生土器

甕（253～255）　253は口径33.6cm、底径9.0cm、器高31.3cmを測る。「逆L字状」の口縁部を呈し、胴部から底部にかけては緩やかに湾曲する。胴部最大径は上位にあり、底部は平底を呈する。口縁部内外面はヨコナデ、外面は丁寧な刷毛目、内面はナデで口縁部付近に指頭圧痕を認める。外面に煤が付着する。254は「く字状」口縁を呈し、口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面は工具ナデを施す。255は平底を呈した底部細片で底径8.0cmを復元する。

石器

砥石（256）　方柱状の砥石で下部を欠損する。全面を砥面と使用しており、全ての面に線刻痕跡を認める。現存長6.55cm、幅1.3cm、厚さ1.0cm、重さ16.2 gを計測する。石材は泥岩と思われる。

土坑

1SK017（Fig.51、Pla.34）

弥生土器

甕（257～259）　257は口縁部細片で口縁部内外面はヨコナデ、外面は刷毛目、内面はナデである。258・259は平底を呈する底部細片で外面刷毛目、内面ナデを施す。258は底径8.0cm、259は底径8.6cmを復元する。

不明（260）　内外面はヨコナデで外面に丹塗りを施す。

石器

石鏃（261・262）　261は先端を欠損する。脚部は右脚が短く後に修復された可能性がある。石材は黒曜石製で、表裏面に剥片時のネガティヴ面を大きく残す。抉り部及び右側辺の両面に粗くリタッチを加えて刃部を作り出す。現存長2.5cm、幅1.8cm、厚さ0.2cm、重さ1.1 gを計測する。262は二等辺三角形状を呈し、左脚端を僅かに欠損する。石材はサヌカイト製で表裏面に細かく敲打を加えている。長さ2.4cm、幅1.2cm、厚さ0.4cm、重さ0.9 gを計測する。

1SK025（Fig.51、Pla.35）

弥生土器

甕（263）　平底を呈する細片で底径8.4cmを復元する。調整は外面刷毛目、内面ナデである。

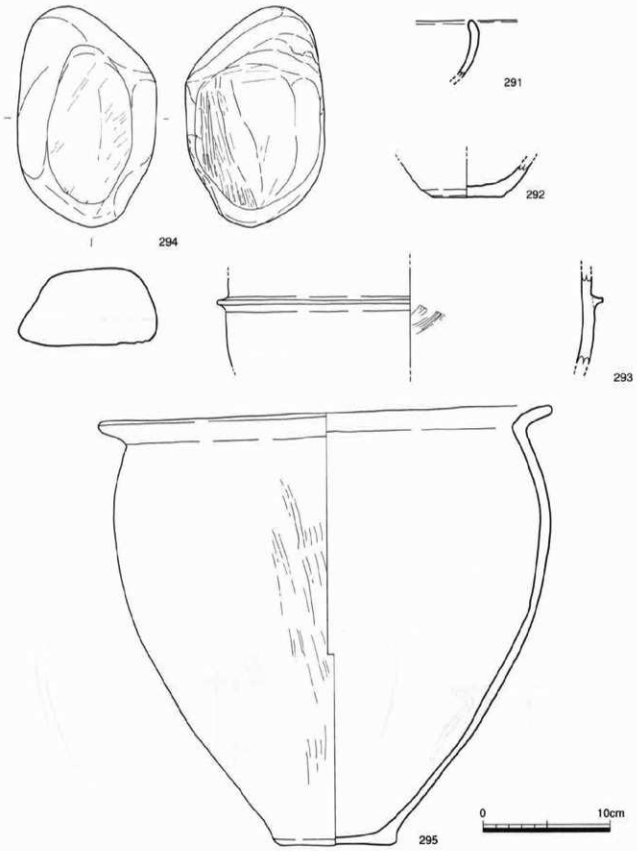


Fig.55　土坑（1SK428・430）出土遺物実測図（1/3）

1SK397（Fig.51、Pla.35）

弥生土器

甕（264～269）　264～266は口縁部細片で口縁形状が「逆L字状」から「く字状」へ移行する過渡的様相を示すものであり、264は口径24.0cm、265は口径32.0cm、266は口径35.4cmを復元する。267～269は平底を呈する底部細片である。267は底部の器肉がやや厚く、底径8.4cmを復元する。268・269は共に底径9.4cmを復元する。

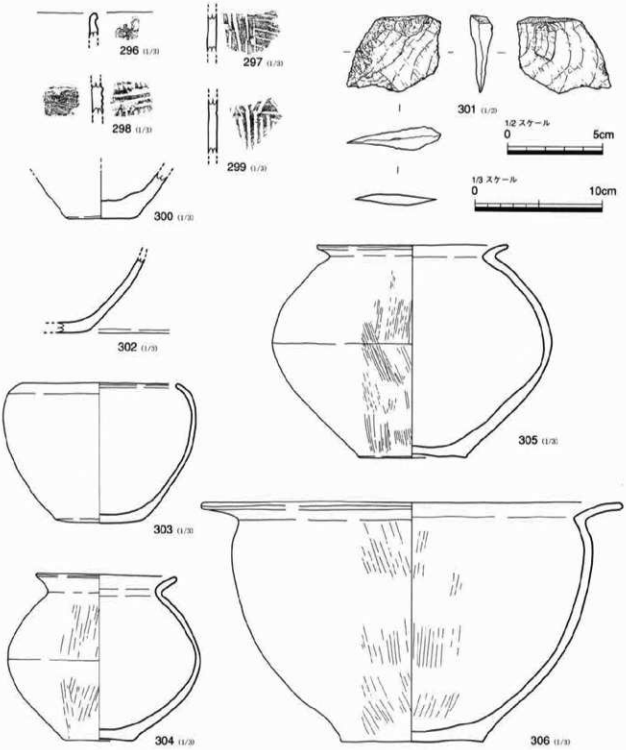


Fig.56　土坑（1SK451・495①）出土遺物実測図（1/3・1/2）

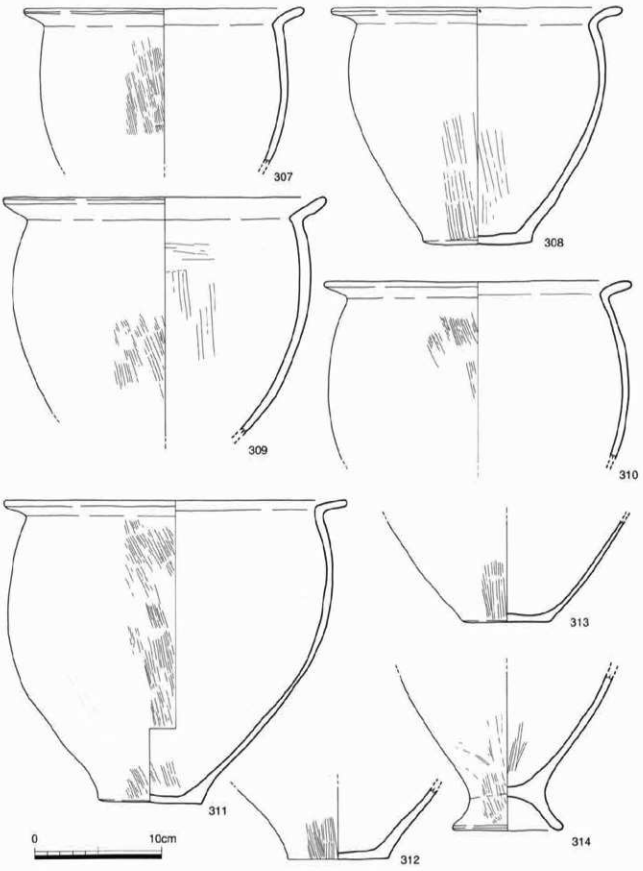


Fig.57　土坑（1SK495②）出土遺物実測図（1/3）

壺（270）　胴部の破片で外面に断面台形状の貼付突帯を施す。最大径は24.5cmを復元する。
器台（271）　上端部の細片で口径9.0cmを復元する。調整は外面刷毛目、内面ナデである。

1SK400（Fig.52～54、Pla.35～37）

弥生土器

鉢（272）　口径17.0cm、底径6.0cm、器高8.85cmを復元する。口縁部は「逆L字状」を呈し、胴部は丸みを帯び、底部は平底を呈する。図面接合した。
高坏（273）　鋤先形口縁を呈する口縁部細片である。
器台（274）　脚裾径は14.4cmを復元し、調整は外面刷毛目、内面ナデである。他器種である可能性もある。
甕（275～286）　275～278・283～286は口縁形状が「逆L字状」から「く字状」へと移行する段階のものである。275は口径22.0cmを測り、口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面は刷毛目、内面はナデを施す。276は口径23.0cm、底径8.8cm、器高22.0cmを測る。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面は刷毛目、内面はナデを施す。277は胴部破片で中央部に径5cm前後の孔を認める。278は口径18.9cmを復元する。表面磨耗のため調整不

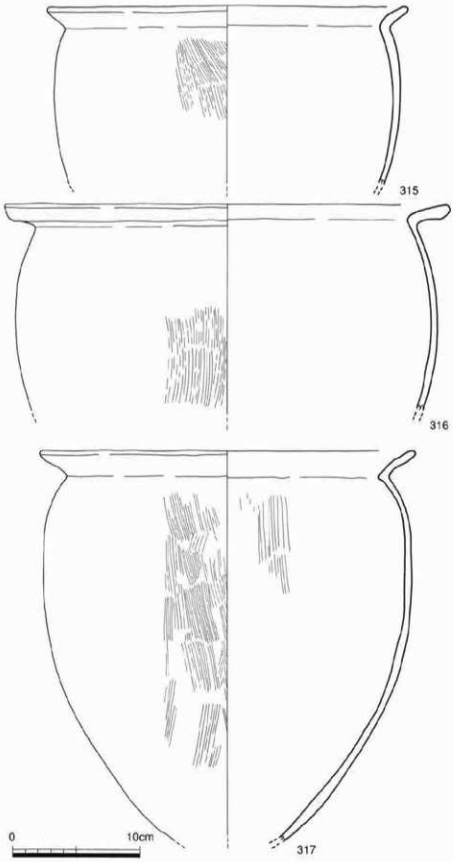


Fig.58　土坑（1SK495③）出土遺物実測図（1/3）

明。279は「ハ字状」に開く台付甕の底部破片で脚台径9.8cmを復元する。280～282は平底を呈する底部細片で280は底径9.6cm、281は底径9.4cm、282は8.8cmを復元する。283は口径29.3cm、284は口径36.0cm、285は口径36.6cmを測り、283～285は磨耗のため調整不明である。286は36.8cmを復元し、口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面刷毛目を施す。

壺（287・288）　287は無頸壺で口径24.0cmを復元する。外面の一部に刷毛目調整痕を僅かに認める。288は底部細片で底部はやや丸みを帯びる。底径7.7cmを復元する。

石器

敲石（289・290）　共に縦長の円礫を利用したもので中央部または周縁の一部に敲打痕を認める。289は長さ10.7cm、幅6.8cm、厚さ5.0cm、重さ495.0ｇ、290は長さ12.0cm、幅7.5cm、厚さ2.8cm、重さ577.0

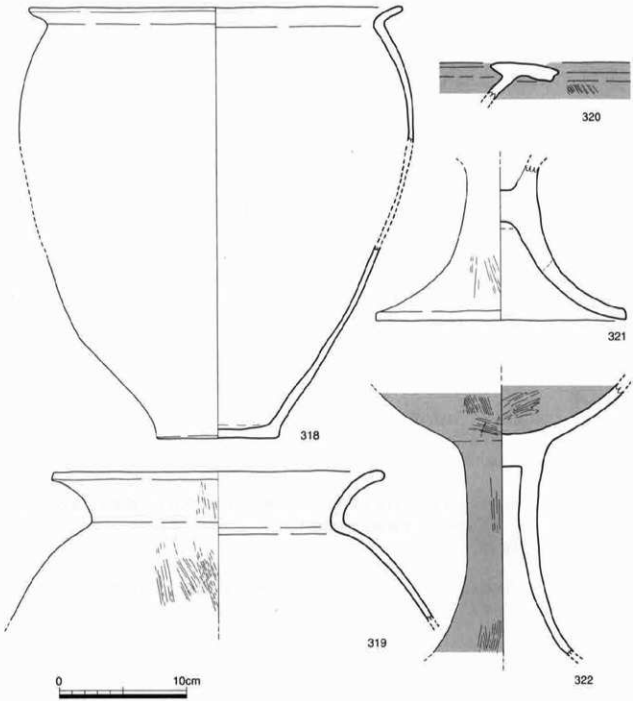


Fig.59　土坑（1SK495④）出土遺物実測図（1/3）

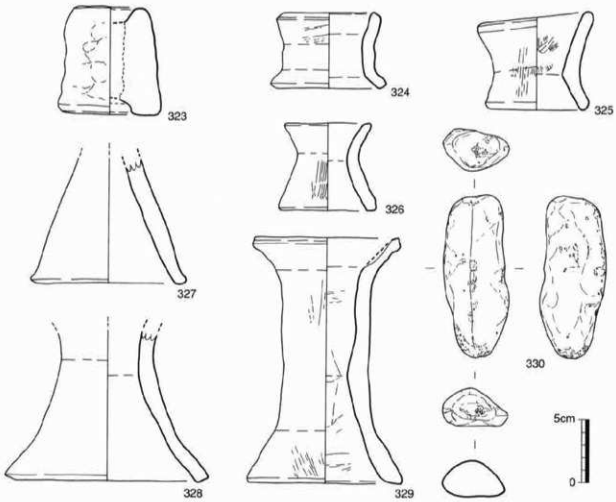


Fig.60　土坑（1SK495⑤）出土遺物実測図（1/3）

gを計測する。石材は不明である。

1SK428（Fig.55、Pla.36・37）

弥生土器

鉢（291）　口縁部細片で口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデを施す。

甕（292・293）　292は底部細片で平底を呈する。胴部へは丸みを持ちながら立ち上がり、底径5.8cmを復元する。293は胴部細片で外面に断面台形状の貼付突帯を施す。

石器

砥石（294）　石材は砂岩と思われ、両面を砥面として使用しており、部分的に線刻痕を認める。長さ17.5cm、幅10.9cm、厚さ6.1cm、重さ1630.0 gを計測する。

1SK430（Fig.55、Pla.37）

弥生土器

甕（295）　実測図は図面接合したもので口径35.8cm、底径9.7cm、器高34.0cmを復元する。「く字状」口縁及び底部平底を呈する。胴部最大径は上位にあり32.2cmを復元する。

1SK451（Fig.56、Pla.37）

縄文土器

鉢（296～299）　284は口縁部細片で外面に刺突文を施す。調整は端部はヨコナデ、内面はナデである。297～299は細片で外面に沈線文が施される。299のみ胎土に滑石が含まれる。

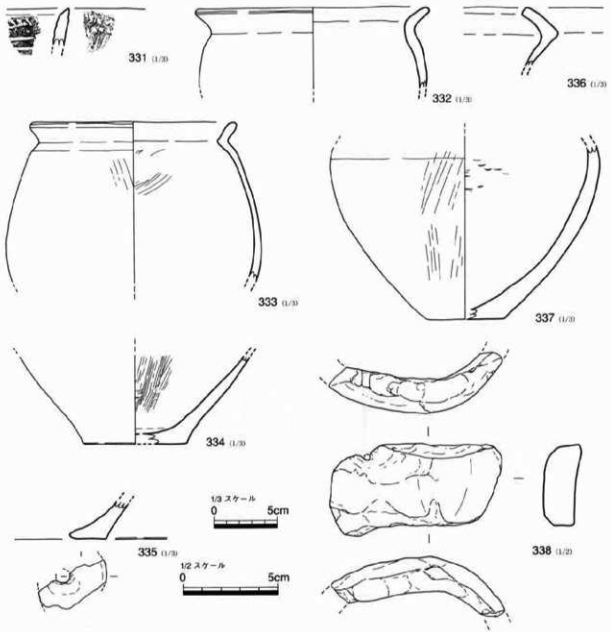


Fig.61　土坑（1SK521）出土遺物実測図（1/3・1/2）

弥生土器

甕（300）　平底を呈する底部細片で厚底である。底径は5.6cmを測る。

石器

掻器（301）　石材はサヌカイト製で上端面に自然面を大きく残す。剥片時のネガティヴ面を両面に認め、刃部加工は部分的なリタッチを加えて作り出している。長さ4.1cm、幅5.0cm、厚さ0.5cm、重さ14.0gを計測する。

1SK495（Fig.56～60、Pla.37～39）

弥生土器

鉢（302～305）　302は底部細片で平底を呈する。303は無頸で口径12.2cm、底径7.0cm、器高11.0cmを復元する。薄手で口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデである。304・305は「く字状」口縁で胴部は湾曲した扁球状を呈し、底部は平坦ではなく僅かながら上底となる。304は口径11.1cm、底径5.4cm、

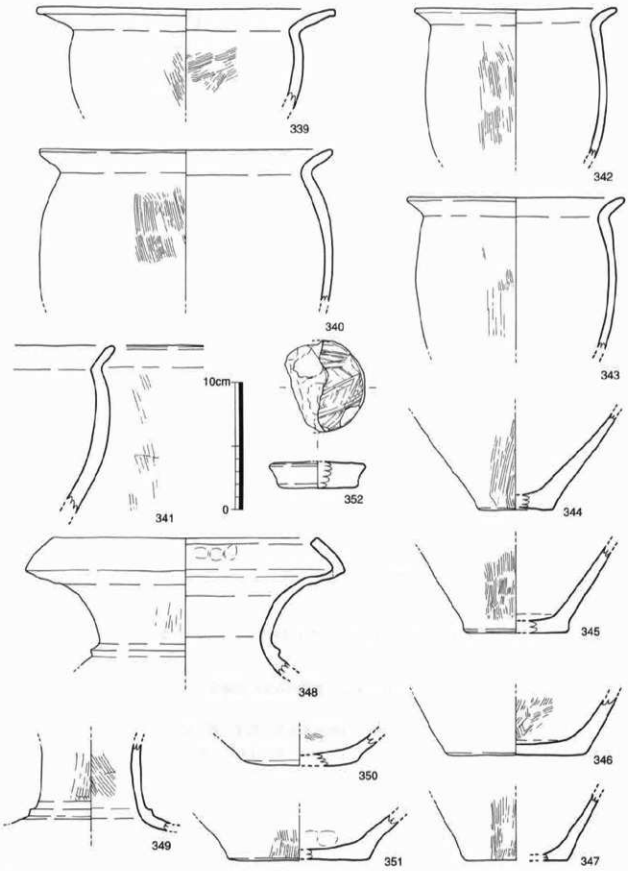


Fig.62　土坑（1SK614①）出土遺物実測図（1/3）

器高13.1cmを測る。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面は刷毛目、内面上位はナデ、下位は工具ナデ後ナデである。305は口径15.0cm、底径8.6cm、器高16.8cmを測る。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面は刷毛目、内面はナデである。

甕（306～318）　306は口径33.2cm、底径11.2cm、器高18.9cmを測る。「逆L字状」から「く字状」の移行期にあたるもので、底部は平底を呈する。調整は口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面は刷毛目である。307は口縁部上面が丸みを帯びた「く字状」口縁を呈し、口径22.0cmを復元する。胴部外面は刷毛目、内面は刷毛目後ナデである。308は「く字状」口縁を呈し、上面は丸みを帯びる。底部は平底を呈し、口径23.0cm、底径8.6cm、器高18.8cmを測り、調整は口縁部内外面はヨコナデ、胴部上位内外面はナデ、胴部下位内外面は刷毛目を施す。309は鋭く屈曲する「く字状」口縁を呈し、口径は25.1cmを測る。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面上位はナデ、胴部下位外面及び内面は刷毛目を施す。外面に煤が付着する。310は「く字状」口縁を呈し、上面は緩やかな丸みを持つ。口径24.0cmを復元し、調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面は刷毛目、内面はナデである。311は口径26.8cm、底径8.2cm、器高23.9cmを測る。「逆L字状」口縁を呈し、底部は平底を呈する。胴部最大径は上位にあり24.8cmを測る。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面は刷毛目、内面は刷毛目とナデを施す。312・313は平底を呈する底部細片であり、底部から胴部にかけて312が外反するのに対し、313はやや丸みを持ちながら内湾する。312は底径7.9cm、301は底径7.0cmを測る。314は「ハ字状」に開く台付甕の底部破片で脚台径は8.5cmを測る。315は「く字状」口縁を呈し、口径28.0cmを復元する。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面は刷毛目、内面はナデである。316は厚手で外反する口縁部を呈し、口径34.7cmを復元する。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面は刷毛目、内面はナデで内外面に煤が付着する。317は鋭く屈曲した「く字状」口縁を呈し、口径29.3cmを復元する。胴部最大径は上位にあり、30.0cmを復元する。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面及び内面上位は刷毛目、内面下位はナデである。318は図面復元したもので口径29.3cm、底径9.6cmを復元する。口縁部は「く字状」、底部は平底を呈する。

壺（319）　肩部が張り、口縁部は朝顔形に外反する。口径25.8cmを測り、口縁部内外面はヨコナデ、肩部外面は刷毛目、内面はナデを施す。内面に二次焼成の煤が付着する。

高坏（320～322）　320は口縁端部細片で鋤先形を呈する。内外面に丹塗りが施される。321は脚部破片で脚裾径は19.8cmを測る。脚部外面の一部に刷毛目を認める。その他は磨耗のため調整不明。322は320と同一固体である可能性がある。表面に丹塗りを施し、坏部内面はミガキ、坏部及び脚柱部外面は刷毛目、脚柱部内面は工具ナデの調整である。

支脚（323）　口径4.6cm、底径8.2cm、器高8.5cmを測る。上下端部は凹んでおり、調整はナデである。

器台（324～329）　324は口径8.0cm、底径8.1cm、器高6.1cmを復元する。調整はヨコナデ及びナデを施す。325は口径8.8cm、底径7.4cm、器高7.4cmを測り、端部はヨコナデ、体部内外面は刷毛目を施す。326は口径6.6cm、底径7.4cm、器高6.9cmを測り、端部はヨコナデ、体部外面は刷毛目、内面はナデを施す。327・328は脚部細片である。327は底径12.2cmを復元し、調整は内外面ナデである。328は底径16.0cmを復元し、調整は内外面ナデを施す。329は口径11.2cm、底径12.0cm、器高19.5cmを測り、端部はヨコナデ及びナデ、体部内外面は工具ナデを施す。

石器

敲石（330）　石材は安山岩製で周縁及び中央部の一部に敲打痕を認める。長さ12.8cm、幅4.8cm、厚さ2.9cm、重さ245.0ｇを計測する。

1SK521（Fig.61、Pla.39・40）

縄文土器

鉢（331）　口縁部細片で端部に押引文、内面及び外面下位に沈線文、外面上位に刺突文を施す。胎土は微砂粒、金雲母、角閃石を含む。

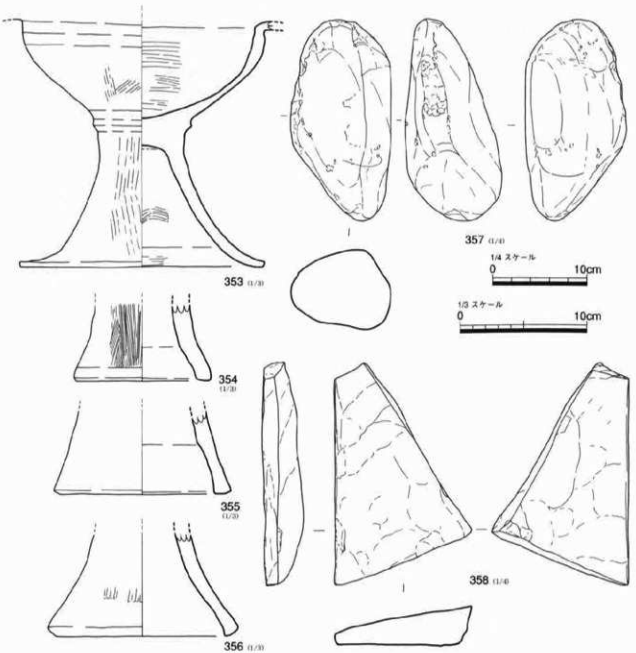


Fig.63　土坑（1SK614②）出土遺物実測図（1/4・1/3）

弥生土器

甕（332～335）　332は口径18.0cmを復元する。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面は工具ナデ、外面は磨耗のため調整不明である。333は「く字状」口縁を呈し、口径16.2cmを復元する。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面工具ナデを施す。334は平底を呈する底部細片で底径8.2cmを復元する。335は底部中央部に径1cm前後の穿孔を焼成前に施す。

壺（336・337）　336は口縁部細片で稜線のある袋状口縁を呈する。調整は内外面ヨコナデである。337は平底を呈し、底径6.0cmを測る。胴部は扁球形を呈し、調整は内面工具ナデ後ナデ、外面工具ナデを施す。内面の一部に爪痕跡を認める。

石器

不明（338）　湾曲した破片で石材は砂岩製である。上端部の一部に径3mm程度の穿孔を認め、現存長

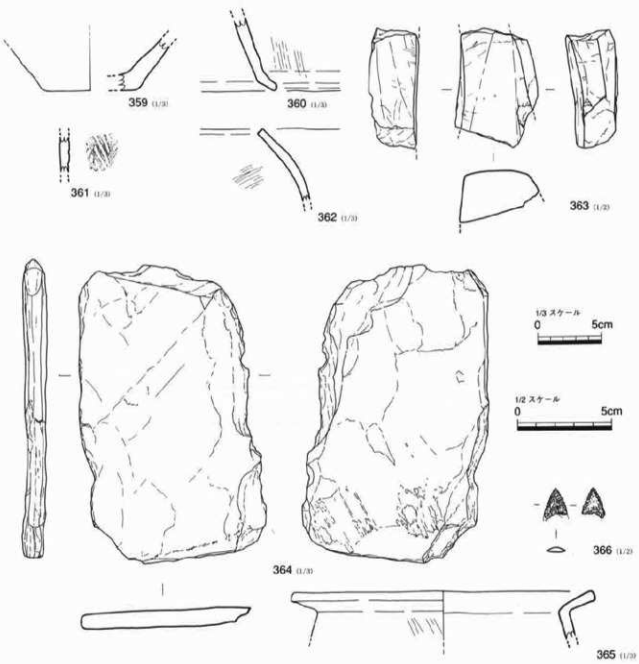


Fig.64 ピット（1SP343・416・457）出土遺物実測図（1/3・1/2）

4.3cm、幅9.1cm、厚さ1.7cm、重さ101.6 gを計測する。

1SK614（Fig.62・63、Pla.40・41）

弥生土器

鉢（339） 口径23.4cmを復元し、口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面刷毛目を施す。

甕（340～347） すべて口縁部は「く字状」を呈する。340は口径23.0cmを復元し、口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面刷毛目、内面ナデを施す。341～343は胴部が張らないタイプで調整は口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面は刷毛目、内面はナデの調整である。341は口縁部の器肉は薄く胴部は厚手である。342は口径16.0cm、343は17.2cmを復元する。344～347は平底を呈する底部細片である。344は底径6.0cm、345は底径8.2cm、346は底径11.2cm、347は底径8.0cmを測る。

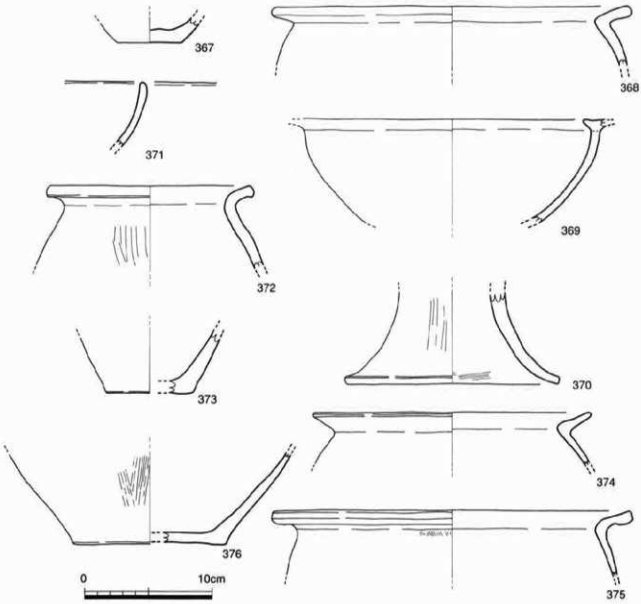


Fig.65　ピット（1SP458・461・465・627）出土遺物実測図（1/3）

壺（348～351）　348は稜線のある袋状口縁を呈し、口径20.6cmを復元する。頸部は朝顔形に開き、頸部と肩部の境には断面三角形の貼付突帯を施す。349は肩部細片である。頸部と肩部の境には断面三角突帯を貼り付けし、調整は頸部内外面は刷毛目、突帯部はヨコナデを施す350は「凸レンズ状」を呈する底部細片で底径9.0cmを測る。351は平底を呈し、底径11.2cmを復元する。

不明土製品（352）　断面逆台形状を呈する土製品で上面は刷毛目、側面はヨコナデ、下面はナデを施す。上部径7.6cm、下部径6.0cm、器高2.1cmを復元する。

高坏（353）　口縁端部を欠損するが鋤先形口縁を呈し、上面は平坦になると思われる。坏部は深く脚部は「ハ字状」に大きく開く。口縁部内外面・突帯部・脚裾部はヨコナデ、坏部内外面及び脚部外面は刷毛目、脚部内面は工具ナデを施す。脚裾径は19.2cmを復元する。

器台（354～356）　すべて脚部の細片である。354は脚裾径10.4cmを測り、外面刷毛目、内面ナデ、端部ヨコナデの調整である。355は脚裾径14.0cmを復元する。外面は調整不明で、内面はナデ、端部はヨコナデを施す。356は脚裾径15.0cmを復元し、外面は刷毛目、端部及び内面はナデである。

石器

敲石（357）　石材は安山岩製で周縁の一部に敲打痕を認める。長さ21.3cm、幅10.5cm、厚さ8.5cmを測る。

砥石（358）　石材は砂岩製と思われる。側面及び表裏面の一部を砥面として使用している。長さ22.6cm、幅14.4cm、厚さ4.1cmを測る。

ピット

1SP343（Fig.64、Pla.42）

弥生土器

壺（359）　厚手で平底を呈する底部細片で底径7.6cmを復元する。

器台（360）　脚部細片と思われる。外面刷毛目、内面工具ナデ、端部ヨコナデの調整を認める。

1SP416（Fig.64、Pla.42）

縄文土器

鉢（361）　外面に沈線文、内面にナデを施し、胎土は微砂粒、金雲母、角閃石を含む。

弥生土器

壺（362）　無頸壺口縁部細片で口縁端部は僅かに凹む。調整は口縁部内外面ヨコナデ、体部外面はナデ、体部内面は刷毛目である。

石器

砥石（363・364）　363は長さ6.2cm、幅4.2cm、厚さ2.7cm、重さ92.5ｇを計測する。石材は砂岩製と思われ、側面及び表面を砥面として使用している。364は長さ23.5cm、幅13.4cm、厚さ1.3cm、重さ895.0ｇを計測する。粘板岩製と思われ、側面及び表裏面の一部を砥面として使用している。

1SP457（Fig.64、Pla.42）

弥生土器

甕（365）　「く字状」口縁を呈する口縁部細片で口径23.5cmを復元する。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面は刷毛目、内面はナデを施す。

石器

石鏃（366）　両脚端部を欠損する。抉りのある二等辺三角形を呈するものと思われ、現存長1.6cm、幅1.0cm、厚さ0.3cm、重さ0.3ｇを計測する。表裏面の中央に剥片時のネガティヴ面を大きく残し、周縁に細かなリタッチを加えて刃部としている。

1SP458（Fig.65、Pla.42・43）

弥生土器

鉢（367）　底部は厚手で平底を呈する。底径5.0cmを復元する。

甕（368）　「く字状」口縁を呈する。口径28.4cmを復元し、内面はヨコナデの調整が認められる。外面は磨耗のため調整不明。

高坏（369・370）　369と370は同一個体と思われる。369は坏部破片で口縁部形状は撫先形を呈し、上面は平坦になるものと思われる。内口径は20.8cmを復元する。370は「ハ字状」に開く脚部破片で脚裾径は17.0cmを復元する。外面及び内面下位は刷毛目、内面ナデ、端部はヨコナデである。

1SP461（Fig.65、Pla.43）

弥生土器

鉢（371）　口縁部が内湾した口縁部細片で、胎土は微砂粒、金雲母、赤色粒子を含む。

甕（372）　「く字状」に外反した口縁部を呈し、口径15.8cmを復元する。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面は刷毛目、内面はナデを施す。

1SP465（Fig.65、Pla.43）

弥生土器

甕（373）　底部細片で平底を呈する。底径7.0cmを復元し、内外面はナデの調整が認められる。

1SP627（Fig.65、Pla.43）

弥生土器

甕（374～376）　374は口縁端部を摘み上げた「く字状」を呈し、口径21.8cmを復元する。口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面はナデの調整である。375は口径28.1cmを復元する。口縁端部は肥厚しており、口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面は刷毛目、内面はナデを施す。376は374と同一固体と思われる。底部は平底で底径12.0cmを復元する。調整は胴部外面は刷毛目、内面はナデである。

(4) 小結

当調査区で確認された遺構は竪穴住居8軒、掘立柱建物22棟、柵列5条、周溝状遺構12基、溝2条などであり、時期的には弥生時代中期中葉～後期後半にかけての集落遺跡であることが判定される。

竪穴住居は、残存状態が悪いながらも8軒を確認し、平面プランが方形または長方形を呈するものであった。何れの住居からも建物の屋根を支えるための主柱穴を検出することはなく、建物の構造を復元するまでに至らなかった。しかし、竪穴内部からは炉跡や屋内土坑等を確認しており、当該期における住居の内部構造を僅かながら垣間見ることができた。竪穴住居は概ね小～中クラスの大きさであり、一部の住居の切り合いでは建て直しの際に徐々に拡大していく変遷が窺えた。竪穴住居（1SI104）からは大量の炭化米が出土した。その数は完形で94,246粒を数え、くず米を合わせると約10万粒もの炭化米が出土したことになる。先述したように出土した炭化米をサンプルとして炭素14年代測定法による分析を行ったところ【炭素14年代（14C　BP）：2020±30】【較正年代（cal　BC）：105BC－AD60　95.4％】の結果を得た。この詳細なデータについては後章において参照する。

掘立柱建物は、検出された柱穴から1間×1間を18棟、2間×1間を3棟、規模不明建物を1棟の合計22棟を復元するに至った。この他にも多くの柱穴を検出しており、棟数的にはかなりの掘立柱建物が存在していたものと思われる。建物を構成する柱穴は、平面プランが円形、楕円形、隅丸方形など様々なバリエーションを呈し、底部からは柱痕跡の小ピットを認めるものも多く存在した。建物の中で一際大きい1SB900は、柱を支えていたと思われる礎板痕跡が柱穴底部で確認されており、集落のなかでも中心的建物であったことが想定される。

柵列は調査区南西部に集中するピット群を検出したことにより5条を復元した。各々の柵列を同時期のものと想定すると「コの字」形に配された柵列内に「L字状」の柵列が組み合わされたプランを呈し、その配置状況からは通路及びひとつの土地空間が得られた状態を呈する。柵列を構成するピットは掘立柱建物の柱穴と比較して小規模且つ貧弱であることから簡易的に造作されたものと考えられる。その用途については不明であるが、例えば小動物等を飼育するための施設などが創造されよう。

周溝状遺構は平面プランが円形状、楕円状、隅丸方形状を呈するものであり、12基が確認された。用途については不明であるが、周溝内からは多くの弥生土器を出土しており、竪穴住居・掘立柱建物とほぼ同時期の所産であることが比定される。

溝は南北溝と東西溝の2条が確認され、その規模から用排水路若しくは区画溝として機能していた可能性が考えられる。出土遺物から弥生時代後期の所産であることが想定される。

当調査区からは多くの樹木根痕跡が確認された（Fig.3略測図参照）。樹木が倒壊した際にできたと思われる窪みに対して埋土が流入したと想定され、矢印は樹木が倒壊したとみられる方向（黒色土→黄褐色土（地山））を示している。樹木根痕跡から当時の生活風景が想像される。

【註】

1.『弥生農耕の起源と東アジア－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－』平成16年度　研究成果報告（平成17年3月）pp31～32、pp54～55

Tab.1　古島榎崎遺跡（第1次調査）遺構台帳

No.番号	地区	遺構番号	種別	主な出土遺物	備考
1	AC7	1SX001	環濠状遺構	弥生土器（甕・壺・片）	
2	AB7				
3	AB6				
4	AB7				
5	AB7	1SK005	土坑	弥生土器（片）	
6	AB8	1SK006	土坑	弥生土器（甕・片）	
7	AB7	1SK007	土坑	弥生土器（片）	
8	AB7				
9	AB7				
10	AB7				
11	AA7	1SP011	ピット	弥生土器（片）	
12	AA7				
13	AB6				
14	AB5				
15	AB6	1SK015	土坑	弥生土器（甕・片）	
16	AB9	1SP016	ピット	弥生土器（片）	
17	AA8	1SK017	土坑	弥生土器（片），石器（石鏃）	
18	A7	1SP018	ピット	弥生土器（片），石器（サ・剥片）	
19	AB8	1SK019	土坑	弥生土器（甕・壺・片），獣骨（不明）	
20	AB9	1SP020	ピット	弥生土器（甕・片）	
21	AB9				
22	AA9				
23	AA9	1SP022	ピット	弥生土器（片）	
24	AA9				
25	Z9	1SK025	土坑	弥生土器（片）	
26	Z8				
27	Z8	1SP027	柱穴		1SA002（P3）
28	Z8				
29	Z8	1SP029	ピット		
30	AA7				
31	Z7	1SK031	土坑	弥生土器（片）	
32	Z7				
33	Z8				
34	Z7				
35	Z7				
36	Z7	1SP036	柱穴	弥生土器（片）	1SA002（P4）
37	Z8				
38	Z8				
39	Y8				1SA002（P2）
40	Y8	1SP040	ピット	弥生土器（甕）	
41	AA8				
42	Z7				
43	Z7				
44	Z6	1SP044	ピット	弥生土器（片）	
45	AA8	1SP045	ピット	弥生土器（片）	
46	Z7	1SP046	ピット	弥生土器（甕）	
47	Y7	1SP047	柱穴		1SA006（P1）
48	Y8	1SP048	柱穴	弥生土器（片）	1SA006（P2）
49	Y8	1SP049	柱穴		1SA006（P3）
50	Y8	1SP050	柱穴	弥生土器（片）	1SA005（P1）・1SA006（P4）
51	Y8	1SX051	溝状遺構	弥生土器（片）	
52	Y8				
53	Y8				
54	Y5	1SP054	ピット	弥生土器（片）	
55	X6				
56	W5	1SX056	環濠状遺構	弥生土器（片），石器（黒・剥片）	
57	V5	1SX057	環濠状遺構	弥生土器（片），石器（黒・剥片）	
58	V4	1SX058	環濠状遺構	弥生土器（甕・壺・片），石器（黒・サ・剥片・石斧）	
59	W5	1SK059	土坑	弥生土器（甕・壺・片）	
60	W5	1SK060	土坑	弥生土器（袋台・片），石器（黒・剥片）	
61	V5	1SP061	柱穴	弥生土器（甕・杯），石器（黒・剥片）	1SB098（P4）
62	V5	1SP062	ピット	弥生土器（甕）	
63	V5				
64	V5	1SP064	ピット	弥生土器（片）	
65	U5				
66	X6	1SP066	ピット	弥生土器（片）	
67	X6				
68	W6				
69	W6	1SK069	土坑	弥生土器（片）	
70	W6	1SP070	ピット	弥生土器（片）	
71	W6				
72	W7				
73	X7	1SP073	ピット	弥生土器（片）	
74	W7	1SK074	土坑	弥生土器（甕・鉢・片）	
75	V7	1SK075	土坑	弥生土器（甕・壺・高坏・鉢土鬼・片），石器（黒・剥片）	
76	V7	1SP075	ピット	弥生土器（片）	
77	V6	1SP077	柱穴	弥生土器（片）	1SB098（P5）
78	V6				
79	V6				
80	V5	1SP080	ピット	弥生土器（壺）	
81	U5				
82	U6				
83	U5				
84	U5	1SP084	ピット	弥生土器（片）	
85	U6	1SP085	柱穴	縄文土器（片），弥生土器（甕・片）	1SB098（P2）
86	U5	1SK086	土坑	縄文土器（片），弥生土器（片）	
87	T5				
88	R5	1SX088	環濠状遺構	縄文土器（片），弥生土器（甕・壺），石器（黒・サ・剥片）	
89	T5				
90	T5	1SP090	ピット	縄文土器（片），弥生土器（片）	
91	U5				
92	U5	1SP092	ピット	弥生土器（片）	

【註】黒→黒曜石・サ→サヌカイト

Tab.2　古島榎崎遺跡（第1次調査）遺構台帳

旧番号	地区	遺構番号	種別	主な出土遺物	備考
93	T5	18D093	溝状遺構	弥生土器（甕・片）	
94	T5				
95	T4	18P095	ピット	弥生土器（片）	
96	S4	18K096	土坑	弥生土器（片）	
97	R5	18K097	土坑	弥生土器（甕・片）	
98	R5	18X098	周溝状遺構	縄文土器（鉢・片）、弥生土器（甕・器台・片）、石器（黒・サ-剥片）	
99	S4				
100	R5	18P100	ピット	弥生土器（片）	
101	R4	18P101	ピット		
102	R5	18P102	ピット	弥生土器（甕・片）	
103	R6	18X103	周溝状遺構	縄文土器（片）、弥生土器（甕・壺・片）、石器（サ-剥片）	
104	U7	18I104	竪穴住居	縄文土器（片）、弥生土器（甕・壺・高坏・片）、炭化米	
105	U7				
106	U6				
107	U6				
108	T7				
109	T6				
110	U7				
111	T7				
112	T7				
113	S7				
114	S7	18P114	ピット	弥生土器（片）	
115	R8	18P115	ピット	縄文土器（片）、弥生土器（片）、石器（黒-剥片）	
116	Q4	18K116	不明遺構	縄文土器（片）、弥生土器（片）、石器（黒-剥片）	
117	P3	18K117	不明遺構	縄文土器（片）、弥生土器（片）、石器（黒-剥片）	
118	Q4	18K118	土坑	縄文土器（片）、石器（サ-剥片）	
119	Q4				
120	P3	18P120	ピット	縄文土器（片）、弥生土器（片）	
121	N3	18X121	不明遺構	弥生土器（甕・器台・片）、須恵器（甕）、土師器（小皿）、瓦器（碗）、陶器（片）、石器（黒・サ-剥片・砥石・敲石）	
122	N3	18P122	柱穴	弥生土器（器台・片）、石器（不明）	18B899（P3）
123	M3	18P123	ピット	弥生土器（片）	
124	M3				
125	M3				
126	M3				
127	J3	18X127	不明遺構	弥生土器（片）、須恵器（片）、土師器（片）、陶器（片）	
128	H2	18X128	周溝状遺構	弥生土器（甕・壺・高坏・甑・鉢・器台・片）、石器（砥石）	
129	G3	18X129	不明遺構	弥生土器（高坏・片）、石器（黒-剥片）	
130	D5	18P130	ピット	弥生土器（片）	
131	D6	18P131	ピット	弥生土器（片）	
132	D6				
133	D6				
134	D7				
135	D7	18K135	土坑	弥生土器（壺・高坏・片）	
136	D6	18P136	柱穴	弥生土器（片）、石器（磨石）	18B881（P4）
137	E9	18P137	柱穴		18B881（P5）
138	B5				
139	F8	18P139	柱穴		18B881（P6）
140	F8				
141	F8				
142	F7				
143	F7				
144	F5				
145	G7				
146	H6	18K146	土坑	弥生土器（器台・片）	
147	H6	18K147	土坑	弥生土器（片）	
148	G8				
149	G9				
150	G9	18P150	ピット	弥生土器（甕・片）	
151	G8				
152	G8				
153	F10	18P153	ピット	弥生土器（片）	
154	F10	18K154	土坑	石器（サ-剥片）	
155	G11	18P155	柱穴	縄文土器（片）、弥生土器（甕・器台・片）	18B901（P6）
156	I8	18P156	ピット	弥生土器（片）	
157	J8	18P157	ピット	弥生土器（片）	
158	K9	18P158	柱穴	弥生土器（片）	18B893（P1）
159	L9	18P159	柱穴	弥生土器（片）	18B893（P4）
160	K8	18P160	柱穴	弥生土器（片）	18B893（P3）
161	M8	18P161	ピット	縄文土器（片）、弥生土器（甕・片）	
162	M7	18P162	ピット	弥生土器（片）	
163	M7	18P163	柱穴		18B893（P2）
164	L7				
165	L7	18K165	土坑	弥生土器（甕・片）	
166	M7				
167	M7				
168	M7				
169	M8				
170	M8				
171	M8				
172	N8				
173	N8				
174	N8				
175	O8				
176	O8	18P176	ピット	弥生土器（片）	
177	O8				
178	O8	18P178	ピット	弥生土器（甕・片）	
179	O9	18P179	ピット	石器（黒曜石剥片）	
180	O9	18P180	ピット	弥生土器（片）	
181	O9				
182	O9	18K182	土坑	縄文土器（片）、弥生土器（片）	

【註】黒→黒曜石・サ→サヌカイト

Tab.3　古島榎崎遺跡（第1次調査）遺構台帳

通番	施設	遺構番号	種別	主な出土遺物	備考
183	N9	19P183	ピット	弥生土器（片）	
184	O9	19P184	ピット	弥生土器（器台・片）	
185	O10				
186	O10				
187	O11	19P187	ピット	石器（黒・剥片）	
188	N11				
189	N11				
190	N11				
191	N11	19P191	ピット	石器（中・剥片）	
192	N12				
193	N12				
194	N12				
195	N12				
196	N10				
197	N10	19P197	ピット	縄文土器（片）	
198	N10	19P198	ピット	弥生土器（片）	
199	N9				
200		19D200	溝	弥生土器（片）	
201	N9				
202	M9	19P202	ピット	弥生土器（片）	
203	M9	19P203	ピット	弥生土器（片）	
204	M9				
205	H10	19K205	土坑	弥生土器（片）	
206	H10	19P206	ピット	弥生土器（片）	
207	M8	19K207	土坑	弥生土器（礫・片）	
208	M8				
209	L12	19P209	柱穴	弥生土器（片）	19B085（P4）
210	K12	19P210	柱穴	弥生土器（片）	19B085（P3）
211	K12	19P211	柱穴		19B085（P2）
212	K12	19P212	柱穴		19B084（P1）
213	J11	19P213	柱穴		19B084（P2）
214	J11	19P214	柱穴		19B084（P4）
215	K10	19K215	土坑	弥生土器（片）	
216	J12	19P216	柱穴		19B085（P11）
217	J12				
218	J13	19K218	土坑	弥生土器（片）、石器（中・剥片）	
219	J13	19K219	土坑	弥生土器（片）	
220	H12	19X220	周溝状遺構	弥生土器（礫・片）、石器（中・剥片）	
221	I12				
222	I12				
223	I13				
224	H13				
225	I11	19P225	ピット	弥生土器（片）、石器（砥磐）	
226	I11				
227	J10				
228	J9				
229	J9				
230	J9	19P230	ピット	弥生土器（片）	
231	J9				
232	H9				
233	G10				
234	F11	19P234	柱穴		19B061（P4）
235	F11				
236	F10	19P236	柱穴	弥生土器（片）	19B061（P1）
237	E10	19P237	柱穴	弥生土器（片）	19B061（P2）
238	D10	19P238	柱穴		19B061（P3）
239	J7				
240	K6	19D240	竪穴住居	縄文土器（片）、弥生土器（礫・磨・片）、石器（黒・中・剥片・石錘？）	
241	J6	19K241	土坑		
242	I6				
243	I6				
244	H6				
245	K5	19P245	柱穴	弥生土器（礫・片）	19B090（P5）
246	M5	19P246	柱穴	弥生土器（片）	19B090（P2）
247	L4	19P247	柱穴	弥生土器（片）	19B090（P3）
248	L4	19P248	柱穴	弥生土器（片）	19B090（P4）
249	L4				
250	M4	19D250	竪穴住居		
251	N3				
252	L2				
253	L2				
254	M4				
255	E5	19P255	ピット	弥生土器（片）	
256	G5				
257	Q5	19P257	ピット		
258	Q5	19P258	ピット		
259	P5	19P259	ピット		
260	P5	19D260	竪穴住居	縄文土器（片）、弥生土器（礫・片）	
261	P6				
262	P6				
263	P7	19P263	ピット		
264	Q7	19P264	ピット		
265	Q7	19P265	ピット		
266	R6	19P266	ピット	縄文土器（片）、弥生土器（礫・片）	
267	L5	19P267	ピット	弥生土器（片）	19B090（P6）
268	L9	19D268	溝状遺構	縄文土器（片）、弥生土器（片）	
269	M7	19P269	柱穴		19B093（柱穴）
270	M7	19P270	柱穴		19B093（柱穴）
271	L9	19P271	ピット	縄文土器（片）	
272	M10	19P272	ピット	弥生土器（片）	
273	M10				

【註】黒→黒曜石・中→中多カイト

Tab.4　古島榎崎遺跡（第1次調査）遺構台帳

生番号	地区	遺構番号	時期	主な出土遺物	備考
274	AB9	18SX274	不明遺構	弥生土器（甕・器台・片）	
275	AA10				
276	Z10	18SP276	柱穴	弥生土器（片）	18A903（P3）・18A904（P6）
277	Z10	18SP277	ピット	弥生土器（片）	
278	Z10				
279	Z10	18SP279	柱穴		18A904（P5）
280	Z10	18SP280	柱穴	弥生土器（片）	18A903（P2）
281	Z9				
282	Z9				
283	Z9				
284	Z9	18SP284	ピット	弥生土器（片）	
285	Z9				
286	Y9	18SP286	ピット	弥生土器（片）	
287	Y9	18SP287	ピット	弥生土器（片）	
288	Y9				
289	X9	18SP289	柱穴	弥生土器（片）	18A904（P1）
290	X9	18SP290	ピット	弥生土器（片）	
291	X9	18SP291	ピット	弥生土器（片）	
292	X9				
293	Y9	18SP293	柱穴	弥生土器（片）	18A905（P2）
294	Z9	18SP294	ピット	弥生土器（片）	
295	Y9	18SP295	柱穴	弥生土器（片）	18A905（P3）
296	Y9				
297	Y9	18SP297	柱穴	弥生土器（片）、石器（黒・剥片）	18A904（P3）
298	Y9				
299	Z9	18SP299	柱穴	弥生土器（片）	18A905（P4）
300	Y10	18SP300	ピット	縄文土器（片）、弥生土器（片）	
301	Y10				
302	Z10				
303	Z10	18SP303	柱穴	弥生土器（片）	18A904（P4）
304	Z10				
305	Y10	18SP305	ピット	弥生土器（片）	
306	Y9	18SP306	柱穴		18A904（P2）
307	W9				
308	U9	18SP308	柱穴	縄文土器（片）、弥生土器（片）	18B897（P1）
309	T9	18SK309	土坑	縄文土器（片）、弥生土器（甕・壺・片）	
310	S10	18SX310	焼土遺構	弥生土器（甕・壺・鉢・高坏・器台・蓋・片）	
311	S10	18SP311	柱穴	縄文土器（片）、弥生土器（甕・器台・片）	18B895（P2）
312	T11	18SP312	ピット	弥生土器（片）	
313	T11				
314	T10				
315	S10	18SX315	焼土遺構	縄文土器（片）、弥生土器（片）、石器（中・剥片）	
316	S11				
317	R10				
318	R10				
319	S9	18SP319	ピット	縄文土器（片）、弥生土器（片）、石器（磨製斧）	
320	S9	18SP320	柱穴	縄文土器（片）、弥生土器（甕・器台・片）	18B895（P3）・18B896（P2）
321	S9	18SP321	ピット	弥生土器（片）	
322	S8	18SP322	柱穴	縄文土器（片）、弥生土器（片）	18B896（P1）
323	S9	18SP323	ピット	弥生土器（片）	
324	Q9				
325	V10				
326	V10				
327	V11	18SP327	ピット	弥生土器（甕・片）	
328	U11	18SK328	土坑	縄文土器（片）、弥生土器（鉢・片）、石器（中・剥片）	
329	V11	18SP329	ピット	弥生土器（甕・器台・片）	
330	V11	18SP330	ピット	弥生土器（鉢・片）	
331	X10				
332	X10				
333	X10				
334	W10				
335	W11				
336	X10				
337	X11	18SP337	ピット	弥生土器（片）	
338	Z11	18SP338	柱穴	弥生土器（壺・片）	18A903（P1）
339	Y11				
340	Y11	18SP340	ピット	弥生土器（片）	
341	Y11	18SP341	ピット	弥生土器（片）	
342	Y11	18SP342	ピット	弥生土器（片）	
343	Z12	18SP343	ピット	弥生土器（甕・高坏・片）	
344	AA11	18SP344	ピット	弥生土器（甕・片）	18B892（P4）
345	AA11	18SP345	ピット	弥生土器（甕・片）	
346	A12	18SP346	ピット	弥生土器（甕・片）	18B892（P3）
347	Z12	18SP347	ピット	弥生土器（甕・片）	
348	Z12	18SP348	ピット	弥生土器（片）	
349	Z12	18SP349	ピット	弥生土器（甕・片）	18B892（P2）
350	AA12				
351	AA13	18SP351	ピット	弥生土器（甕・壺・片）	18B892（P1）
352	Z12				
353	Z12	18SP353	ピット	弥生土器（片）	
354	Z12	18SP354	ピット	縄文土器（鉢・片）、弥生土器（甕・壺・片）	
355	Y12	18SK355	土坑	弥生土器（片）	
356	Y12	18SP356	ピット	縄文土器（片）、弥生土器（甕・片）	
357	Y12	18SP357	ピット	弥生土器（片）	
358	Y12	18SP358	ピット	弥生土器（片）	
359	X12	18SP359	ピット	弥生土器（片）	
360	X12	18SP360	ピット	弥生土器（片）	
361	X12				
362	X12				
363	W12	18SP363	ピット	弥生土器（片）	
364	W11	18SP364	ピット	弥生土器（片）、石器（黒・剥片）	
365	W11	18SP365	ピット	弥生土器（片）	

【註】黒→黒曜石・サ→サヌカイト

Tab.5　古島榎崎遺跡（第1次調査）遺構台帳

S番号	地区	遺構番号	種別	主な出土遺物	備考
366	V12	1SD366	溝	縄文土器（片）、弥生土器（片）、石器（黒-剥片）	1SD200と同一か？
367	V12	1SP367	ピット	弥生土器（片）	
368	V12				
369	U12	1SP369	ピット	弥生土器（片）	
370	U12	1SP370	ピット	弥生土器（片）	
371	U12	1SP371	ピット	弥生土器（片）	
372	U11				
373	U11				
374	U11	1SP374	ピット	弥生土器（片）	
375	T12				
376	T11	1SP376	ピット	弥生土器（片）	
377	T11				
378	T12	1SP378	ピット	弥生土器（器台・片）	
379	T12				
380	T13	1SP380	ピット	弥生土器（片）	
381	T12				
382	T12				
383	T12	1SP383	ピット	弥生土器（甕・片）、石器（サ-剥片）	
384	S12	1SP384	ピット	弥生土器（甕・片）	
385	S12				
386	S12	1SP386	柱穴	弥生土器（片）	1SB898
387	S12	1SP387	ピット	弥生土器（片）	
388	R12				
389	U13				
390	R13	1SP390	ピット	弥生土器（片）	
391	Q8	1SD391	溝状遺構	縄文土器（片）、弥生土器（甕・鉢・片）、石器（黒-剥片）	
392	R14	1SP392	柱穴	弥生土器（片）	1SB889（P4）
393	R15	1SP393	柱穴	弥生土器（片）	1SB889（P1）
394	Q14	1SP394	柱穴	弥生土器（片）	1SB889（P3）
395	Q15	1SP395	柱穴	縄文土器（片）、弥生土器（甕・器台・片）、石器（黒-剥片）	1SB889（P2）
396	U4	1SP396	柱穴	弥生土器（片）、石器（サ-剥片）	1SB898（P3）
397	O14	1SK397	土坑	縄文土器（片）、弥生土器（甕・器台・片）	
398	Q14	1SP398	ピット	弥生土器（片）	
399	Q15				
400	P10	1SK400	土坑	縄文土器（片）、弥生土器（甕・壺・高坏・器台・片）、石器（敲石・サ-剥片）	
401	Q13	1SP401	ピット	縄文土器（片）	
402	Q14				
403	N13	1SP403	柱穴		1SB886（P4）
404	N14	1SP404	柱穴	弥生土器（片）	1SB886（P1）
405	N14				
406	N13	1SP406	ピット	縄文土器（片）、弥生土器（片）	
407	N13	1SP407	柱穴		1SB886（P3）
408	M13				
409	M13				
410	M13				
411	M13				
412	M13				
413	M14	1SP413	柱穴		1SB886（P2）
414	M14				
415	H14	1SP415	ピット	弥生土器（片）	
416	H14	1SP416	ピット	縄文土器（片）、弥生土器（壺・片）、石器（砥石）	
417	M15				
418	L15				
419	L15				
420	L16				
421	L15				
422	J16	1SP422	柱穴	縄文土器（片）、弥生土器（片）	1SB883（P4）
423	I15	1SP423	柱穴	弥生土器（甕）	1SB883（P3）
424	I14				
425	I14				
426	I13	1SP426	ピット	縄文土器（片）	
427	J13	1SP427	ピット	石器（サ-剥片）	
428	R14	1SK428	土坑	縄文土器（片）、弥生土器（甕・壺・片）、石器（黒-剥片・砥石・石鏃）	
429	U14	1SP429	ピット	弥生土器（甕・鉢・片）	
430	U13	1SP430	ピット	弥生土器（甕・器台・片）	
431	U13	1SP431	ピット	弥生土器（片）	
432	T13	1SP432	ピット	弥生土器（片）	
433	T13	1SP433	ピット	弥生土器（片）	
434	U13	1SP434	ピット	縄文土器（片）、弥生土器（片）、石器（黒-剥片）	
435	U13				
436	U13				
437	T13				
438	T15	1SP438	ピット	弥生土器（片）	
439	S15				
440	S15				
441	S15				
442	S15				
443	R15	1SP443	ピット	弥生土器（片）	
444	R15	1SP444	ピット	弥生土器（甕・片）	
445	R15	1SP445	ピット	弥生土器（片）	
446	P9	1SP446	ピット	弥生土器（器台・片）、石器（黒-剥片）	
447	Q9	1SP447	ピット	弥生土器（片）	
448	S9	1SP448	ピット	縄文土器（片）、石器（黒-剥片）	
449	Z13	1SD449	溝状遺構	弥生土器（甕・片）	
450	Y14	1SP450	ピット	弥生土器（片）	
451	X15	1SK451	土坑	縄文土器（片）、弥生土器（甕・片）、石器（黒・サ-剥片）	
452	X15	1SP452	ピット	弥生土器（片）、石器（黒-剥片）	
453	W15	1SP453	ピット	弥生土器（片）	
454	X14				
455	W14				

【註】黒→黒曜石・サ→サヌカイト

Tab.6　古島榎崎遺跡（第1次調査）遺構台帳

土番号	地区	遺構番号	種別	主な出土遺物	備考
456	J15	1SP456	ピット	弥生土器（片）	
457	J15	1SP457	ピット	弥生土器（甕・片）、石器（黒.凝片・石錐）	
458	J15	1SK458	土坑	弥生土器（甕・鉢・高坏）	
459	Y15	1SP459	ピット	弥生土器（甕・片）	
460	I14				
461	Y14	1SP461	ピット	弥生土器（甕・鉢・片）	
462	I14	1SP462	ピット	弥生土器（甕・片）	
463	I14	1SP463	ピット	弥生土器（甕・片）	
464	Y14				
465	AA14	1SP465	ピット	弥生土器（甕・器台・片）	
466	AA12	1SP466	ピット	弥生土器（片）	
467	AA13	1SP467	ピット	弥生土器（片）	
468	AA12				
469	Y13	1SD469	溝状遺構	弥生土器（片）	
470	R14				
471	S15				
472	S15				
473	Z13				
474	Z13				
475	Z13	1SX475	不明遺構	縄文土器（片）、弥生土器（甕・器台・片）、石器（黒・サ・剥片）	
476	T9	1SP476	ピット	弥生土器（片）	
477	P16				
478	Q16				
479	Q16				
480	O16	1SA480	竪穴住居	弥生土器（甕・片）、石器（黒.剥片）	
481	Q9	1SP481	ピット	弥生土器（片）、石器（黒.剥片）	
482	L12	1SP482	柱穴		1SB091（P1）
483	Q8	1SP483	ピット	弥生土器（甕・片）、石器（黒.剥片）	
484	Q8	1SP484	ピット	弥生土器（片）、石器（サ.剥片）	
485	J10	1SP485	ピット	弥生土器（片）	
486	Q8	1SP486	柱穴	縄文土器（片）、弥生土器（甕・壺・片）	1SB096（P3）
487	～			弥生土器（片）	
488	～			弥生土器（片）	
489	AC8	1SP489	ピット	弥生土器（片）	
490	～			弥生土器（片）	
491	～			弥生土器（片）、石器（サ.剥片）石器（磨石）	
492	O6	1SP492	ピット	弥生土器（甕・片）	
493	M6	1SX493	竪穴住居	縄文土器（鉢・片）、弥生土器（甕）	
494	Q8	1SP494	ピット	弥生土器（片）	
495	O6	1SK495	土坑	弥生土器（甕・壺・鉢・高坏・器台・片）、石器（磨石）	
496	S6	1SP496	ピット	弥生土器（片）	
497	S6				
498	S7				
499	S7				
500	V7				
501	V7				
502	W7				
503	W7				
504	U6				
505	W5	1SP505	ピット	弥生土器（片）	
506	AS8				
507	AS7				
508	AC8	1SP508	ピット	弥生土器（甕・片）	
509	～				
510	F8	1SP510	ピット	弥生土器（片）	
511	L8	1SP511	ピット	弥生土器（甕・片）	
512	W21	1SP512	柱穴	弥生土器（片）	1SB090（P3）
513	W22	1SP513	柱穴	縄文土器（片）、弥生土器（甕・片）	1SB090（P2）
514	X22	1SP514	柱穴	弥生土器（甕・片）	1SB090（P1）
515	X21	1SP515	柱穴	弥生土器（片）	1SB090（P4）
516	W20	1SP516	柱穴		1SB091（P2）
517	W21	1SP517	柱穴		1SB091（P3）
518	X22	1SP518	柱穴		1SB091（P4）
519	X21	1SP519	柱穴	弥生土器（片）	1SB091（P3）
520	T9	1SP520	柱穴	縄文土器（片）、弥生土器（甕・片）、石器（石錐）	1SB095（P1）
521	X16	1SK521	土坑	縄文土器（片）、弥生土器（甕・高坏・片）、石器（黒・サ.剥片）	
522	Y15	1SK522	土坑	弥生土器（片）、石器（石錐）	
523	Z16				
524	Y16				
525	T16				
526	S15				
527	S16				
528	S16				
529	S16				
530	S16				
531	S16				
532	S16				
533	S16				
534	S17				
535	S18				
536	S17				
537	S17				
538	S17	1SK538	土坑	弥生土器（甕・壺・片）	
539	S17	1SK539	土坑	弥生土器（甕・片）	
540	S17				
541	S18	1SP541	ピット	縄文土器（片）	
542	S18				
543	S18				
544	S18				
545	S18				

【註】黒→黒曜石・サ→サヌカイト

Tab.7　古島榎崎遺跡（第1次調査）遺構台帳

S-番号	地区	遺構番号	種別	主な出土遺物	備考
546	R18				
547	R18				
548	Q18				
549	R18				
550	R18				
551	R18				
552	S18				
553	S18				
554	T18	1SK554	土坑	弥生土器（片）	1SH765（屋内土坑）
555	T18	1SK555	炉	弥生土器（片）	1SH765（炉）
556	V18	1SP556	ピット	縄文土器（片）、弥生土器（片）	
557	V20	1SP557	ピット	弥生土器（器台）	
558	W19				
559	Y18				
560	Y18				
561	Z19				
562	Y19	1SP562	ピット	弥生土器（壺・片）	
563	X20				
564	X20				
565	R20				
566	R20				
567	R20				
568	Z21				
569	X22				
570	X22				
571	X22				
572	X23				
573	X23				
574	X23	1SP574	ピット	石器（黒-剥片）	
575	Y23				
576	Y24				
577	Y24	1SP577	ピット	弥生土器（片）	
578	X24				
579	X24	1SP579	ピット	弥生土器（片）	
580	X24				
581	W24				
582	V24				
583	V24				
584	W23				
585	－	1SD585	溝	縄文土器（片）、弥生土器（甕・底）	
586	V23				
587	U23				
588	U24				
589	U24				
590	S24				
591	S24	1SP591	ピット	石器（サ-剥片）	
592	S24				
593	－				
594	M16				
595	M16	1SP595	柱穴		1SB887（P2）
596	U26	1SP596	ピット	弥生土器（片）	
597	－				
598	P17	1SP598	ピット	弥生土器（片）	
599	P17	1SP599	ピット	弥生土器（片）	
600	N18	1SK600	土坑	弥生土器（片）	
601	Y26	1SP601	ピット	弥生土器（片）	
602	AA9	1SP602	ピット	弥生土器（甕・器台・片）	
603	AA9	1SP603	柱穴	弥生土器（甕・片）	1SA903（P5）
604	Z8	1SK604	土坑	弥生土器（片）、黒色土器（椀）、土師器（片）	
605	Z9	1SK605	土坑	弥生土器（甕・片）、土師器（片）	
606	AA8	1SP606	ピット	弥生土器（片）	
607	P10	1SP607	ピット	弥生土器（片）	
608	AA10	1SP608	柱穴	弥生土器（甕・器台・片）、石器（砥石）	1SA903（P4）
609	AA9				
610	AA9				
611	AA9				
612	AA9	1SP612	ピット	弥生土器（片）	
613	Z9	1SP613	ピット	弥生土器（甕・片）	
614	AA9	1SK614	土坑	弥生土器（甕・壺・器台・高坏・片）、石器（砥石）	
615	AA8	1SK615	土坑	弥生土器（壺・片）	
616	AA9	1SP616	ピット	弥生土器（壺・片）	
617	AB10	1SP617	ピット	弥生土器（片）	
618	AA10	1SP618	ピット	縄文土器（片）、弥生土器（甕・片）	
619	AA10	1SP619	ピット	弥生土器（甕・片）	
620	Y14	1SP620	ピット	弥生土器（片）、石器（黒-剥片）	
621	O20	1SP621	柱穴	弥生土器（片）、石器（サ-剥片）	1SB888（P1）
622	O21				
623	O20	1SP623	ピット	弥生土器（片）、石器（黒-剥片）	
624	N20	1SP624	柱穴	弥生土器（壺・器台・片）	1SB888（P3）
625	N21	1SP625	柱穴	弥生土器（片）	1SB888（P2）
626	N21	1SP626	ピット	弥生土器（片）	
627	P9	1SP627	ピット	弥生土器（甕・片）	
628	R8	1SP628	柱穴	縄文土器（片）、弥生土器（甕・片）、石器（サ-剥片）	1SB896（P4）
629	R10	1SP629	ピット	弥生土器（片）	
630	O18	1SP630	ピット	弥生土器（片）	
631	Q16				
632	Q16				
633	Q16				
634	Q17				
635	P17				
636	P17				
637	P17				

【註】黒→黒曜石・サ→サヌカイト

Tab.8　古島榎崎遺跡（第1次調査）遺構台帳

台帳No	地区	遺構番号	種別	主な出土遺物	備考
629	P16				
630	N17	10X630	機乱	弥生土器（片）	
640	N16				
641	N16	10P641	杭穴		10P697（P4）
642	N17	10P642	杭穴		10P697（P3）
643	P18				
644	Q17				
645	Q18				
646	Q18				
647	Q18				
648	Q18				
649	Q18				
650	O18				
651	O19	10P651	杭穴		10P688（P4）
652	N19				
653	M20				
654	N20				
655	M20				
656	N21				
657	O20				
658	O20				
659	Q20				
660	Q20				
661	P21				
662	P21				
663	P21				
664	P21				
665	Q21				
666	R21				
667	R21				
668	P22				
669	Q23				
670	Q24				
671	A67				
672	A68				
673	A83				
674	A86				
675	A87				
676	A88				
677	A88				
678	A87				
679	A88				
680	27				
681	A89				
682	A89	10P682	杭穴		10A902（P1）・10A903（P6）
683	A88				
684	AB10				
685	Y8				
686	Y8				
687	Y8				
688	Y8				
689	X11				
690	U12				
691	X25				
692	X26				
693	X26				
694	X26				
695	X27				
696	W26				
697	V24				
698	V24				
699	V25				
700	V25				
701	W26				
702	W25				
703	W25				
704	W25				
705	W25				
706	V25				
707	W26				
708	V26				
709	V26				
710	T26				
711	S26				
712	S25				
713	S26				
714	S26				
715	S26				
716	S26				
717	S26				
718	T26				
719	T26				
720	S27				
721	T27				
722	T27				
723	X15	10P723	ピット	弥生土器（片）	
724	T27	10P724	ピット	弥生土器（甕・杯）	
725	V13	10P725	ピット	弥生土器（甕・杯）	
726	V13				
727	X13	10P727	ピット	縄文土器（片）、弥生土器（片）	
728	P16	10P728	ピット	弥生土器（片）	
729	V7	10K729	土坑	弥生土器（壺）、炭化米	15I104（屋内土坑）

【註】黒→黒曜石・サ→サヌカイト

Tab.9　古島榎崎遺跡（第1次調査）遺構台帳

生番号	地区	遺構番号	種別	主な出土遺物	備考
730				弥生土器（片）	
731	V9	18R731	土坑	弥生土器（甕・片）	
732	V8	18P732	ピット	縄文土器（片）、弥生土器（片）	
733	V8	18P733	ピット	弥生土器（甕・片）	
734	V8	18P734	柱穴	弥生土器（片）、石器（黒-剥片）	18S897（P4）
735	V9				
736	W7				
737	AA11				
738	U8				
739	S13	18P739	ピット	弥生土器（片）	
740	S14	18P740	ピット	弥生土器（片）	
741	S14	18P741	ピット	弥生土器（片）	
742	S13	18P742	ピット	弥生土器（片）	
743	V12			弥生土器（片）	
744	R8	18P744	ピット	弥生土器（甕・片）	
745	R9	18P745	ピット	縄文土器（片）、弥生土器（片）	
746	R7	18P746	ピット	弥生土器（甕・片）	
747	Q6	18P747	ピット	縄文土器（片）	
748	Q13	18P748	ピット	弥生土器（片）	
749	P5	18P749	ピット	弥生土器（片）	
750	P13	18P750	ピット	弥生土器（片）	
751	U9	18P751	柱穴	縄文土器（片）、弥生土器（片）、石器（黒-剥片）	18S897（P3）
752	U9	18P752	ピット	弥生土器（片）	
753	U7	18P753	ピット	弥生土器（片）	
754	U7	18P754	柱穴	弥生土器（片）	18S898（P6）
755	U7	18P755	ピット		
756	U7	18P756	ピット		
757	U7	18K757	炉		18S104（炉）
758	U8				
759	U8	18P759	ピット		
760	U8	18P760	ピット		
761	T8	18P761	ピット		
762	T8	18P762	ピット		
763	R7	18P763	ピット	縄文土器（片）、弥生土器（片）	
764	S9	18P764	柱穴	縄文土器（片）、弥生土器（片）	18S895（P4）
765	T17	18P765	整穴住居	石器（中-剥片・円盤）	
766	G11	18P766	柱穴	弥生土器（甕・片）	18S882（P4）
767	G12	18P767	柱穴	弥生土器（甕・片）	18S882（P3）
768	G12	18P768	柱穴		18S882（P2）　18S901（P2）
769	F12	18P769	柱穴		18S882（P1）
770	G12	18P770	柱穴		18S901（P1）
771	F12	18P771	柱穴		18S901（P3）
772	J15	18P772	柱穴	弥生土器（片）、石器（黒-剥片）	18S883（P1）
773	I15	18P773	柱穴		18S883（P2）
774	T16	18P774	ピット	弥生土器（片）	
775	T15	18P775	ピット	弥生土器（片）	
776	V22	18P776	ピット	弥生土器（片）	
777	X23	18P777	ピット	弥生土器（片）	
778	S19	18P778	ピット	石器（不明）	
779	P16	18P779	ピット	縄文土器（片）、弥生土器（片）、石器（黒-剥片）	
780	J17	18K780	土坑	石器（不明）	
781	D6				
782	E8	18X782	風倒木痕	石器（黒-サ-剥片）	
783	R4	18K783	土坑	石器（中-剥片）	13S104（屋内土坑）
784	Q2	18K784	土坑	弥生土器（片）	13S260（屋内土坑）
785	Q5	18P785	ピット	縄文土器（片）、弥生土器（片）	
786	Q5	18P786	ピット	縄文土器（片）、弥生土器（片）	
787	Q5				
788	P11				
789	O11	18P789	ピット		
790	T12	18P790	ピット	弥生土器（片）	
791	P11				
792	P11				
793	O13				
794	I12				
795	I2				
796	P26				
797	P27				
798	O13				
799	N14				
800	P15				
801	N17				
802	O18				
803	O18				
804	O18				
805	O18				
806	O18				
807	O16	18P807	ピット		
808	O16	18P808	ピット		
809	O16				
810	S13				
811	S12				
812	R14				
813	S14				
814	T13				
815	U12				
816	S12				
817	S12				
818	S13				
819	T13				
820	U13				
821	T13				

【註】黒→黒曜石・サ→サメガイ

Tab.10　古島榎崎遺跡（第1次調査）遺構台帳

旧番号	地区	遺構番号	種別	主な出土遺物	備考
822	J14				
823	J14				
824	J14				
825	H14				
826	H15				
827	H15				
828	H19				
829	Y20				
830	W24				
831	U20				
832	W13				
833	X16				
834	Z17				
835	V25				
836	U27				
837	T26				
838	T27				
839	T27				
840	U15				
841	Z15				
842	N4	1SP842	柱穴	弥生土器（片）	1SB899（P1）
843	M4	1SP843	柱穴	弥生土器（片）	1SB899（P2）
844	L6	1SP844	柱穴	弥生土器（片）	1SB900（P1）
845	K6	1SP845	柱穴		1SB900（P2）
846	K7	1SP846	柱穴	弥生土器（片）	1SB900（P3）
847	J6	1SP847	柱穴		1SB900（P4）
848	−				
849	−				
850	−				
851	M15	1SP851	柱穴	弥生土器（片）	1SB887（P3）
852	N7	1SP852	ピット	縄文土器（片）	
853	N7	1SP853	ピット	石器（不明剥片）	
854	K3	1SP854	柱穴	弥生土器（甕・壺・片）	1SB898（P1）
855	X14	1SP855	ピット	弥生土器（片）	
856	N5	1SK856	土坑	弥生土器（片）、石器（黒-剥片）	1SH493（屋内土坑）
857	L5	1SP857	ピット	縄文土器（片）	
858	−				
859	−				
860	N6	1SH860	竪穴住居	弥生土器（甕・壺・高坏・片）、石器（黒・サ-剥片）	
861	M6	1SK861	土坑	弥生土器（片）	1SH493（屋内土坑）
862	N4	1SP862	ピット	弥生土器（甕・片）	
863	M4	1SK863	土坑	弥生土器（甕・器台）	
864	M4	1SK864	土坑	弥生土器（片）	1SH250（屋内土坑）
865	M4	1SK865	柱穴	弥生土器（壺）	1SB894（P1）
866	K6	1SK866	炉	弥生土器（片）	1SH240（炉）
867	M4	1SK867	土坑	弥生土器（片）	1SH250（屋内土坑）
868	N5	1SP868	ピット	弥生土器（片）	
869	T9	1SP869	柱穴		1SB897（P2）
870	L5				
871	K6	1SK871	土坑		1SH240（屋内土坑）
872	K5	1SK872	土坑		1SH240（屋内土坑）
873	L6	1SK873	土坑		1SH493（屋内土坑）
874	L6	1SP874	ピット		1SH493（ピット）
875	M4	1SP875	土坑		1SH250（屋内土坑）
876	M4	1SP876	ピット		
877	M5	1SP877	ピット		
878	M4	1SP878	ピット		
879	N4	1SP879	ピット		
880	M6				
881	D9	1SB881	掘立柱建物		1×2間；S-136・137・139・236・237・238
882	F12	1SB882	掘立柱建物		1×1間；S-766・767・758・769
883	I15	1SB883	掘立柱建物		1×1間；S-422・423・772・773
884	J12	1SB884	掘立柱建物		1×1間；S-212・213・214・216
885	K12	1SB885	掘立柱建物		1×1間；S-209・210・211・482
886	N13	1SB886	掘立柱建物		1×1間；S-403・404・407・413
887	M16	1SB887	掘立柱建物		1×1間；S-595・641・642・851
888	N20	1SB888	掘立柱建物		1×1間；S-621・624・625・651
889	R14	1SB889	掘立柱建物		1×1間；S-392・393・394・395
890	X21	1SB890	掘立柱建物		1×1間；S-512・513・514・515
891	X21	1SB891	掘立柱建物		1×1間；S-516・517・518・519
892	AA12	1SB892	掘立柱建物		344・346・349・351
893	AA9	1SB893	掘立柱建物		1×1間；S-20・612・615・619
894	Z7	1SB894	掘立柱建物		3×3間；S-36・49・50・51・284・288・293・295・299・405・606
895	H9	1SB895	掘立柱建物		1×1間；S-311・320・520・764
896	H8	1SB896	掘立柱建物		1×1間；S-320・322・446・628
897	U8	1SB897	掘立柱建物		1×1間；S-308・734・759・869
898	U5	1SB898	掘立柱建物		1×2間；S-61・77・85・388・754・854
899	T4	1SB899	掘立柱建物		1×2間；S-58・78・96・36
900	K5	1SB900	掘立柱建物		1×2間；S-243・267・844・845・846・877
901	L4	1SB901	掘立柱建物		1×1間；S-246・247・248・865
902	Z7	1SA902	柵列		S-027・036・041・682
903	AH9	1SA903	柵列		S-276・280・338・683・608・682
904	Y9	1SA904	柵列		S-276・279・297・303・306・289
905	Y9	1SA905	柵列		S-050・293・295・299
906	Y8	1SA906	柵列		S-047 ~ 051
907	D4	1SP907	柱穴		1SB898（P4）

2.古島榎崎遺跡（第2次調査）

(1) はじめに

当遺跡は筑後市大字古島字榎崎451-1に所在する。筑後西部地区県営干拓地等農地整備事業の非農用地内に予定された筑後地区農業共済組合事務所新設工事に伴う発掘調査であり、面積約4317㎡のうち、遺跡破壊を受ける浄化槽部分約65㎡のみを調査対象範囲と設定した。発掘調査は小林勇作が担当し、平成10年5月22日から同年6月4日まで実施した。この間、考古学的手法による表土剥ぎ・遺構検出・遺構掘削・実測作業・写真撮影・整理作業等を行い、報告書作成作業は平成17年度に行った。調査の結果、溝1条と弥生土器・石器を認めた。以下は、主要な遺構と遺物について報告する。

(2) 検出遺構

溝

2SD1（Fig.66、Pla.45）

調査区中央部で確認した。東南－北西方向にはしるほぼ直線的な溝であり、北西部は溝幅が徐々に拡張している。溝の両端部は調査区外へ展開しており約11m分を検出した。方位はN-49° 38′ 07″ -Wを示し、幅は0.86～1.16m、遺構検出面からの深さは最大で0.10mを測り、溝底は東南高－北西低となる。埋土は黒茶色砂（10cm位の礫を多く含む）単一層であり、弥生土器底部1点、石器（石包丁）1点が出土した。

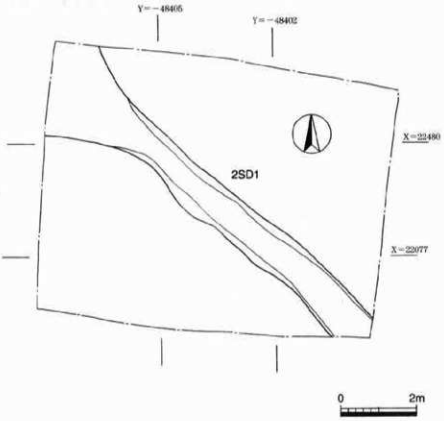


Fig.66 古島榎崎遺跡（第2次調査）遺構全体実測図（1/100）

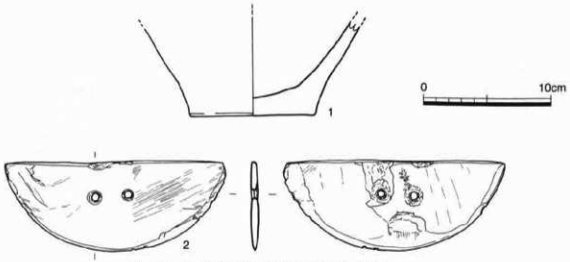


Fig.67　溝（2SD1）出土遺物実測図（1/3）

(3) 出土遺物

溝

2SD1（Fig.67、Pla.46）

弥生土器

甕（1）　大型品の底部破片と思われ、全体的に器肉が厚く底径10.0cmを復元する。調整は内外面ナデで胎土に砂粒・金雲母を多く含む。内外面に二次焼成と思われる煤が付着している。

石器

石包丁（2）　ほぼ完形の外湾刃半月形を呈した磨製石包丁で石材は粘板岩製と思われる。刃部は両刃、体部に円形を呈する紐孔を表裏面から2孔穿つ。長さ7.0cm、幅17.3cm、厚さ0.6cm、重さ123.9ｇを計測する。

(4) 小結

当調査区で検出された溝は極めて残存状況の悪い状態であったが、溝内から弥生土器及び大型の石包丁を出土した。溝の規模から用排水路若しくは区画溝の性格が考えられるが、第1・3次調査地点に弥生時代中期後半から後期後半にかけての集落跡が確認されていることからその関連遺構と想定される。

Tab.11　古島榎崎遺跡（第2次調査）遺構台帳

本番号	地区	遺構番号	種別	主な出土遺物	備考
1	—	2SD1	溝	弥生土器（甕）、石器（石包丁）	

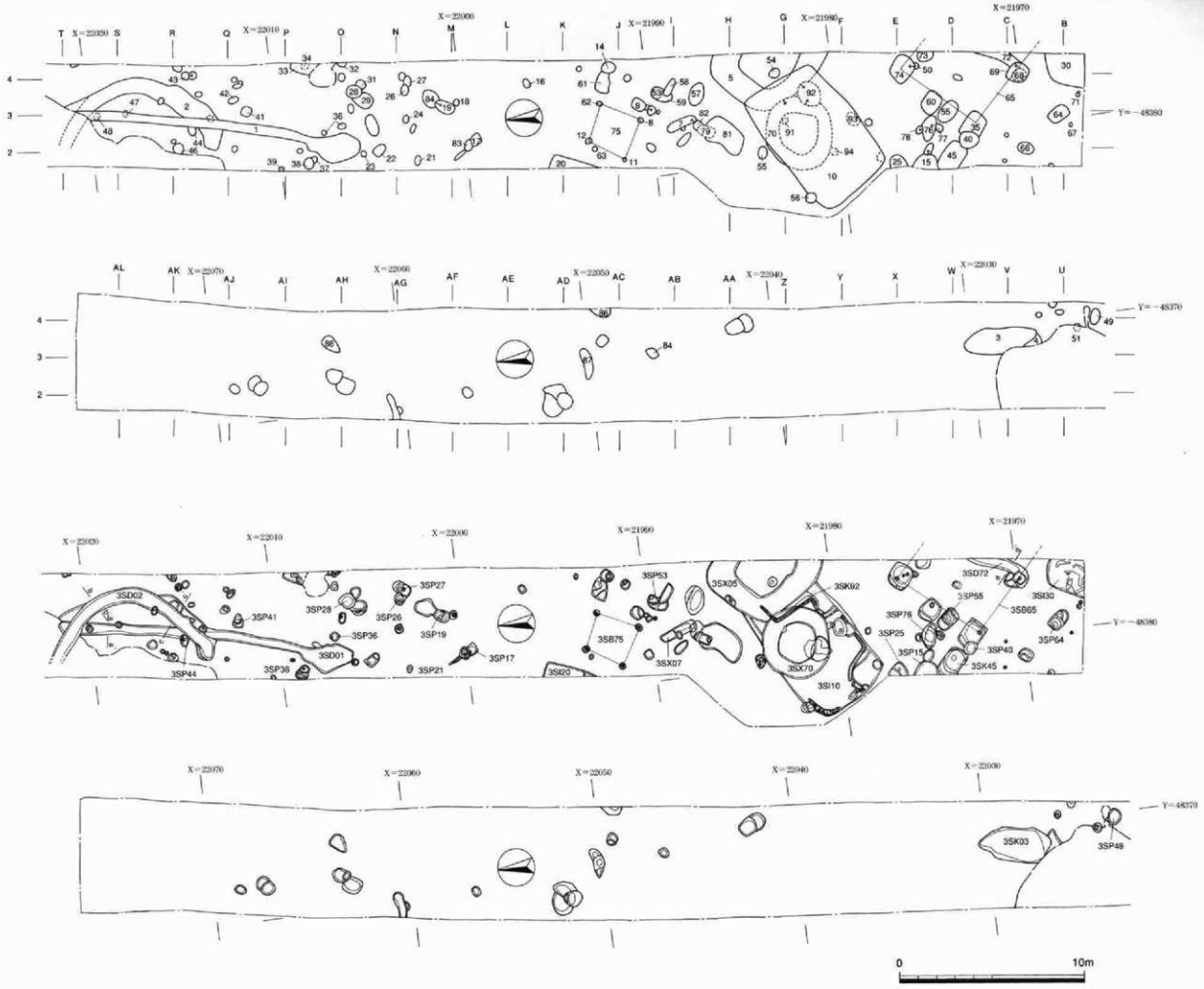


Fig.68　古島榎崎遺跡（第３次調査）遺構略測図・遺構全体実測図（1/200）

3.古島榎崎遺跡（第3次調査）

(1) はじめに

当遺跡は筑後市大字古島字榎崎に所在する。筑後西部地区県営干拓地等農地整備事業の非農用地内に予定された新設道路の発掘調査であり、面積約685㎡を調査対象範囲と設定した。発掘調査は小林勇作が担当し、平成10年5月26日から開始、考古学的手法による表土剥ぎ・遺構検出・遺構掘削・実測作業・

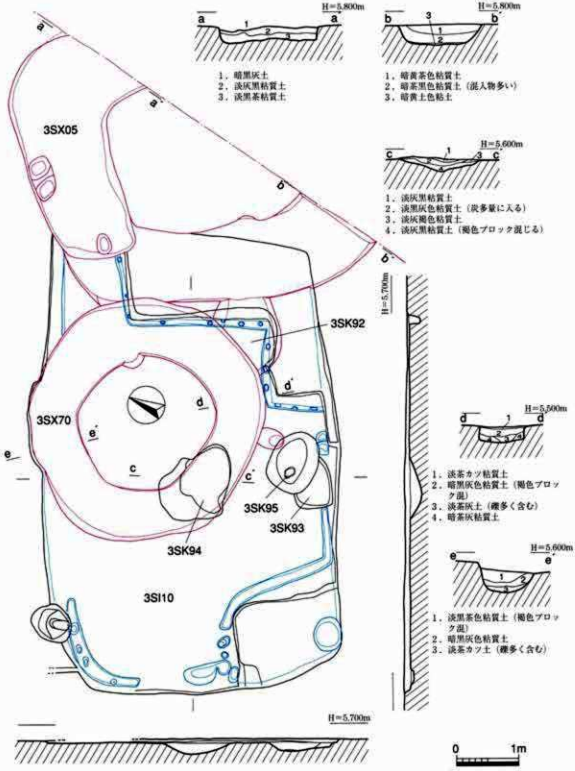


Fig.69　竪穴住居（3SI10）、周溝状遺構（3SX05・70）実測図（1/60）

写真撮影・整理作業等を行い、同年6月30日に終了した。報告書作成作業は平成17年度に行った。調査の結果、竪穴住居・掘立柱建物・周溝状遺構・溝・土坑等の遺構が確認され、縄文土器・弥生土器・土師器・石器等（パンコンテナー10箱程度）の出土遺物を得ることができた。

(2) 検出遺構

竪穴住居

3SI10（Fig.69、Pla.48・49）

調査区の南部F2区に位置し、周溝状遺構（1SX05・70）を切るように検出した。竪穴住居の平面形は北東－南西方向に長い隅丸長方形状を呈し、主軸の方位はN-62°51′01″-Eを示す。長軸7.30m×短軸4.70m、深さは最大で0.20mを測り、住居の床面には貼床が施されていた。床面は部分的に2面を確認しており、床面の修復によるものと想定される。この床面からはベッド状遺構・炉跡（3SK94）・屋内土坑（3SK93・95）を各々で検出したが、建物の主柱穴は確認されなかった。更に、竪穴住居底面からは周壁並びにベッド状遺構に沿って小溝が廻らされており、小溝内底面には径10～20cm程度の小杭痕跡が確認された。出土遺物は弥生土器（甕・壺・器台・片）、須恵器（片）、石器（石鏃）、ガラス玉等が認められた。

・ベッド状遺構

竪穴住居の南東隅並びに南西隅に位置し、上部は削平された状態で検出した。南西隅のベッド状遺構は逆L字形の平面プランを呈し、現存する面積は約4.4㎡を測る。一方、南西隅に位置するベッド状遺構の平面プランは方形状を呈し、現存の面積は約1.8㎡を測る。

・炉跡

3SK94は竪穴内部のほぼ中央で検出し、平面形は不整円形状、断面形はすり鉢状を呈する。長軸1.38m×短軸1.03m、床面からの深さは0.20mを測り、埋土中からは多量の炭化物と少量の弥生土器（片）が認められた。

・屋内土坑

3SK93は南壁付近で3SK95を切るように検出した。平面形は隅丸方形状を呈し、長軸0.80m×短軸0.63m、床面からの深さは0.10mを測り、埋土中からは弥生土器（片）が出土している。3SK95は南壁付近で検出し、3SK93に切られる。平面形は楕円形状を呈し、長軸0.97m、短軸0.77m、床面からの深さは0.11mを測り、出土遺物は石器（不明）が底面から確認された。

3SI20（Fig.70、Pla.49）

調査区南部J1区に位置し、竪穴住居の北東隅部分を僅かに検出した。3SI10と同じくコーナー部にベッド状遺構が

Fig.70 竪穴住居（3SI20・30）実測図（1/60）

設置されていたものと思われ、土層断面で黄茶色粘質土ブロックを多く含む淡茶色粘質土が確認されている。覆土中からは弥生土器（片）が僅かに出土した。

3SI30（Fig.70・Tab.50）

調査区南端B4区に位置した竪穴住居であり、大半は調査区外へ展開するため建物規模は不明である。床は地山削り出しの状態であったと思われ、竪穴底面直上からは多量の炭化物が広範囲で確認された。炭化物に建築部材と思われる木材をを含んでいたことから火災に見舞われた建物であることが想定される。なお、床面及び周壁での焼成痕跡は確認されなかった。遺物は弥生土器（片）、石器（剥片）が出土した。

掘立柱建物

3SB65（Fig.71、Pla.51）

調査区南部B5区で確認した建物であり、これより更に調査区東側へ展開することが予想されることから梁行1間×桁行2間以上の建物と考えられる。柱穴P1～4を検出し、P1は3SD72を切り、P2は3SP40に切られる。柱穴の深さは0.34～0.52mを測り、平面プランは方形または長方形状を呈する。すべての柱穴底面からは柱痕跡とみられる径20cm前後の小ピットを確認した。方位はN-33°28′34″-Eを示し、弥生土器（甕・高坏・器台・片）が出土している。

3SB75（Fig.71、Pla.51）

調査区南部I3区で確認した梁行1間×桁行1間の建物である。柱穴は

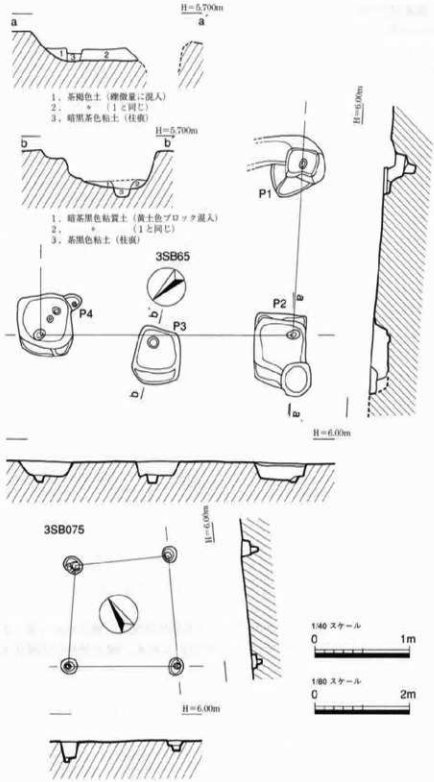


Fig.71　掘立柱建物（3SB65・75）実測図（1/40・1/80）

P1～6を検出し、平面プランは楕円形状を呈する。深さは0.10～0.33mを測り、柱穴底面からは径10cm前後の小ピットを確認した。桁行方位はN-25° 51′ 58″ -Eを示し、梁行平均長2.15m、桁行平均長2.25mを測る。全ての柱穴から弥生土器（片）が僅かに出土している。

柱穴

3SP15（Fig.72）

調査区D1区に位置し、遺構西部は調査区外へ展開するため遺構の規模については不明である。検出面からの深さは0.11m、柱痕は径0.27m前後を測る。底面は概ね平坦で埋土中からは弥生土器（甕・高坏・片）が出土した。

3SP17（Fig.72）

調査区L2区に位置する。平面プランは方形状を呈し、幅0.53m×深さ0.31m、柱痕は径0.12m前後を測る。底面は概ね平坦で柱痕の小ピットが認められる。埋土中からは弥生土器（片）が出土した。

3SP19（Fig.72）

調査区M3区に位置し、3SP84を切る。平面プランは楕円形状を呈し、長さ0.83m×幅0.55m×深さ0.58m、柱痕は径0.20m前後を測る。土層断面では柱痕を中心とする周辺の裏込めに粘質土を丁寧に積み重ねている状況が窺えた。埋土中からは弥生土器（片）が出土した。

3SP21（Fig.72）

調査区M1区に位置する。平面プランは楕円形状を呈し、長さ0.40m×幅0.26m×深さ0.25m、柱痕は径0.16m前後を測る。埋土中からは弥生土器（片）が出土した。

3SP25（Fig.72）

調査区E1区に位置し、遺構西部は調査区外へ展開するため遺構の規模については不明である。遺構内北側にテラスを認め、検出面からの深さは0.45m、柱痕は径0.15m前後を測る。弥生土器（甕・片）が出土した。

3SP26（Fig.72）

調査区M3区に位置し、3SP27を切る。平面プランは円形状を呈し、径0.55m×深さ0.48m、柱痕は径0.22m前後を測る。土層断面から柱は抜き取られた可能性がある。弥生土器（高坏・片）、石器（剥片）が出土した。

3SP27（Fig.72）

調査区M3区に位置し、3SP26に切られる。平面プランは楕円形状を呈し、長さ1.00m×幅0.60m×深さ0.48m、柱痕は径0.17m前後を測る。埋土中からは弥生土器（甕・片）が出土した。

3SP28（Fig.72）

調査区N3区に位置し、3SP29・31を切る。平面プランは隅丸方形状を呈し、長さ0.76m×幅0.62m×深さ0.50m、柱痕は径0.22m前後を測る。土層断面では柱痕を中心とする周辺の裏込めに粘質土を丁寧に積み重ねている状況が窺えた。埋土中からは弥生土器（甕・片）が出土した。

3SP36（Fig.72）

調査区N2区に位置する。平面プランは方形状を呈し、幅0.43m×深さ0.40m、柱痕は径0.12m前後を測る。底面は概ね平坦で柱痕の小ピットが認められる。埋土中からは縄文土器（片）、弥生土器（片）が出土した。

3SP38（Fig.72）

調査区O1区に位置し、3SP37を切る。平面プランは楕円形状を呈し、幅0.62m×深さ0.51m、柱痕は径0.10m前後を測る。土層断面では柱痕を中心とする周辺の裏込めに粘質土を丁寧に積み重ねている状況が窺えた。埋土中からは弥生土器（甕・片）が出土した。

3SP40（Fig.72）

調査区C2区に位置し、掘立柱建物（3SB65-P2）及び土坑（3SK45）を切る。平面プランは円形状を呈

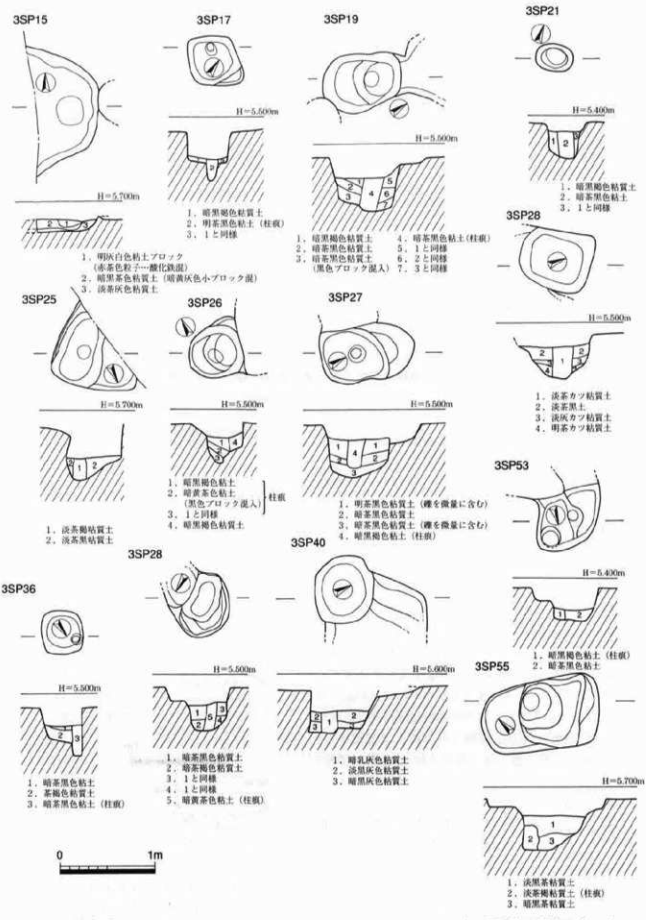


Fig.72　柱穴（3SP15・17・19・21・25～28・36・38・40・53・55）土層断面実測図（1/40）

し、幅0.73m×深さ0.53m、柱痕は径0.17m前後を測る。土層断面では柱痕を中心とする周辺の裏込めに粘質土を丁寧に積み重ねている状況が窺えた。埋土中からは弥生土器（鉢・高坏・片）が出土した。

3SP53（Fig.72）

調査区I3区に位置し、3SK59に切られる。平面プランは楕形状を呈し、幅0.60m前後×深さ0.35m、柱痕は径0.12m前後を測る。埋土中からは弥生土器（片）が出土した。

3SP55（Fig.72）

調査区G1区に位置する。平面プランは隅丸長方形状を呈し、長さ1.27m×幅0.74m×深さ0.53m、柱痕は径0.16m前後を測る。埋土中からは弥生土器（甕・高坏・片）が出土した。

周溝状遺構

3SX05（Fig.69、Pla.52）

調査区南部G3区に位置する。竪穴住居（3SI10）・周溝状遺構（3SX70）・土坑（3SK92）に切られ、遺構の東側は調査区外へ展開する。大型で方形タイプの周溝状遺構であり、東西方向の外径は4.40m、内径2.35m、深さ0.30m前後を測る。溝の断面形は逆台形状を呈し、溝底はほぼ平坦な状態である。出土遺物は弥生土器（甕・壺・高坏）、石器（剥片）が出土した。

1SX70（Fig.69、Pla.52）

調査区南部F2区に位置した円形タイプの周溝状遺構であり、切り合いは3SX05→3SX70→3SI10・3SK92となる。外径3.95m、内径1.95m、深さは0.49m前後を測る。溝の断面形は概ね逆台形状を呈し、溝底はほぼ平坦な状態である。出土遺物は弥生土器（甕・高坏・器台・片）が出土した。

溝

3SD01（Fig.73、Pla.52）

調査区中央部を南北方向にはしる溝で3SD02を切るように検出した。溝の北端部は現代の撹乱を受け、南端部はやや拡張気味に終息する。約12.5m分を検出し、幅0.40～0.67m、深さ0.11～0.32mを測る。溝の断面形は概ね逆台形状を呈し、黒茶色粘質土を基調とした埋土が堆積する。縄文土器（片）、弥生土器（甕・甑）、須恵器（甕・鉢）、土師器（皿）、石器（剥片）が出土し、中世の溝であることが想定される。

3SD02（Fig.73、Pla.52）

調査区中央部に位置し、大きく弧を描くように湾曲した溝である。3SD01に切られるように検出し、溝の北端部は現代の撹乱を受け、南端部はやや拡張して終息する。約11.5m分を検出し、幅0.67～0.84m、深さ0.32～0.44mを測る。溝の断面形は概ね逆台形状を呈し、黒茶色粘質土を基調とした埋土が堆積する。遺物は弥生土器（甕・鉢・高坏・片）、石器（剥片）が出土した。

3SD72（Fig.73）

調査区南部で確認した南北溝である。溝の南端部は3SB65に切られ、北端部は調査区外へ延びる。約3.2m分を検出し、幅0.58m、深さ0.33mを測る。溝の断面形は概ね逆台形状を呈し、黒茶灰色粘質土を基調とした埋土が堆積する。遺物は弥生土器（壺・器台・

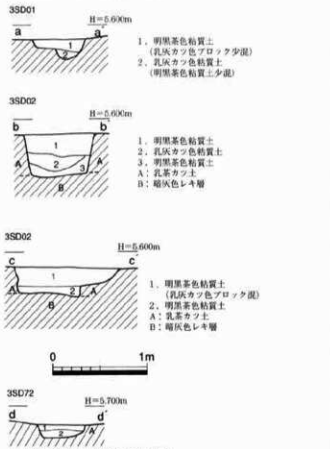


Fig.73 溝（3SD01・02・72）
土層断面実測図（1/40）

片）が出土した。

土坑

3SK03（Fig.74）

調査区中央部V3区に位置し、南部は現代の撹乱を受けるが3SK04を切るように検出した。細長の不整円形状を呈する土坑で長軸3.85m×短軸1.82m×深さ0.09mを測る。埋土は黒茶色粘質土を基調とし、弥生土器（片）、須恵器（甕）、土師器（片）、瓦質土器（擂鉢）、石器（剥片）が出土していることから中世の所産であることが考えられる。

3SK07（Fig.74）

調査区南部H2区で確認した長方形状の土坑で3SP82を切る。遺構底部は段差を生じ、長軸2.05m×短軸0.48m×深さ0.03～0.17mを測る。埋土は黒茶色粘質土を基調とし、僅かに弥生土器（片）が出土した。

3SK45（Fig.74）

調査区南部D1区に位置し、南東部は3SP40に切られる。隅丸長方形状を呈し、長軸1.75m×短軸1.02m×深さ0.38mを測る。土層断面で柱痕らしき埋土を確認しており、柱穴の可能性もある。埋土は黒茶色粘質土を基調とし、弥生土器（甕・高坏・片）、石器（砥石）が出土した。

3SK92（Fig.69）

竪穴住居（3SI10）下位で確認した土坑で周溝状遺構（3SX05・70）を切るように検出した。平面形は楕円形状を呈し、長軸1.30m×短軸1.10m、3SI10床面からの深さは0.14mを測る。埋土中からは弥生土器（甕・壺・片）が出土した。

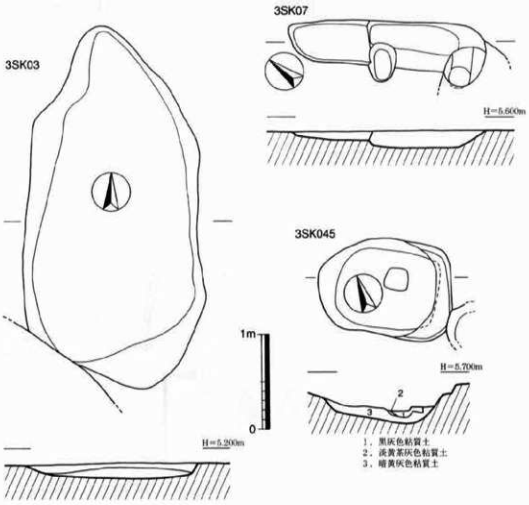


Fig.74　土坑（3SK03・07・45）実測図（1/40）

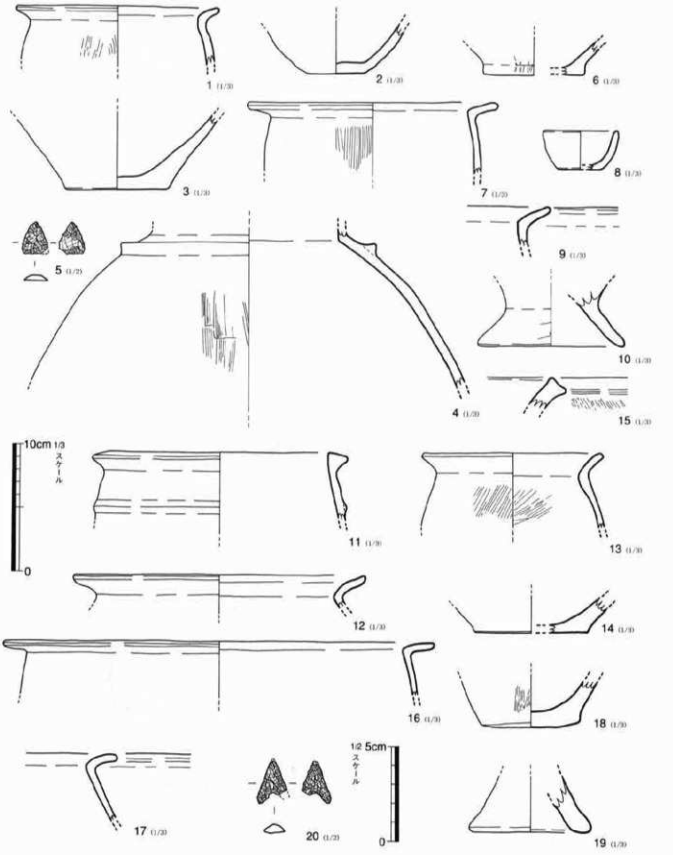


Fig.75　竪穴住居（3SI10①）出土遺物実測図（1/3・1/2）

(3) 出土遺物

竪穴住居

3SI10（Fig.75～77、Pla.53～55）

遺構検出出土

弥生土器

甕（1～3）　1は口縁部細片で口径15.8cmを復元する。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面は刷毛目、内面はナデである。2は底部細片で底径4.6cmを復元する。底部から胴部へは緩やかに内湾気味に立ち上がる。鉢の底部である可能性もある。3は底部細片で底径8.2cmを復元する。磨耗のため調整不明。

壺（4）　胴部破片で肩部には断面三角形の貼付突帯を施す。外面刷毛目、内面ナデの調整である。

石器

石鏃（5）　石材は黒曜石製で二等辺三角形を呈する。右片脚を欠損し、現存長1.7cm、幅1.2cm、厚さ0.3cm、重さ0.6ｇを計測する。裏面の中央に剥片時のネガティヴ面を大きく残し、周縁にリタッチを加えて刃部としている。

東ベルト出土

弥生土器

鉢（6）　底部細片で底径8.0cmを復元する。外面は刷毛目、内面はナデを施す。

甕（7）　口縁部は「逆L字状」を呈する。口径19.8cmを復元し、口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面は刷毛目、内面は強いヨコナデを施す。

小溝出土

弥生土器

鉢（8）　底部は平底を呈し、体部へはやや内湾気味に立ち上がる。口径5.6cm、底径3.0cm、器高3.1cmを復元し、内外面はヨコナデである。

壺（9）　「逆L字状」口縁を呈する。内外面ヨコナデ、胴部外面は刷毛目、内面はナデの調整を認める。

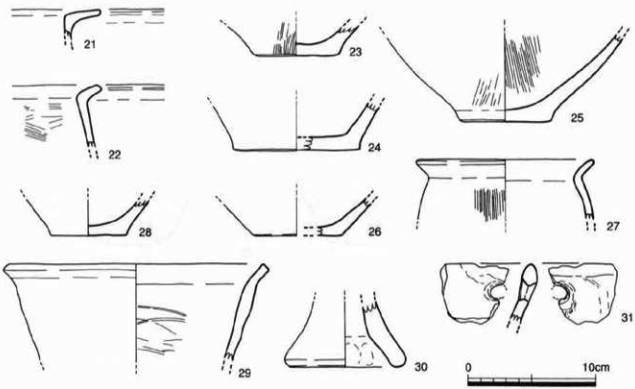


Fig.76　竪穴住居（3SI10②）出土遺物実測図（1/3）

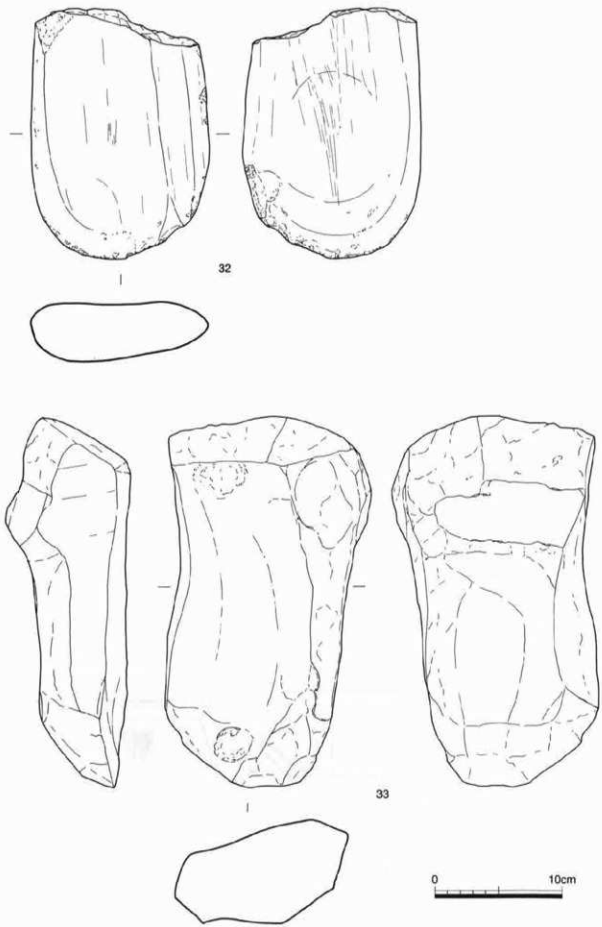


Fig.77　竪穴住居（3SI10③）出土遺物実測図（1/3）

トレンチ出土

弥生土器

甕（10）　「ハ字状」に開いた台付甕の底部細片で脚裾径は11.6cmを測る。外面は工具ナデ後ヨコナデ、内面はヨコナデである。

覆土～第1床面出土

弥生土器

甕（11～14）　11は口縁部とその下位に断面三角形の貼付突帯を施す。口径17.0cmを復元し、外面はヨコナデ、内面はナデの調整を認める。12は口縁部細片で「く字状」を呈するものと思われる。口径22.8cmを復元し、内外面はヨコナデである。13は「く字状」口縁を呈し、口径13.9cmを復元する。口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面は刷毛目を施す。14は平底を呈する細片で底径9.0cmを復元する。

壺（15）　口縁部細片であり、頸部から口縁部にかけては朝顔形を呈するものと思われる。

第1～2床面出土

弥生土器

甕（16～18）　16は「逆L字状」を呈する口縁部細片で口径33.8cmを復元する。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面は刷毛目である。17は口縁部上面に丸みを帯びるもので胎土は微砂粒・赤色粒子・金雲母を含む。表面磨耗のため調整不明。18はやや厚手で僅かに「凸レンズ状」を呈した底部細片で底径7.8cmを測る。外面は刷毛目、内面は工具ナデ、底面は刷毛目後ナデの調整を認める。

器台（19）　脚部細片で脚裾径は9.2cmを復元する。調整は内外面ナデである。

石器

石鏃（20）　石材は黒曜石製である。抉りのある二等辺三角形を呈する石鏃で先端及び右片脚を欠損する。現存長2.2cm、幅1.15cm、厚さ0.5cm、重さ0.8ｇを計測する。裏面の中央に剥片時のネガティヴ面を大きく残し、周縁に細かなリタッチを丁寧に加えて刃部作り出している。

第2床面～掘形出土

弥生土器

甕（21～24）　21は「逆L字状」口縁を呈し、上面は刷毛目後ヨコナデ、下面はヨコナデ、胴部外面は刷毛目、内面はナデの調整を認める。22は「く字状」口縁を呈する口縁部細片であり、口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面はナデ？内面は刷毛目を施す。23は底部細片で底径6.6cmを測る。外面は刷毛目、内面及び底面は工具ナデである。24は平底を呈する細片で底径10.0cmを復元する。

壺（25）　底部はやや厚手で平底を呈する。底径7.2cmを復元し、胴部内外面は刷毛目、底部内外面はナデの調整を施す。

炉跡出土

弥生土器

甕（26・27）　26は平底を呈する底部細片で底径7.0cmを復元する。内外面はナデを施す。27は「く字状」を呈する口縁部細片で口径14.0cmを復元する。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面は刷毛目、内面はナデである。

屋内土坑出土

弥生土器

鉢（28・29）　28は底部細片で平底を呈する。底径6.0cmを測り、内外面はヨコナデである。29は口縁部破片で口径20.0cmを

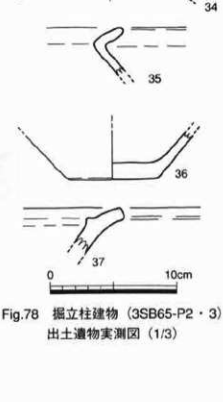


Fig.78　掘立柱建物（3SB65-P2・3）出土遺物実測図（1/3）

復元する。口縁部は緩やかに外反し、口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面はナデ、内面は工具ナデを施す。
器台（30）　脚部細片で脚裾径は8.6cmを復元する。調整はナデとヨコナデを施す。
不明（31）　口縁部細片と思われるが器種がわからず不明とした。焼成前に穿たれた径1.2cm前後の穿孔を認める。

石器

台石（32・33）　32は現存長19.7cm、幅13.9cm、厚さ4.7cm、重さ2065.0ｇを計測する。表裏面の中央部に研磨痕跡を認める。石材は不明。33は砂岩製で表裏面及び側面を砥面として使用している。現存長29.0cm、幅13.6cm、厚さ8.1cmを測る。

掘立柱建物

3SB65-P2（Fig.78、Pla.55）

弥生土器

甕（34・35）　34は「く字状」口縁を呈し、口径15.4cmを復元する。調整は磨耗のため不明。35は「く字状」口縁を呈する細片で調整はナデ及びヨコナデである。

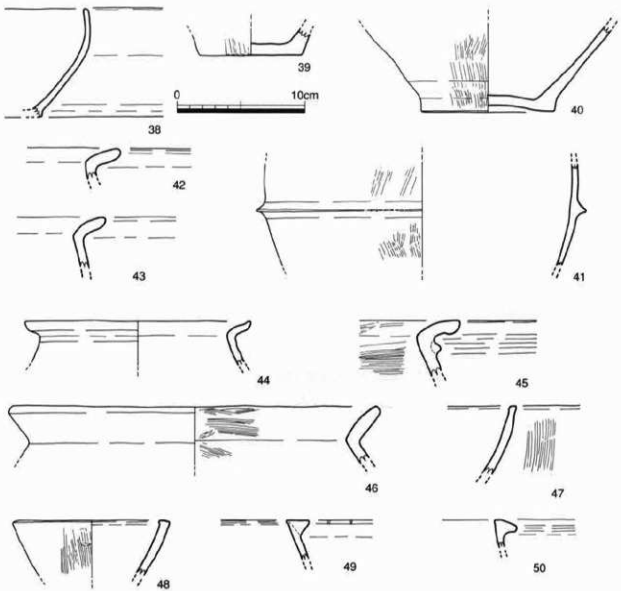


Fig.79　柱穴（3SP15・25・28・38・40・55）出土遺物実測図（1/3）

壺（36）　底部細片で底径は7.2cmを測る。底部は厚手で平底を呈する。

3SB65-P3（Fig.78、Pla.55）

弥生土器

不明（37）　口縁部細片と思われる。内面に断面三角形状の貼付突帯を施し、端部は平坦に仕上げる。

柱穴

3SP15（Fig.79、Pla.55）

弥生土器

鉢（38）　破片で底部から口縁部にかけては緩やかに内湾する。磨耗のため調整不明。

甕（39～41）　39は平底を呈する底部細片で底径8.0cmを復元する。外面は刷毛目、内面及び外底はナデである。40は底部細片で中心部にかけて湾曲する。底径10.6cmを測り、外面は刷毛目、内面及び外底はナデである。41は胴部の細片で外面に刻目貼付突帯を施す。外面は刷毛目、内面はナデの調整を認める。胴部最大径は26.0cmを復元する。

3SP25（Fig.79、Pla.56）

弥生土器

甕（42～44）　すべて丸みのある「く字状」口縁を呈する甕で調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ナデを施す。44は口径17.8cmを復元する。

3SP28（Fig.79、Pla.56）

弥生土器

甕（45）　「く字状」口縁を呈し、上面はやや丸みを帯びる。胴部との境に断面三角形の貼付突帯を施し、口縁部内面は刷毛目後ヨコナデ、口縁部外面及び突帯はヨコナデ、胴部内外面は刷毛目を施す。

3SP38（Fig.79、Pla.56）

弥生土器

甕（46）　屈曲した「く字状」口縁を呈する口縁部細片で口径28.6cmを復元する。口縁部外面はヨコナデ、内面は刷毛目を施す。

3SP40（Fig.79、Pla.56）

弥生土器

鉢（47）　口縁部細片で高坏の坏部になる可能性も考えられる。口縁端部はヨコナデ、体部外面は刷毛目、内面はナデの調整を施す。

3SP55（Fig.79、Pla.56）

弥生土器

鉢（48）　口径12.4cmを復元する。口縁部細片で端部は平坦に仕上げる。端部はヨコナデ、外面は刷毛目、内面は磨耗のため調整不明である。

甕（49・50）　共に断面三角突帯を口縁部に貼付突帯し、49は突帯に刻目を施す。

周溝状遺構

3SX05（Fig.80、Pla.56）

弥生土器

甕（51～53）　51は平底を呈する底部細片で底径5.2cmを復元する。外面は刷毛目、内面及び外底はナ

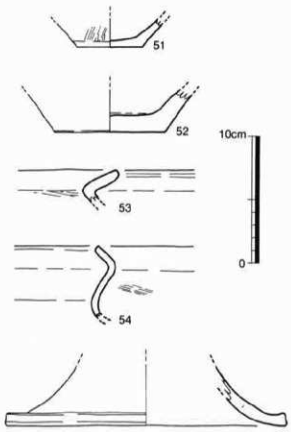


Fig.80　周溝状遺構（3SX05）
出土遺物実測図（1/3）

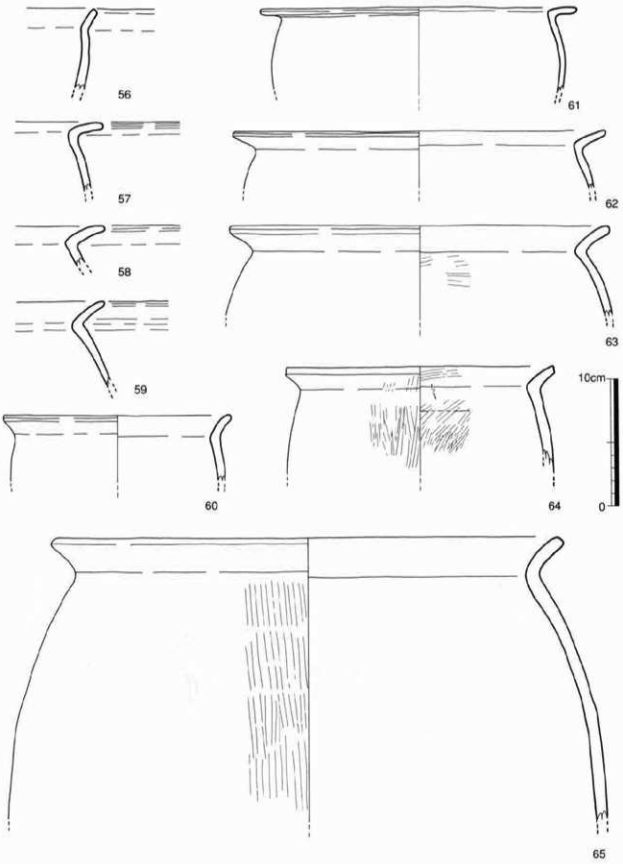


Fig.81　周溝状遺構（3SX70①）出土遺物実測図（1/3）

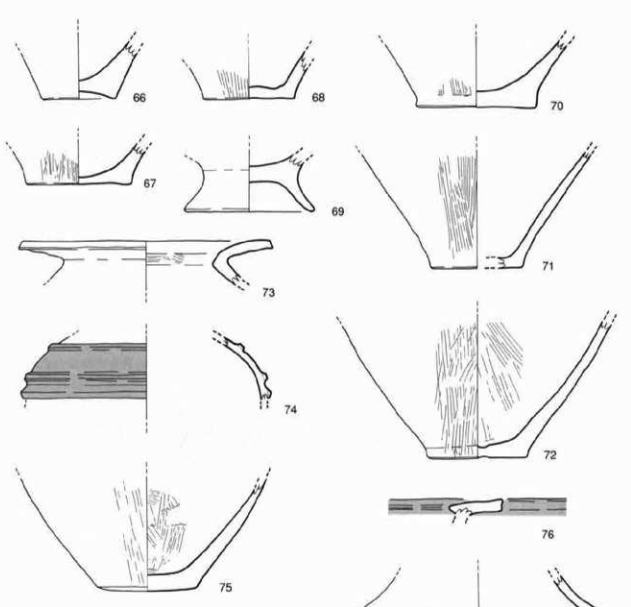


Fig.82　周溝状遺構（3SX70②）出土遺物実測図（1/3）

デを施す。52はやや厚手の平底を呈する。底径8.8cmを復元し、外面は刷毛目、内面及び外底はナデを施す。53は屈曲した「く字状」口縁を呈する細片で外面に煤が付着する。

壺（54）　袋状口縁を呈する細片で口縁部内外面及び頸部内面はヨコナデ、頸部外面は刷毛目を施す。

高坏（55）　脚部細片で脚裾径は22.0cmを復元する。脚部外面はヨコナデ、内面はナデを施す。

3SX70（Fig.81・82、Pla.56～58）

弥生土器

鉢（56）　口縁部細片で口縁部は浅く外反する。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデを施す。

甕（57～72）　57・61は「逆L字状」口縁を呈する細片である。57は口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面はナデ、内面は磨耗のため調整不明である。61は口径25.0cmを復元し、口縁部は調整不明、胴部外面下位は刷毛目、胴部外面上位及び内面はナデを施す。58～60、62～65は「く字状」を呈する口縁部細片である。58は口縁部内外面ヨコナデ、59は表面磨耗のため調整不明、60は口径17.8cmを復元し、外面は調整不明、内面は工具ナデを施す。62は口径29.4cmを復元し、内外面の調整はヨコナデ、63はやや肩の張る細片で口径は29.8cmを復元する。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面はナデ、内面は刷毛目を施す。64は口径21.0cmを復元し、調整は内外面に刷毛目を施す。外面に煤が付着する。65は大型で口径39.3cmを復元する。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面は刷毛目、内面はナデを施す。66はやや厚手の上底を呈する底部細片であり、底径は5.7cmを測る。外面はナデ、内面は磨耗のため調整不明である。67・68は共に平底を呈し、調整は外面刷毛目、内面及び外底はナデを認める。67は底径8.2cm、68は底径7.2cmを復元する。69は台付壺の底部細片で脚裾径は10.0cmを測る。調整は磨耗により不明。70はやや厚手の平底を呈し、底径9.5cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデ、外底は未調整である。71は平底を呈し、底径7.3cmを復元する。外面に煤が付着し、胴部外面は刷毛目、内面及び外底はナデの調整を認める。底部から胴部へはやや外反気味に立ち上がる。72は平底を呈し、底径は7.8cmを測る。底部から胴部へはやや外反気味に立ち上がり、胴部はやや丸みを持つ。調整は内外面とも刷毛目を施す。

壺（73～75）　73は頸部から口縁部にかけて鋭く外反する口縁部を呈した細片で口径19.4cmを復元する。内面の屈曲した箇所は刷毛目、これ以外はヨコナデの調整を認める。74は肩部の破片で断面台形状の貼

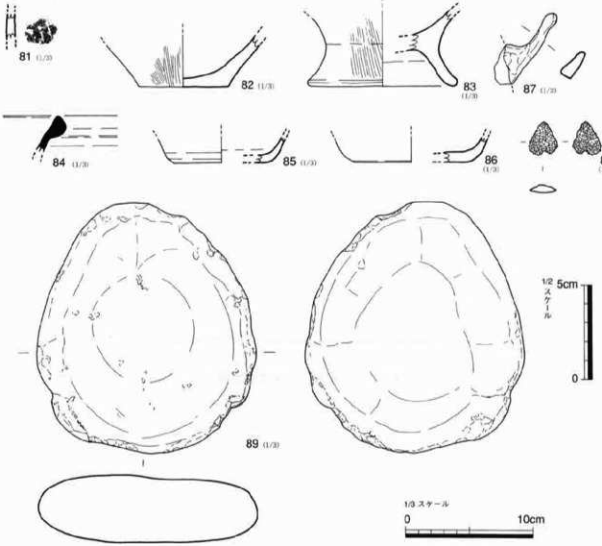


Fig.83　溝（3SD01）出土遺物実測図（1/3・1/2）

付突帯を3条廻らす。外面には顔料の丹塗りを施し、胴部最大径は18.9cmを復元する。75は底部破片で底径7.8cmを測る。底部はやや厚手で「凸レンズ状」を呈し、内外面に刷毛目を施す。外底はナデ。

高坏（76・77）　76は口縁部細片で鋤先形口縁を呈するものと思われる。表面には顔料の丹塗りを施す。77は脚端部の細片で脚裾径は19.6cmを復元する。

器台（78～80）　78は口縁部細片で口径8.6cmを復元する。口縁端部及び内面はヨコナデ、外面はナデの調整を施す。79・80は脚部の細片で79は脚裾径13.8cm、80は10.8cmを復元する。

溝

3SD01（Fig.83、Pla.58・59）

縄文土器

鉢（81）　細片で外面に刺突文・沈線文を認める。胎土は微砂粒・角閃石・金雲母を含む。曽畑式土器か？

弥生土器

甕（82・83）　82は平底を呈する底部細片で底径7.0cmを復元する。外面は刷毛目、内面及び外底はナデの調整を認める。83は「ハ字状」に開く台付甕底部細片であり、脚裾径は11.3cmを復元する。脚部外面は刷毛目、脚部内面は工具ナデ、脚裾部はヨコナデを施す。

須恵器

鉢（84）　玉縁状口縁を呈する細片で口縁端部外面に重ね焼き痕跡を認める。

土師器

皿（85・86）　共に底部細片で底部から体部へかけては丸みを持つ。外底は糸切りで85は底径7.4cm、86は底径8.8cmを復元する。

甑（87）　甑把手の細片でナデにより粗く調整を施す。胎土は微砂粒・角閃石・金雲母を含む。

石器

石鏃（88）　石材は黒曜石製で抉りのある「逆ハート」形状を呈する。完形と思われ、長さ1.8cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重さ0.8ｇを計測する。表裏面及び側縁に細かくリタッチを加えて作り出している。

台石（89）　円礫を利用したもので表裏面中央部に研磨痕跡を認める。石材は安山岩製と思われ、長さ20.3cm、幅17.2cm、厚さ5.3cmを測る。

3SD02（Fig.84・85、Pla.59・60）

縄文土器

鉢（90）　口縁部細片で内外面及び端部に刺突文を認める。胎土は微砂粒・赤色粒子・金雲母を含む。

弥生土器

鉢（91～93）　91は小鉢破片で口径9.8cm、底径5.0cm、器高5.4cmを復元する。内外面はナデの調整を施す。92は内湾した口縁部を呈し、口径18.0cmを復元する。口縁端部はヨコナデ、外面は刷毛目、内面はナデを施す。93は平底を呈し、口縁部から底部にかけて内湾する破片で口径20.4cm、底径9.0cm、器高8.6cmを復元する。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面および底部外面は刷毛目、底部内面はナデの調整を認める。外面に煤が付着する。

甕（94～100）　94は口縁部細片で口径23.9cmを復元する。口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面は刷毛目を認める。95は「く字状」口縁を呈し、胴部はやや丸みを有する。口径23.0cmを復元し、口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面はナデを施す。96は口縁部細片で「く字状」を呈する。口縁部外面は強いヨコナデ、口縁部内面及び胴部内外面はナデを施す。97～99は平底を呈する底部細片で97は底径6.8cm、98は底径8.0cm、99は底径9.4cmを復元する。99の外面には煤が付着する。100は大型甕の底部破片で平底を呈し、底径12.2cmを復元する。薄手で胴部内外面は刷毛目、底部内外面はヨコナデ及びナデの調整を施す。

壺（101）　頸部から口縁部にかけては朝顔形に開き口縁部上面はやや平坦気味に仕上げる。口径20.0cm、胴部最大径25.6cmを復元する。胴部外面には断面三角形の貼付突帯を施す。調整は磨耗のため不明である。

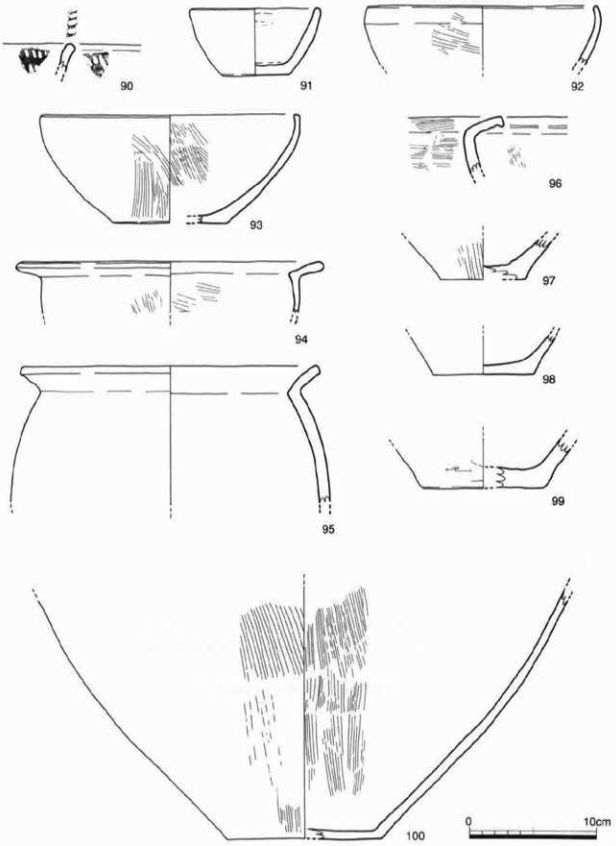


Fig.84　溝（3SD02①）出土遺物実測図（1/3）

石器

砥石（102・103）　102は現存長19.6cm、幅11.8cm、厚さ4.4cm、重さ1540.0ｇを計測する。石材は片岩製で表裏面に研磨痕跡を僅かに認める。103は現存長14.0cm、幅5.5cm、厚さ6.0cm、重さ405.0ｇを計測する。石材は不明で表面及び端部に研磨痕跡を認める。

3SD02第1層出土

弥生土器

高坏（104）　脚筒部の破片で坏部内外面及び脚筒部内面はナデ、脚筒部外面は刷毛目を施す。

3SD02第2層出土

弥生土器

不明（105）　口縁部細片と思われ、端部は僅かに外反する。調整は磨耗のため不明である。

甕（106）　口縁部細片で鋭く外反する。口径13.2cmを復元し、口縁部に径0.4cm程度の穿孔を焼成前に

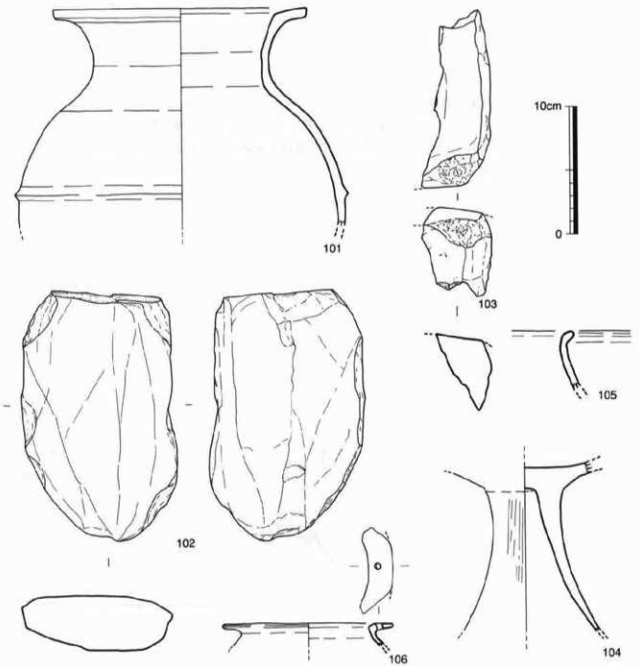


Fig.85　溝（3SD02②）出土遺物実測図（1/3）

穿つ。

3SD72（Fig.86、Pla.50）

弥生土器

甕（107）　「く字状」口縁を呈する甕で口径25.8cmを復元する。胴部は丸みを有し、最大径は上位にある。口縁部はヨコナデ、胴部外面は刷毛目、内面はナデの調整を認める。

壺（108）　厚手の平底を呈した底部破片で底径9.8cmを測る。胴部外面は刷毛目後ナデ、底部外面は刷毛目、内面及び外底はナデの調整である。

器台（109）　口径13.4cmを復元する。表面磨耗のため調整は不明である。

土坑

3SK03（Fig.87、Pla.60・61）

須恵器

甕（110）　胎土は黒色粒子及び赤色粒子を多く含み、焼成はやや不良である。内外面に平行叩きを認める。

瓦質土器

擂鉢（111）　口径30.0cmを復元する。内面に6本単位のすり目を施し、口縁端部は凹状を呈する。外面には煤が付着する。

石器

敲石（112・113）　112は縦長の楕円礫を利用した敲石で石材は砂岩製である。周縁の一部に敲打痕を認め、長さ14.1cm、幅6.5cm、厚さ4.3cm、重さ590.0ｇを計測する。113は円礫を利用したもので石材は安山岩製と思われる。表裏面の中央部及び周縁の一部に敲打痕を認める。長さ13.5cm、幅10.5cm、厚さ3.8cm、重さ820.0ｇを計測する。

3SK07（Fig.87、Pla.61）

弥生土器

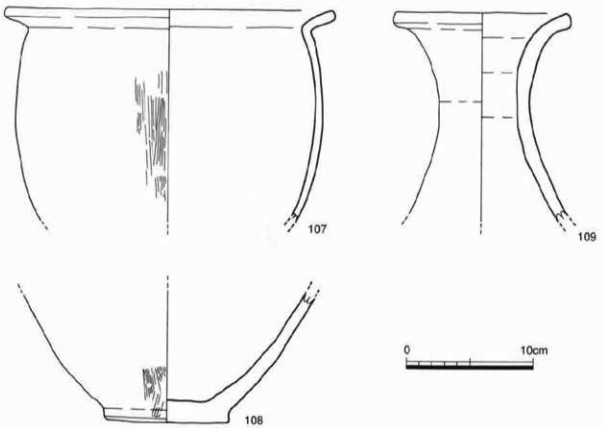


Fig.86　溝（3SD72）出土遺物実測図（1/3）

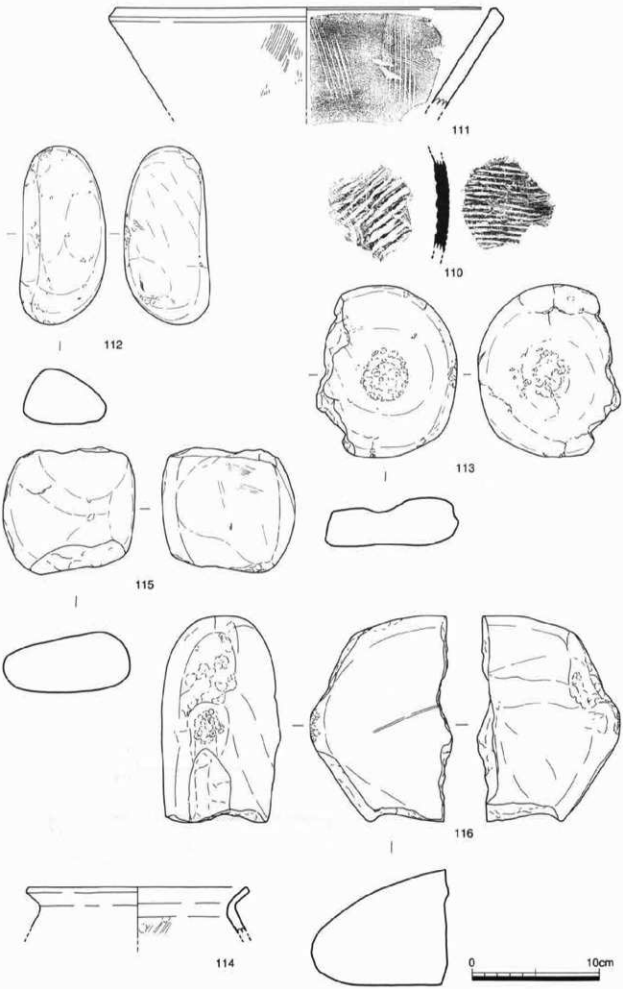


Fig.87　土坑（3SK03・07）出土遺物実測図（1/3）

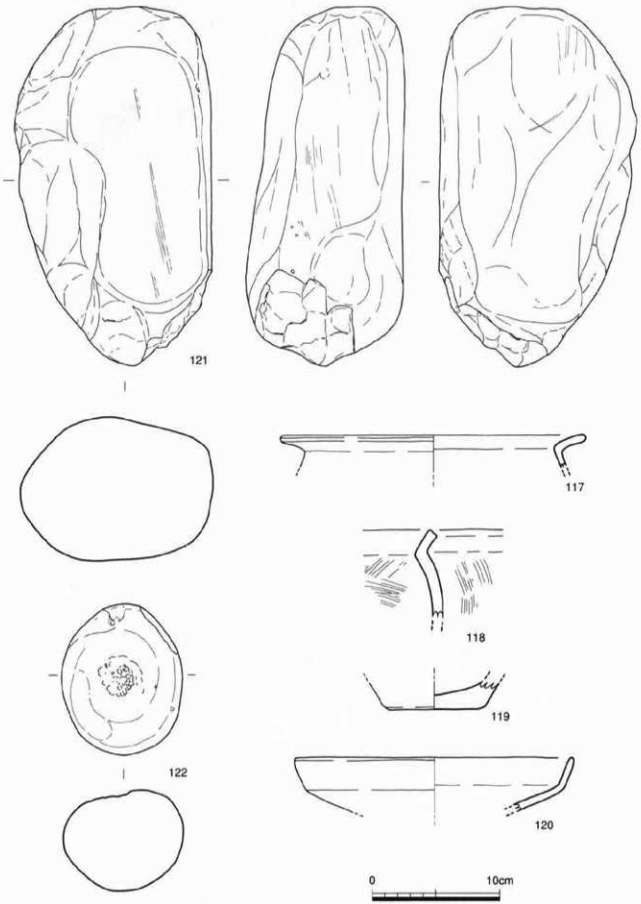


Fig.88　土坑（3SK45）出土遺物実測図（1/3）

甕（114）　口縁部は「く字状」を呈し、口径17.2cmを復元する。口縁部内外面はヨコナデ、胴部内面は刷毛目を施す。

石器

砥石（115・116）　115は砂岩製で長さ10.0cm、幅10.0cm、厚さ4.7cm、重さ625.0 gを計測する。表裏面を砥面として使用している。116は長さ16.2cm、幅10.9cm、厚さ9.1cm、重さ2075.0 gを計測する。石材は安山岩製で表裏面は砥面として使用しており、また周縁の一部に敲打痕を認めることから敲石としても利用している。

3SK45（Fig.88、Pla.61）

弥生土器

甕（117・118）　117は口縁部は「く字状」を呈し、口径23.7cmを復元する。磨耗のため調整は不明である。118は「く字状」口縁を呈する細片で口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面は刷毛目を施す。

壺（119）　厚手の平底を呈する底部細片で底径は6.9cmを復元する。

高坏（120）　体部と口縁部の境で屈曲した坏部の細片で口径21.8cmを復元する。磨耗のため調整は不明である。

石器

砥石（121）　石材は安山岩製と思われる。表裏面及び右側面を砥面として使用しており、長さ28.4cm、幅15.1cm、厚さ11.2cmを測る。

敲石（122）　石材は安山岩製で円礫を利用した敲石である。表面の中央部に敲打痕を認め、長さ12.0cm、幅9.5cm、厚さ8.0cm、重さ1210.0 gを計測する。

3SK92（Fig.89、Pla.62）

弥生土器

甕（123・124）　123は「く字状」口縁を呈する細片で口径は26.6cmを復元する。表面磨耗のため調整不明である。124は平底を呈する底部細片で底径は6.2cmを復元する。外面刷毛目、内面及び外底はナデの調整を施す。

壺（125・126）　125は小型壺で口径7.2cm、底径3.8cm、器高7.8cmを復元する。口縁部は鋭く外反し、

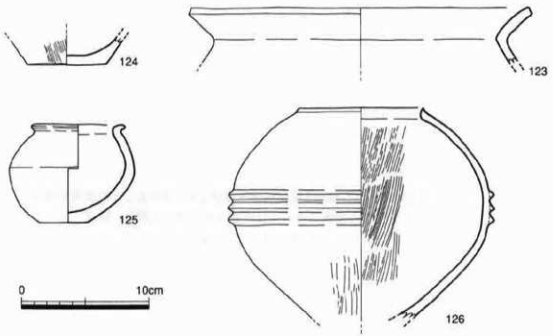


Fig.89　土坑（3SK92）出土遺物実測図（1/3）

胴部は球形、底部は平底を呈する。126は無頸壺で胴部はほぼ球形を呈する。口径9.8cm、胴部最大径は20.1cmを復元する。胴部外面に断面三角形の貼付突帯3条を施す。口縁部内外面から胴部外面はヨコナデ、胴部下位は刷毛目後ナデ、内面は刷毛目の調整を認める。

ピット

3SP41（Fig.90、Pla.62）

弥生土器

鉢（127）　小鉢で口径9.0cm、底径4.8cm、器高6.5cmを復元する。口縁部はヨコナデ、体部から底部の内外面はナデである。

3SP44（Fig.90、Pla.62）

石器

石鏃（128）　石材はサヌカイト製で正三角形を呈する。表裏面及び側片に細かくリタッチを加えて加工している。長さ1.4cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重さ0.6ｇを計測する。

3SP49（Fig.90、Pla.62）

弥生土器

壺（129・130）　129は小型壺底部細片で底径3.4cmを復元する。外面刷毛目、内面及び外底はナデの調整を施す。130は口縁部細片で口径25.6cmを復元する。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部はヨコナデ、口縁部内外面は刷毛目を施す。

石器

石鏃（131）　石材は粘板岩製と思われ、表裏面は研磨加工されている。現存長は3.8cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ2.0ｇを計測する。

3SP64（Fig.90、Pla.62）

弥生土器

甕（132）　「く字状」口縁を呈する細片で口縁部内外面はヨコナデ、胴部内面は刷毛目、外面は不明である。

3SP76（Fig.90、Pla.62）

弥生土器

鉢（133・134）　133は平底を呈し、底径7.6cmを復元する。外面の調整は不明で内面はナデを認める。134は口径15.7cmを復元し、平坦な口縁部を呈する。表面に顔料の丹塗りが施されている。

甕（135）　「く字状」口縁を呈する細片で口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面はナデの調整を認める。

壺（136）　緩やかに外反する口縁部細片で内外面はヨコナデを施す。

石器

敲石（137）　円礫を利用したもので石材は安山岩製と思われる。表裏面の中央部及び周縁の一部に敲打痕を認める。長さ10.4cm、幅8.2cm、厚さ2.7cm、重さ360.0ｇを計測する。

(4) 小結

当調査区では竪穴住居3軒、掘立柱建物2棟、周溝状遺構2基、溝3条などの遺構を確認し、主に弥生時代と中世の遺物を得た。弥生時代の遺構については当調査区が第1次調査に隣接していることから同集落の一部と捉えることができ、また中世の遺構（3SD01、3SK03）については1・2次を通して新たな所見となった。

竪穴住居（3SI10）は、1次で検出した住居と同様に竪穴内部に炉跡・屋内土坑を呈し、主柱穴を確認することのないものであった。これに加え、当住居ではベッド状遺構及び周壁を巡る小溝を確認し、溝内からは杭痕跡を検出している。当該期の住居としては中クラスの大きさと思われ、1次調査で検出した1SI260と同等の規模となる。弥生時代中期前半～後期後半までの出土遺物を認めており、遺構の切り合

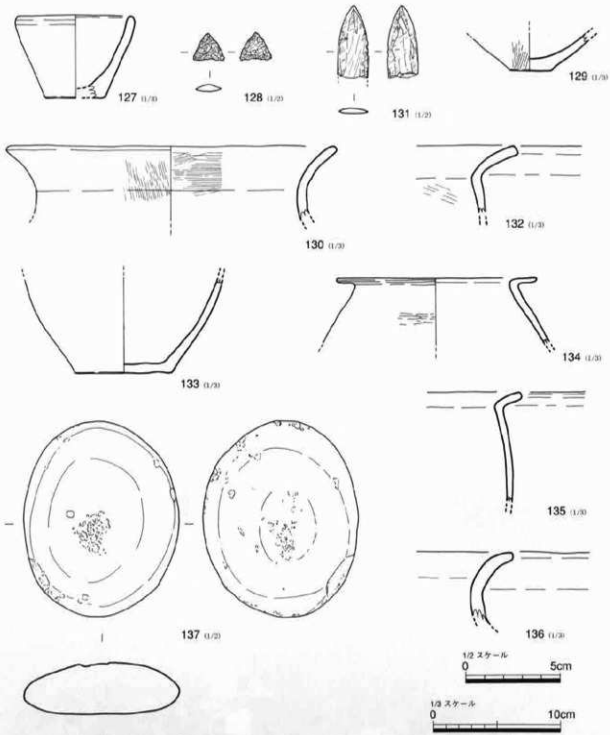


Fig.90　ピット（3SP41・44・49・64・76）出土遺物実測図（1/3・1/2）

い等から下限は後期後半と比定する。調査区南端で検出した3SI30は、残存状態が悪いながらも床上からは大量の炭化物が検出された。炭化物は建物材と思われ、火災にあった住居の可能性が考えられる。

掘立柱建物（3SB65）は、2間×1間以上の規模を呈する建物あり、1次調査で検出した1SB900に匹敵する程の柱穴を有する。調査区に阻まれ、残念ながら全体プランを確認することができなかったが、1SB900と同等以上の建物になることが想定される。柱穴からは弥生時代後期後半頃の遺物を出土している。

周溝状遺構は円形状、隅丸方形状を呈する2タイプを各1基ずつ検出した。共に竪穴住居（3SI10）の下

位で検出しており、切り合い関係（古→新）については3SX05→3SX70→3SI10となる。3SX05・70からは弥生時代後期を主体とする出土遺物を認めており、3SI10の下限を後期後半とすることから前半～中葉にかけての時期が比定される。

一見、周溝状遺構と考えられるかのように湾曲した3SD02からは中期後半～後期前半にかけての弥生土器が出土した。このSD02を切るように検出した3SD01は中世の南北溝であり、その規模から用排水路若しくは区画溝として機能していた可能性が考えられる。

古島榎崎遺跡（第３次調査）作業風景

Tab.12　古島榎崎遺跡（第3次調査）遺構台帳

S番号	地区	遺構番号	種別	主な出土遺物	備考
1	P2	38D01	溝	縄文土器（片）、弥生土器（甕・鉢）、須恵器（甕・東播系鉢）、土師器（皿）、石器（石鏃・サ-剥片）	
2	S3	38D02	溝	弥生土器（甕・鉢・高坏・片）、石器（黒・サ-剥片）	
3	V3	38K03	土坑	弥生土器（片）、須恵器（甕）、土師器（片）、陶器（擂鉢）、石器（サ-剥片）	
4	U3	38K04	土坑		
5	U3	38X05	周溝状遺構	弥生土器（甕・壺・高坏）、石器（サ-剥片）	
6	—	—	—	弥生土器（甕・片）	
7	H2	38K07	土坑	弥生土器（甕・片）	
8	I2	38P08	柱穴	弥生土器（片）	38B75（P3）
9	I3	38K09	土坑	弥生土器（片）	
10	F2	38I10	竪穴住居	弥生土器（甕・壺・器台・片）、須恵器（片）、石器（石鏃-剥片・黒-剥片）	
11	I1	38P11	柱穴	弥生土器（片）	38B75（P4）
12	J2	38P12	柱穴	弥生土器（片）	38B75（P1）
13	I4	38P13	ピット	弥生土器（片）	
14	J4	38K14	土坑	弥生土器（片）、石器（黒-剥片）	
15	D4	38P15	ピット	弥生土器（甕・高坏・片）	柱痕確認
16	K3	38P16	ピット	弥生土器（片）	
17	L2	38P17	ピット	弥生土器（片）	柱痕確認
18	L3	38P18	ピット	弥生土器（片）、石器（黒-剥片）	
19	M3	38P19	ピット	弥生土器（片）	柱痕確認
20	J1	38I20	竪穴住居	弥生土器（片）	
21	M1	38P21	ピット	弥生土器（片）	柱痕確認
22	N2	38P22	ピット	弥生土器（片）	
23	N1	38P23	ピット	弥生土器（片）	
24	M2	38P24	ピット	弥生土器（片）、石器（サ-剥片）	
25	K1	38P25	ピット	弥生土器（甕・片）	柱痕確認
26	M3	38P26	ピット	弥生土器（高坏・片）、石器（黒-剥片）	柱痕確認
27	M3	38P27	ピット	弥生土器（甕・片）	柱痕確認
28	N3	38P28	ピット	弥生土器（甕・片）	柱痕確認
29	N3	38P29	ピット	弥生土器（片）	
30	B4	38I30	竪穴住居	弥生土器（片）、石器（黒-剥片）	
31	N3	38P31	ピット	弥生土器（片）	
32	O4	38P32	ピット	弥生土器（片）	
33	O4	38K33	土坑	弥生土器（片）	
34	O4	38P34	ピット	弥生土器（片）	
35	C2	38P35	柱穴	弥生土器（甕・片）	38B65（P2）
36	N2	38P36	ピット	縄文土器（片）、弥生土器（片）	柱痕確認
37	O1	38P37	ピット	縄文土器（片）、弥生土器（片）	
38	O1	38P38	ピット	弥生土器（甕・片）	柱痕確認
39	P1	38P39	ピット	弥生土器（片）	
40	C2	38P40	ピット	弥生土器（鉢・高坏・片）	柱痕確認
41	P3	38P41	ピット	弥生土器（小鉢・片）	
42	P3	38P42	ピット	弥生土器（片）	
43	B4	38P43	ピット	弥生土器（片）	
44	Q2	38P44	ピット	弥生土器（片）、石器（石鏃）	
45	D1	38K45	土坑	弥生土器（甕・高坏・片）、石器（砥石）	
46	Q2	38P46	ピット	弥生土器（片）	
47	R3	38P47	ピット	弥生土器（片）	
48	S3	38P48	ピット	弥生土器（片）	
49	T4	38K49	土坑	弥生土器（甕・片）、石器（石斧）	
50	D4	38P50	ピット	弥生土器（片）	
51	T3	38P51	ピット	弥生土器（片）	
52	L2	38P52	ピット	弥生土器（片）	
53	I3	38P53	ピット	弥生土器（片）	柱痕確認
54	G4	38P54	ピット	弥生土器（片）	
55	G1	38P55	ピット	弥生土器（甕・高坏・片）	柱痕確認
56	F1	38P56	ピット	弥生土器（片）	
57	H3	38K57	土坑	弥生土器（片）、石（黒・サ-剥片）	
58	I3	38K58	土坑	弥生土器（片）	
59	I2	38K59	土坑	弥生土器（甕・壺・片）	
60	D2	38P60	柱穴	弥生土器（高坏・片）	38B65（P3）
61	J3	38K61	土坑	弥生土器（片）	
62	J3	38P62	柱穴	弥生土器（片）	38B75（P2）
63	J2	38P63	ピット	弥生土器（片）	
64	B3	38K64	土坑	弥生土器（甕・片）	
65	B5	38B65	掘立柱建物		8·35·60·68·74
66	B2	38P66	ピット	弥生土器（片）	
67	B2	38P67	ピット	弥生土器（片）	
68	C4	38P68	柱穴	弥生土器（器台・片）	38B65（P1）
69	C4	38P69	ピット	弥生土器（片）	
70	F2	38X70	周溝状遺構	弥生土器（甕・高坏・器台・片）	
71	B3	38P71	ピット	弥生土器（片）	
72	C4	38P72	ピット	弥生土器（壺・器台・片）	
73	D4	38P73	ピット	弥生土器（片）	
74	E4	38K74	柱穴	弥生土器（片）	38B65（P4）
75	I3	38B75	掘立柱建物		8·66·11·12·62
76	D2	38K76	土坑	弥生土器（甕・片）、石器（敲石）	
77	D2	38P77	ピット	弥生土器（片）	
78	D2	38P78	ピット	弥生土器（片）	
79	H2	38K79	土坑	弥生土器（片）	
80	—	—	—		
81	H2	38K81	土坑	弥生土器（片）	
82	H2	38P82	ピット	弥生土器（片）	
83	L2	38P83	ピット	弥生土器（片）	
84	M3	38P84	ピット	弥生土器（片）	
85	—	—	—		
86	AC4	38P86	ピット	弥生土器（片）、須恵器（片）	
87	AC3	38K87	土坑	弥生土器（片）、石器（サ-剥片）	
88	AA3	38K88	土坑	弥生土器（片）	
89	AB3	38K89	土坑	弥生土器（片）	
90	—	—	—		
91	G2	38P91	ピット	弥生土器（片）	
92	F2	38K92	屋内土坑	弥生土器（甕・壺・片）	38I10（屋内土坑）
93	K2	38K93	屋内土坑	弥生土器（片）	38I10（屋内土坑）
94	F2	38K94	炉	弥生土器（片）	38I10（炉）
95	E2	38K95	屋内土坑	石器（不明）	38I10（屋内土坑）

【註】黒→黒曜石・サ→サヌカイト

Ⅳ．まとめ

古島榎崎遺跡（第1～3次調査）は縄文時代～弥生時代・中世の遺跡である。ここでは各時代における遺構と遺物について概観し、まとめとする。

1.縄文時代

縄文時代の明確な遺構は確認されていないが、遺構からは多くの縄文土器を得ることができた。土器は外面・内面・口縁端部等に刺突文・沈線文を施し、胎土に角閃石・滑石等を含むものであった。土器の特徴から曽畑式土器と思われ、縄文時代前期に比定される。

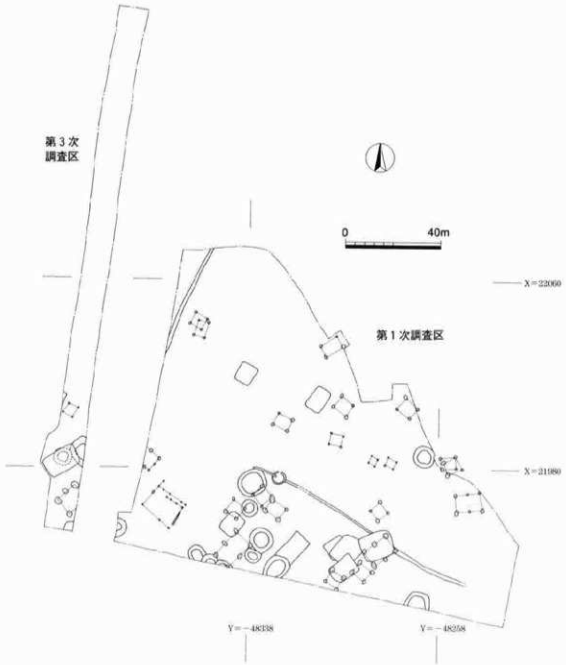


Fig.91　主要遺構配置図（1/800）

2.弥生時代

今回、検出した遺構は集落遺跡の主要遺構となる竪穴住居・掘立柱建物・溝であり、この遺構に加えて祭祀的要素を含むと考えられている周溝状遺構も検出された。以下、主要遺構配置図をFig.91、遺構における相互関係（切り合い）をFig.92、主要遺構一覧をTab.13～15に表す。

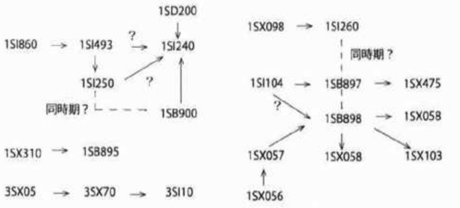


Fig.92　主要遺構切り合い状況模式図（古→新）

Tab.13　竪穴住居一覧表

○→遺構有、×→遺構無

遺構番号	Fig	主軸	平面プラン	長軸（m）	短軸（m）	面積（㎡）	主柱穴	炉	ベッド	小溝	屋内土坑	想定される時期	備考
1SI104	5	N-29°32′19″-E	隅丸長方形	5.10	4.08	20.81	×	○	×	×	○	弥生時代後期	炭化米出土
1SI240	5	N-20°54′50″-W	隅丸長方形	6.88	5.55	38.18	×	○	×	×	○	〃　後期後半～終末	
1SI250	6	N-30°26′47″-W	隅丸長方形	5.84	4.03	23.54	×	○	×	×	○	〃　後期	
1SI200	6	N-34°21′46″-W	長方形	6.87	4.00	27.48	×	×	×	×	×	〃　後期以降	
1SI480	7	N-28°0′33″-E	隅丸長方形	5.30	3.56	18.87	×	×	×	×	○	〃　後期前半	
1SI493	7	N-36°13′07″-E	隅丸長方形	6.60	5.50	36.30	×	○	×	×	○	〃　後期前半	
1SI765	8	N-25°43′50″-E	隅丸長方形	4.32	3.71	16.03	×	○	×	×	○	〃　後期	
1SI860	8	N-30°10′24″-W	正方形	4.43	4.23	18.74	×	×	×	×	×	〃　中期後半～後期前半	
3SI10	69	N-62°51′01″-E	隅丸長方形	7.30	4.70	34.31	×	○	○	○	○	〃　後期後半	
3SI20	70	—	—	—	—	—	×	×	○	×	×	〃　後期？	
3SI30	70	—	—	—	—	—	×	×	×	×	×	〃　後期？	炭化材出土

Tab.14　掘立柱建物一覧表

梁行・桁行は平均長、（　）は現存長

遺構番号	Fig	主軸	梁×桁	梁行（m）	桁行（m）	備考
1SB881	9	N-5°42′38″-W	1×2	2.30	5.30	
1SB882	9	N-3°10′47″-W	1×1	2.37	3.20	
1SB883	9	N-38°57′21″-E	1×1	2.83	3.10	
1SB884	10	N-29°44′41″-E	1×1	1.88	1.93	
1SB885	10	N-23°29′54″-E	1×1	1.50	1.63	
1SB886	10	N-14°49′35″-E	1×1	2.38	2.73	
1SB887	10	N-35°54′35″-E	1×1	2.85	3.35	
1SB888	10	N-36°57′49″-W	1×1	2.70	3.78	
1SB889	11	N-24°20′27″-E	1×1	2.40	2.95	
1SB890	11	N-32°0′19″-E	1×1	2.50	2.93	
1SB891	11	N-18°59′47″-E	1×1	2.28	3.18	
1SB892	12	N-40°10′45″-E	1×2以上	(1.72)	(3.45)	
1SB893	12	N-39°48′20″-W	1×1	2.60	2.73	
1SB894	12	N-45°54′33″-W	1×1	2.43	3.25	
1SB895	12	N-42°08′15″-E	1×1	2.80	3.33	
1SB896	12	N-31°40′31″-E	1×1	2.60	3.40	
1SB897	13	N-37°37′34″-E	1×1	2.65	2.85	
1SB898	13	N-42°58′08″-E	1×2	3.75	6.15	
1SB899	13	N-32°09′08″-E	1×1	2.80	2.85	
1SB900	14	N-35°09′15″-W	1×1	3.68	5.60	
1SB901	14	N-26°33′54″-W	1×1	2.50	3.03	
3SB65	71	N-33°28′34″-E	1×2以上	(3.60)	(5.35)	
3SB75	71	N-25°51′58″-E	1×1	2.15	2.25	

Tab.15　周溝状遺構一覧表

遺構番号	Fig	平面プラン	軸径（m）	円形（m）	想定される時期	備　考
1SI801	16	円　形	4.06	1.22	弥生時代中期後半～後期前半	
1SI956	16	方　形？	3.58	2.37		
1SI957	16	楕円形	4.07	1.85		
1SI958	16	楕円形	—	—	〃　中期後半	
1SI988	16	楕円形	2.65～3.35	1.30～2.20	〃　後期前半以降	
1SI998	17	楕円形	4.75	3.00	〃　中期後半	
1SX103	18	円　形	4.95	3.35	〃　後期	
1SX120	17	楕円形	5.40	3.95	〃　中期後半～後期前半	
1SX220	18	円　形	4.75	2.95	〃　後期	
1SX310	18	円　形？	4.15	3.35	〃　後期	
1SX315	19	円　形	2.90	2.23		
1SX475	19	円　形	3.65	2.33	〃　後期前半以降	
3SX05	69	方　形	4.40	2.35	〃　後期前半以降	
3SX70	69	円　形	3.95	1.95	〃　後期前半以降	

この状況を横目に、かなり大胆ではあるが竪穴住居と掘立柱建物について遺構の規模や配置状況、方位等を勘案すると幾つかの相互性を見出すことができる。

1）約20㎡未満の住居（上から面積順）
- 1SI860＝1SB894（弥生時代中期後半～後期前半）
- 1SI480＝1SB887（弥生時代後期前半）
- 1SI765＝1SB890（弥生時代後期）

2）約20～30㎡未満の住居
- 1SI104＝1SB896（弥生時代後期）
- 1SI250＝1SB900（　〃　）
- 1SI260＝1SB898（　〃　）

3）約30～40㎡未満の住居
- 3SI10＝3SB65（弥生時代後期）
- 1SI493＝1SB899（弥生時代後期前半）

4）測定不能
- 3SI20＝3SB75（弥生時代後期）

（　）内に示した時期は、出土土器による土器相を記したものであり、住居の使用・廃絶を示す根拠はない。しかし、時期が下るに従って住居の面積比は増加する傾向にあることを読み取ることができ、それは時代背景や家族構成、集落規模等の要因がもたらし変化したものと想定される。

さて、遺構の切り合いと出土土器相における新旧関係にはやや矛盾が生じていることもあり、こういった事象を有する資料には時期に下限を考慮する必要がある。このため、現状では遺構の埋没時期を考察する程度が眼界と思われる。主要遺構の変遷についてはFig.92へ示すように概ね1～3回程度の切り合い関係にあることがわかる。これに出土土器相等の情報を勘案すると遺構の存続から廃絶までのおおまかな時期想定が可能である。先述した内容から一概に断言できないが、ここでは遺構の切り合いや出土土器相の内容を踏まえ概観する。

まず、古相段階では1SI860が出現するが、住居には貧弱さが目立つ。出土遺物の弥生土器（甕）では中期の「逆L字状」口縁から脱却し、「く字状」口縁へと移行する段階であり、時期としては後期前半あたりと比定される。中期の土器を僅かに含むが、複雑に切り合う住居であったことから土器が流れ込んだ可能性がある。周辺に点在する住居のうち、1SI860と同規模の住居である1SI765・104は、同時期に想定されよう。中相段階に比定される住居には1SI250・260・480・493、3SI10があり、これらは住居の平面プランが縦長プランを呈することに共通点を見出す。1次調査の住居からは時期を決定すべく土器に恵

まれていないことから切り合いを重視した時期想定となり、主体的には後期前半～中頃に位置付けられる。同規模の3SI10は周溝状遺構（3SX05・70）を切るように検出した住居であり、中期前半～後期後半の幅広い出土土器を認めている。主体的には後期前～中葉であり、下限は後期後半に比定されよう。1SD240は遺構の切り合いから新相段階に位置付けられるもので、主として後期後半の出土土器を得たが、決定的な時期想定は土器相からは困難である。土器相では時間差が感じられないが、遺構はFig.92に示すように複雑に重複し合っており、短期間で建て直しが行われたことが窺える。

以前、竪穴住居と周溝状遺構における配置状況から片岡氏（註-1～3）によって比較検討されたことがあったが、当遺跡ではその傾向を示す好資料に恵まれなかったため今回は割愛した。当該期における資料は狐塚遺跡発掘調査以降、調査成果が収集されつつあるなかで当遺跡の資料を新たに加えることができたことは成果であった。

3.中世

この期における遺構は3次で確認した溝（3SD01）と土坑（3SK03）である。何れも中世域における時期を断定できていないが、溝についてはその規模から用排水路若しくは区画溝として機能していた可能性が考えられる。

4.1SI104出土の炭化米

当住居の屋内土坑からは大量の炭化米が出土した。筆者は、報告書作成段階において何らかの分析データが必要であると考えていたところ、近年、報道等によって盛んに議論されている「炭素14年代測定」による分析が炭化米でも行えることを知った。丁度、タイミングよく国立歴史民俗博物館に依頼することができ、【炭素14年代（^{14}C BP）：2020±30】【較正年代（cal BC）：105BC－AD60 95.4％】の分析結果（註4：後章参照）が示された。大量の炭化米に混在した土器は弥生土器（甕）細片1点であり、細片からの時期想定は不可能であった。このため、竪穴住居出土の土器相による時期を想定したところ弥生時代後期前半あたりと比定し、分析結果とは大きな隔たりがあることとなった。この結果について論考を加える力量は筆者にはないが、分析結果を忠実に捉えたい意向から後章においてデータを追記することとした。

最後に、分析を快くご承諾いただいた国立歴史民俗博物館年代研究グループの藤尾慎一郎氏、並びに小林謙一氏にこの場を借りて感謝の意を表したい。

【註】

1.片岡宏二　「『周溝状遺構』の検討（その1）」　「福岡考古」第14号　福岡考古懇話会（1989）
2.片岡宏二　「『周溝状遺構』の検討（その2）」　「福岡考古」第15号　福岡考古懇話会（1991）
3.片岡宏二　「『周溝状遺構』の検討（その3）」　「福岡考古」第16号　福岡考古懇話会（1994）
4.「弥生農耕の起源と東アジア－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－」平成16年度　研究成果報告（平成17年3月）

V．古島榎崎遺跡出土の炭化米

—放射性炭素14年代測定分析結果—

はじめに

古島榎崎遺跡（第1次調査）で検出した竪穴住居（ISI104）床面付近から大量の炭化米が出土したことにより、炭素14年代測定による分析を2004年8月に国立歴史民俗博物館に依頼したところ快くご承諾をいただいた。以下は、その分析結果を報告することとするが、内容は既に研究会等で発表されており、ここではその一部を抜粋（註-2）する。

平成16年度測定データー覧

1．本報告は平成16年度の測定として、平成16年1月～12月までに測定結果が得られたものを集成したものである。

2．本報告の資料は、平成16年度文部科学省科学研究費基盤研究（A）「縄文時代・弥生時代の高精度編年体系の構築」（研究代表　今村峯雄）において採取したものである。

3．これらのデータについての前処理は、国立歴史民俗博物館年代測定資料室で行っている。洗浄処理の方法は、AAA処理（酸－アルカリ－酸処理）である。

4．遺跡の所在地の行政区および所蔵機関名は、原則として試料採取時点の名称を記載している。

5．データの読み方は以下を参照すること。

—測定データー覧の読み方—

①試料番号

試料採取時に歴博がつけた番号です。試料番号の数値の後の符号は下記のとおりである。

ｒｅ・ｒｔ・再：再測定をおこなった試料。

ｒｅ：AAA処理などの前処理から再度おこなったもの。

ｒｔ：すでに前処理を行ったものの残りを、二酸化炭素化のための燃焼から再度おこなったもの。

ａｄ：同一試料を再度採取したもの。

ａ・ｂ・ｃ・ｄ：同一固体の内面・外面など採取部位の異なる試料。

②測定機関番号

炭素14年代測定を行った機関と測定番号。

Beta	米ベータアナリティック社による報告。特に注記がなければAMS測定
IAAA	（株）加速器分析研究所によるAMS測定
MTC	東京大学大学院工学研究系タンデム加速器研究によるAMS測定
NUTA２	名古屋大学年代測定総合研究センターのタンデトロン2号機によるAMS測定

③試料の種類

採取した炭化物の種類。土器付着物や漆、木材、炭化種子などがある。

④時代

資料の土器形式または資料が包含されていた層が対比されている時代を示す。

⑤土器型式・その他

炭化物を採取した土器の型式またはその器種などを示す。

⑥採取部位

資料のどの部位から炭化物を採取したかを示す。

口縁：口縁部、胴：胴部、底：底部、

上：上部または上位、下：下部または下位

内：内面、外：外面を示す。

⑦$\delta^{13}C$（‰：permil）

試料の炭素13と炭素12の比率を示すもので、標準試料との差を千分率偏差で示す。測定は安定同位体質量分析計で行っており、この値は試料の炭素の由来を反映し、海洋リザーバー効果の影響やC4植物（雑穀類）などの検討材料になる。

*この分析はすべての試料でおこなっているとは限らないが、今後、データの蓄積をすすめる計画である。

⑧備考

炭化物の採取資料の識別情報を記載している。資料に記載されている注記、または報告書の掲載頁・番号などを示す。

⑨炭素14年代（^{14}CBP）

ここで示されている値は、同位体効果補正済みの数値（^{14}C補正値）である。

炭素14年代値は炭素14の半減期を5,568年として計算した年代値で、西暦1,950年を基準にさかのぼった年数として得られる。その値に対してAMS測定時に得られた$\delta^{13}C$値注）を陸上植物の平均的な値（−25‰）と比較し、試料調整および測定の際に起こった同位体比の変動を補正した値を掲載している。

測定値およびその誤差の標記について、名古屋大学・米ベータアナリティック社・歴博の三者では方法に違いがある。測定機関によって下一桁の数値の扱いが異なるためで、これらの標記方法が異なっている。

名古屋大学：測定値の数値をそのまま記載する。

米ベータアナリティック社：10年単位で標記している。

歴博：誤差±50年以内であれば、5年単位で標記する。（2捨3入・7捨8入）

例）2342±32→2340±30　2347±33→2345±35

誤差±50年超であれば、10年単位で標記している。（4捨5入）

例）2343±62→2340±60

注）この$\delta^{13}C$値は、AMSによる測定の際に計測されるもので、⑦の安定同位体質量分析法で計測された$\delta^{13}C$値ではない。AMSで計測される$\delta^{13}C$値は、試料調整および測定の際の変動を受け、厳密には試料自身の$\delta^{13}C$値として採用するべきではないため、本報告では掲載していない。

⑩較正年代（cal BC：紀元前の歴年代を示す）

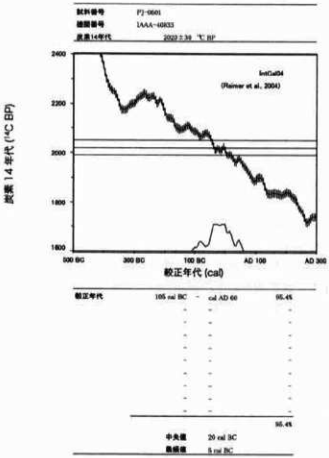
炭素14年代補正値は暦年代に相当するものではなく、国際学会によって提案された較正曲線（ここではIntCal04）によって暦年代へと変換される。この変換された暦年代が較正年代となる。この範囲の中に約95％の範囲を計算して示している。この年代は計算方法や較正曲線の修正により、後日若干の変更が出る場合がある。

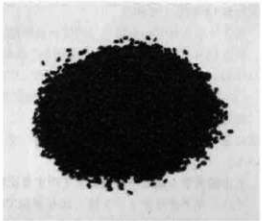
*表中のADは、紀元後の年代を示す。

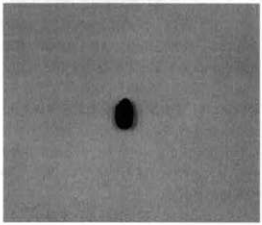
分析結果

遺跡名：古島榎崎遺跡
所在地：福岡県筑後市
所蔵機関名：福岡県筑後市教育委員会
試料番号：FJ　0601
測定機関　番号：IAAA　40833
試料種類：炭化米
時代：弥生後期前葉
土器型式・その他：高三瀦
採取部位：
$\delta^{13}C$（‰）：－25.5
炭素14年代（^{14}C　BP）：2020±30
較正年代（cal　BC）：105BC－AD60　95.4％

【註】
1.「弥生農耕の起源と東アジア－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－」平成16年度　研究成果報告（平成17年3月）pp31～32を抜粋。pp54～55の一部を抜粋。
ただし較正年代については、IntCal04によって再計算した結果を示す。
2.本レポートは、国立歴史民俗博物館年代研究グループの藤尾慎一郎・小林謙一氏の校閲を得た。



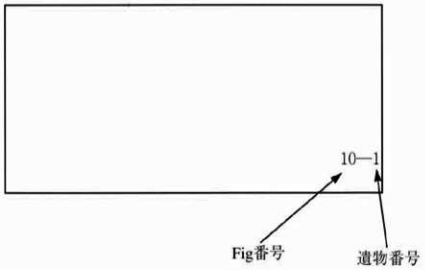




PLATE

凡　例

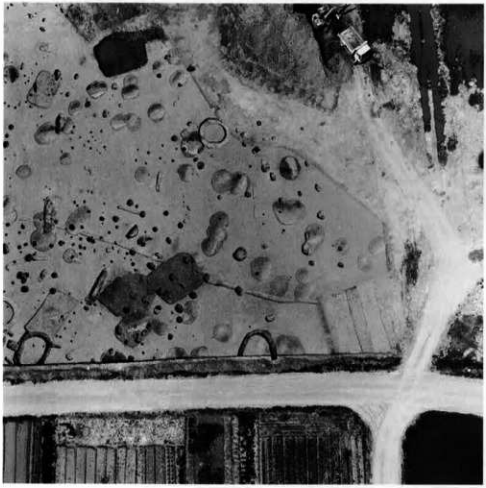
遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。



調査区遠景（空中写真）
南から

調査区遠景（空中写真）
南から

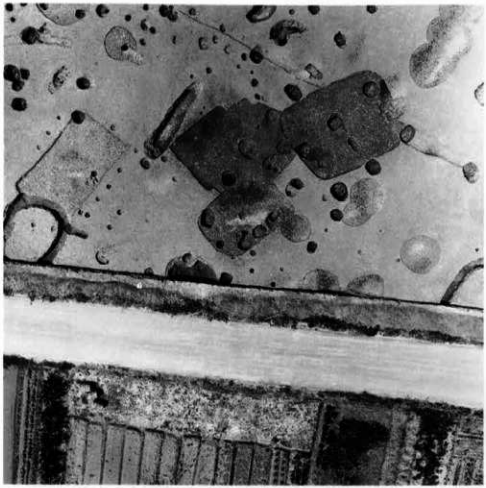
調査区全景（空中写真）
上が北



調査区東側（空中写真）
上が北

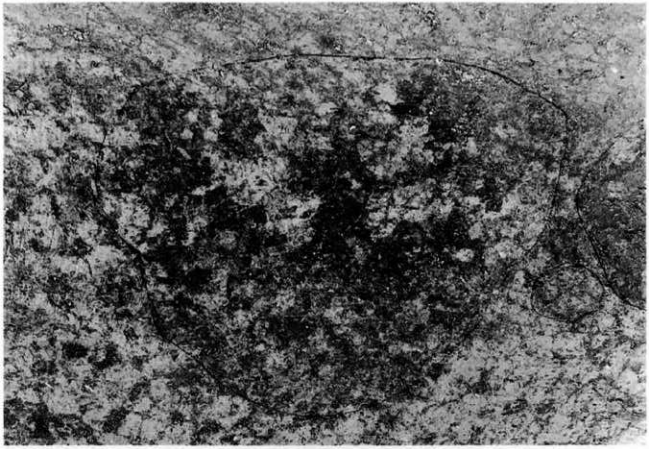
調査区北側（空中写真）
上が北

調査区西側（空中写真）
上が北



竪穴住居群（空中写真）
上が北

竪穴住居 1SI104（西から）



竪穴住居1SI104炭化米検出状況（南から）

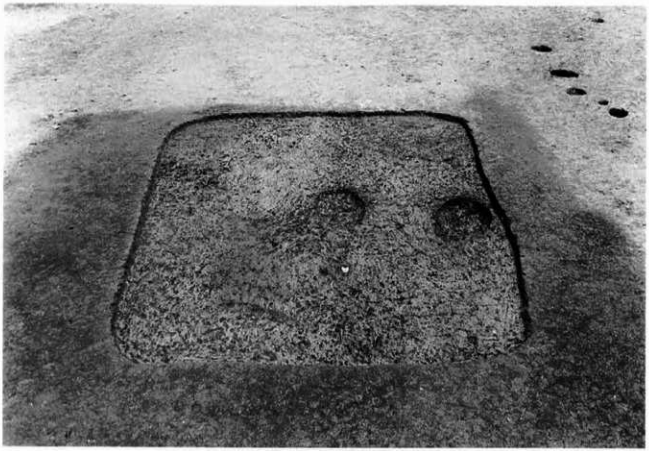
竪穴住居1SI104炭化米検出状況（南から）

竪穴住居 1SI 240（北から）

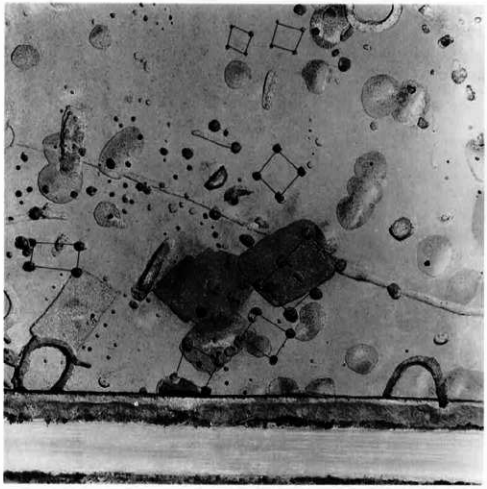
竪穴住居 1SI 250（西から）

竪穴住居1SI 260（北から）

竪穴住居1SI 480（北から）

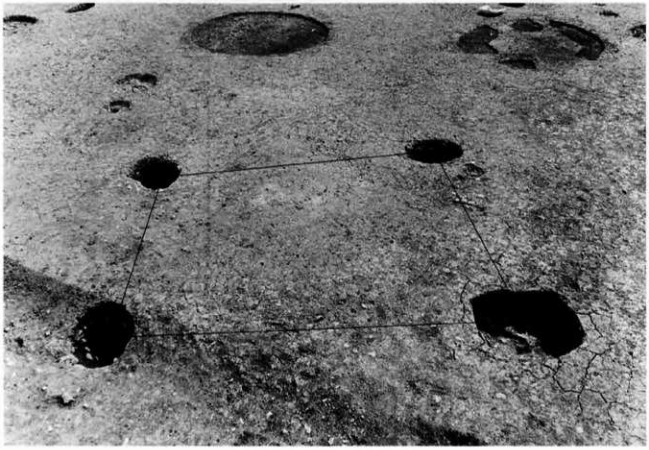


竪穴住居 1SI 765（北から）

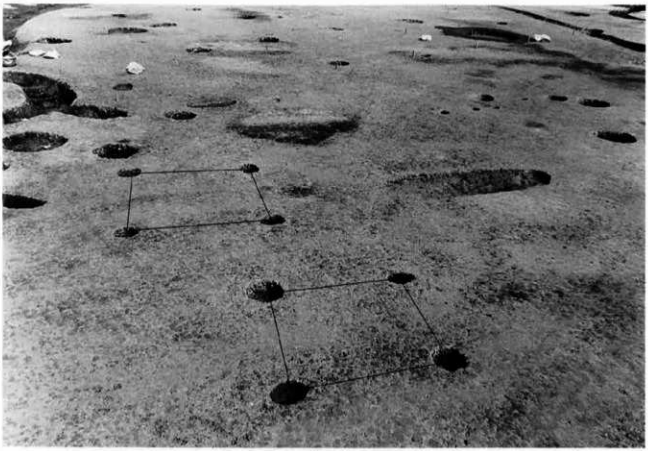


掘立柱建物群（空中写真）
上が北

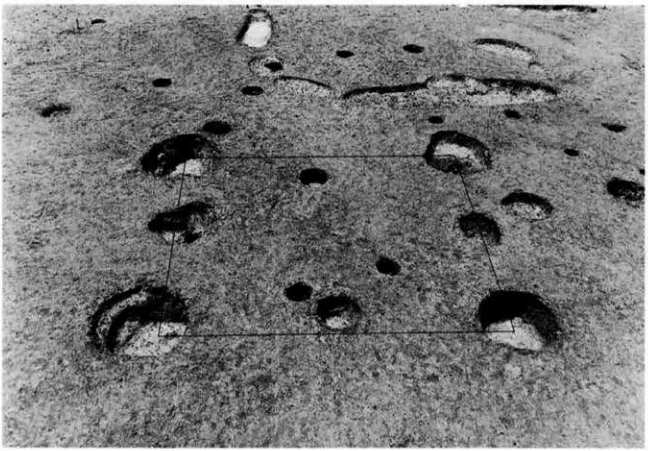
掘立柱建物1SB881（西から）



掘立柱建物1SB883（東から）

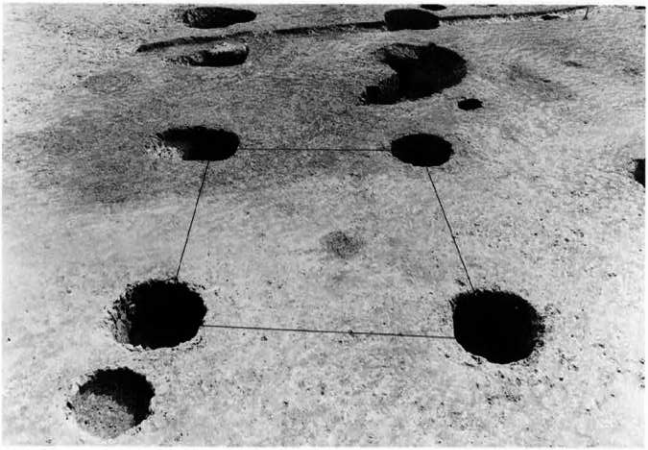


掘立柱建物1SB884・885（西から）

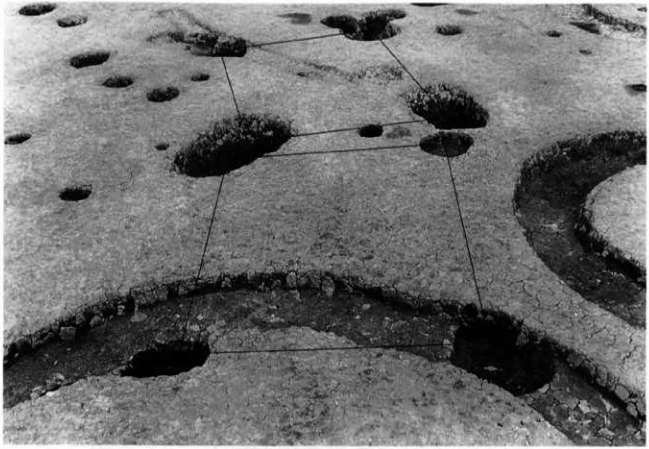


掘立柱建物1SB889（北から）

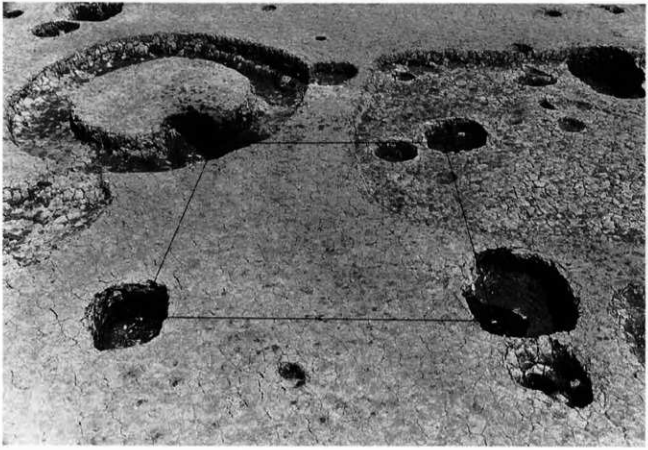
掘立柱建物1SB890・891（西から）



掘立柱建物1SB893（北から）

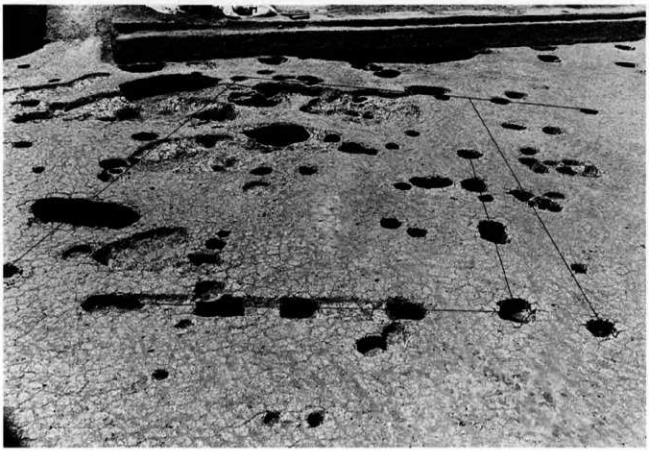


掘立柱建物1SB895・896（西から）

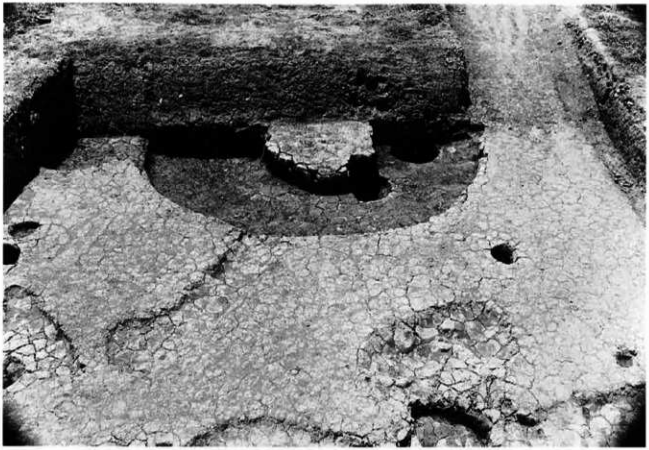


掘立柱建物1SB897（西から）

掘立柱建物1SB898（北から）



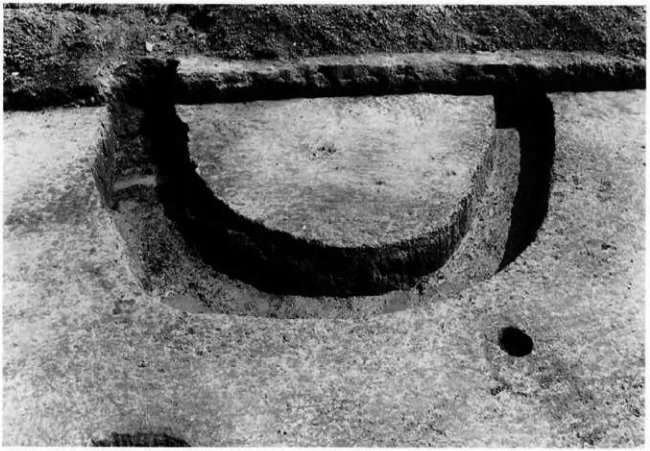
柵列1SA902～906（東から）



周溝状遺構1SX001（東から）

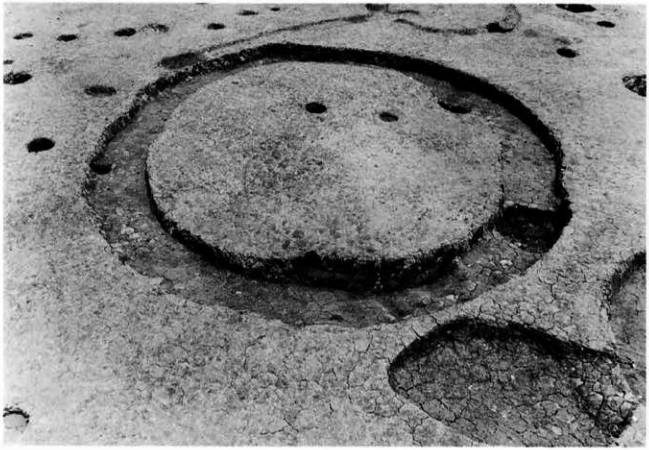
周溝状遺構1SX056～058（西から）

周溝状遺構1SX088・103（北から）

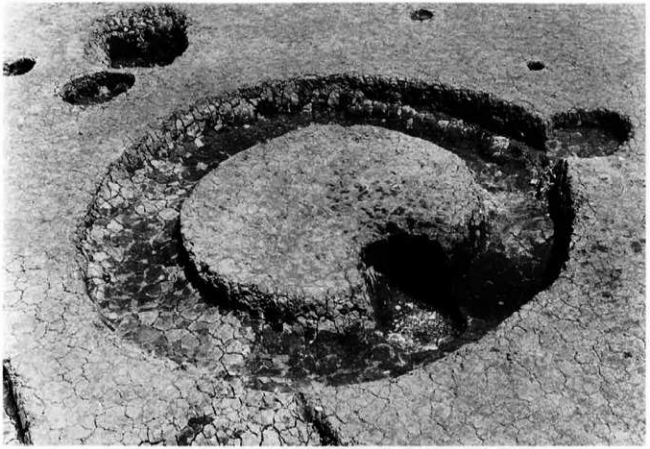


周溝状遺構1SX128（北から）

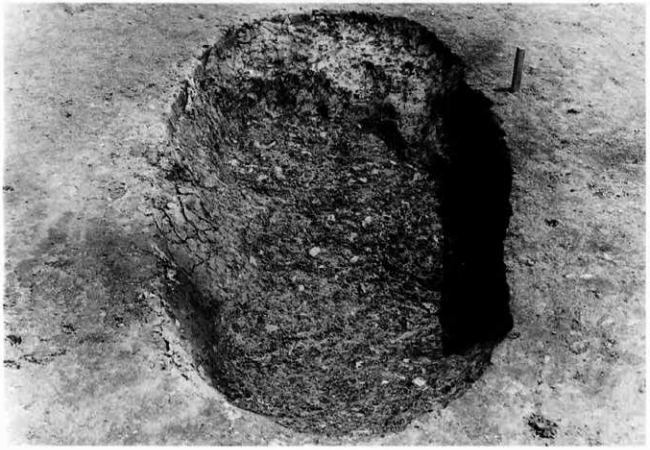
周溝状遺構1SX220（西から）



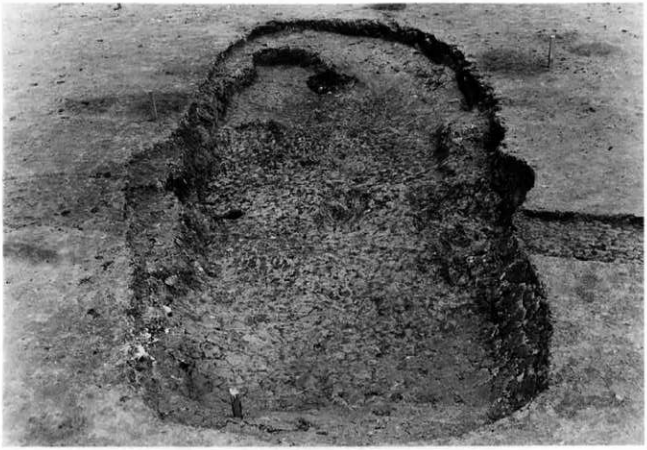
周溝状遺構1SX310・315（西から）



周溝状遺構1SX475（西から）



土坑1S K397（南から）



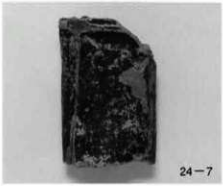
土坑1SK400（南から）

土坑1SK430（西から）

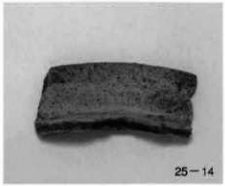
24－4

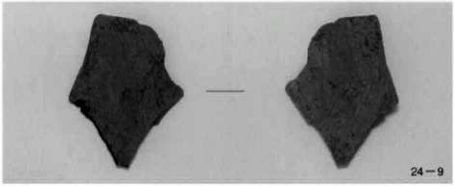
24－5

24－6

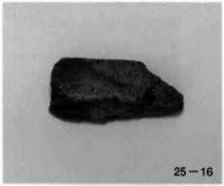

24－7

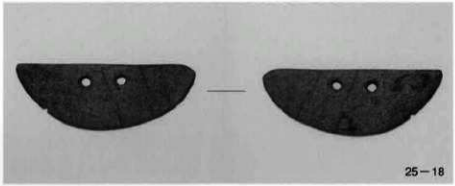
24－8


25－14

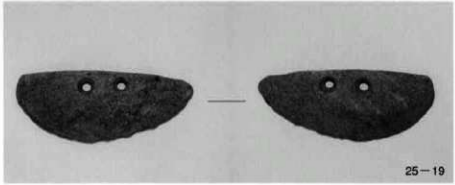

24－9

25－15

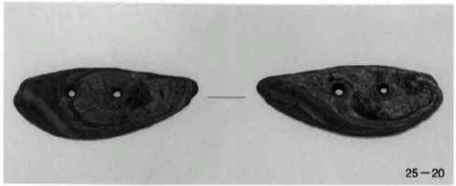

25－16

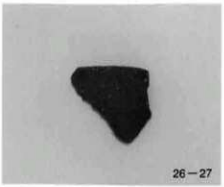

25－18

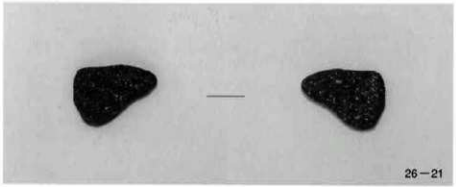
25－17


25－19

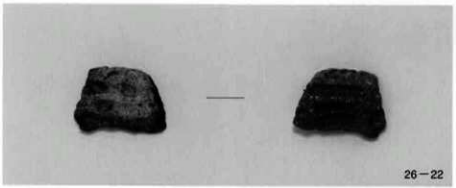
Pla.20　古島榎崎遺跡（第１次調査）


25－20

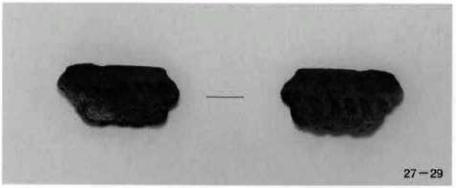

26－27


26－21

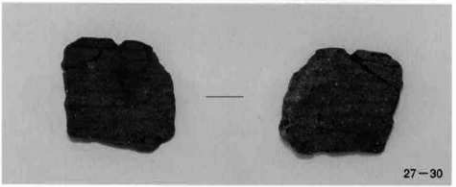
26－28

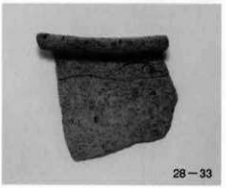

26－22

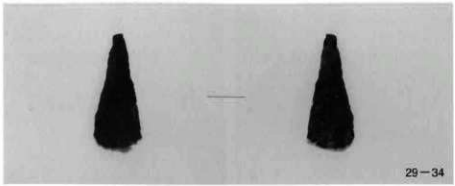
27－31

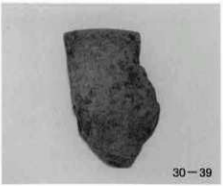

27－29

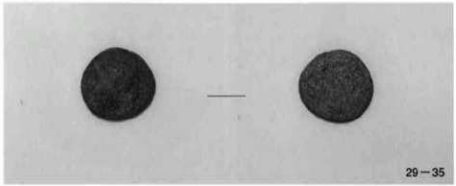
27－32

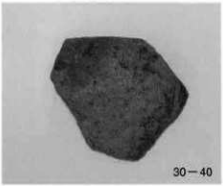

27－30

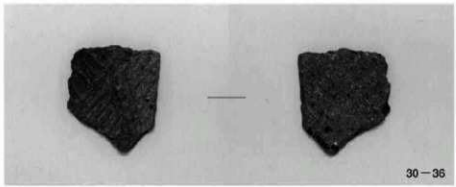

28－33

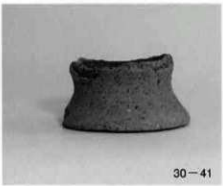

29－34

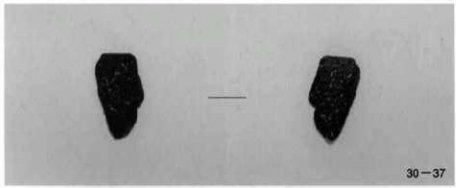

30－39


29－35


30－40

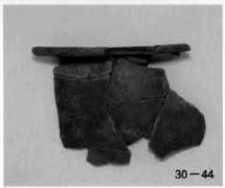

30－36

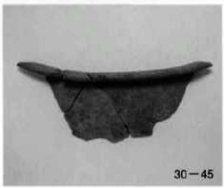

30－41


30－37

30－42

30－43

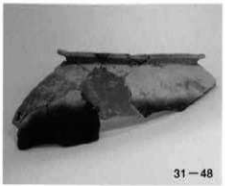

30－44

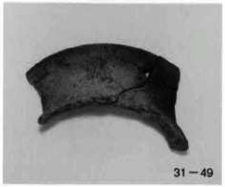

30－45

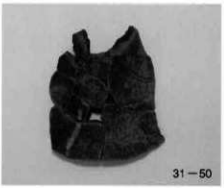
Pla.22　古島榎崎遺跡（第１次調査）

30－46

31－47

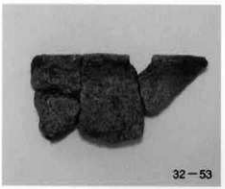

31－48


31－49


31－50

32－52

32－51


32－53

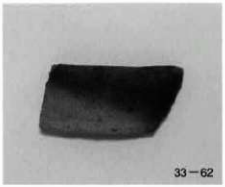
32－54

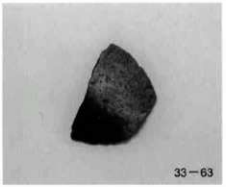
32－55

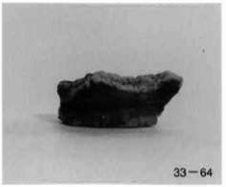
32－59

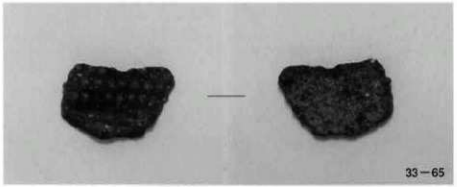
33－60

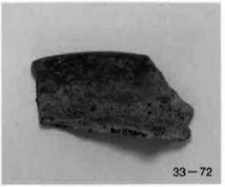
33－61

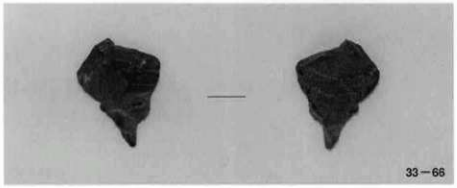

33－62

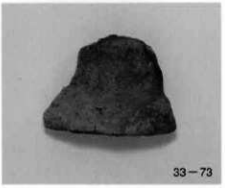

33－63

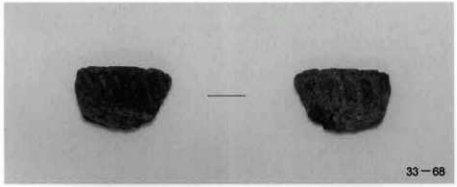

33－64

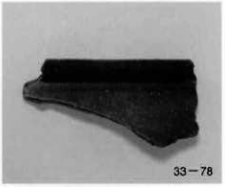

33－65

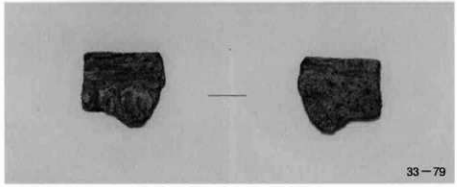

33－72

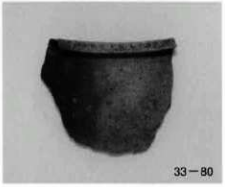

33－66


33－73

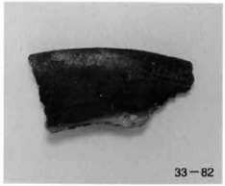

33－68

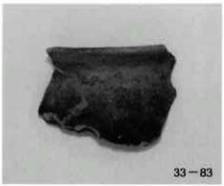

33－78

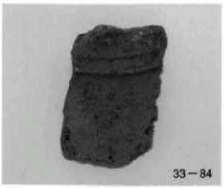

33－79

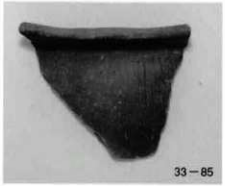

33－80

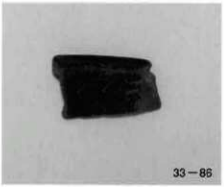
Pla.24　古鳥榎崎遺跡（第1次調査）


33－82

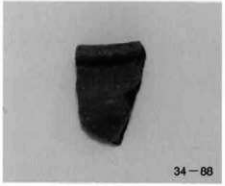

33－83


33－84


33－85


33－86

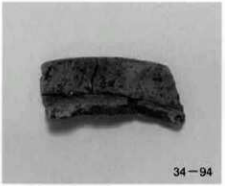
34－87

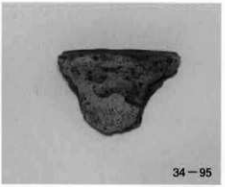

34－88

34－89

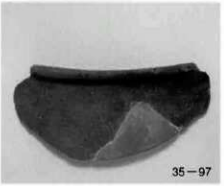
34－90

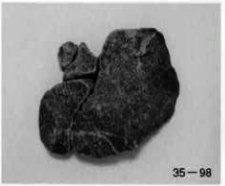
34－91

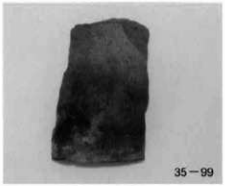

34－94

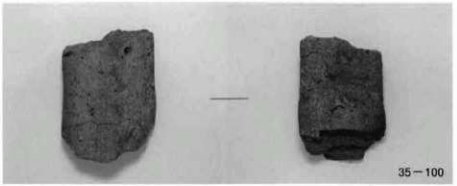

34－95

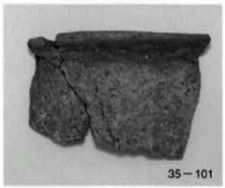
35－96

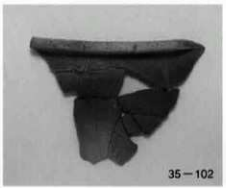

35－97

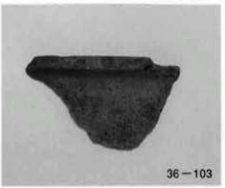

35－98

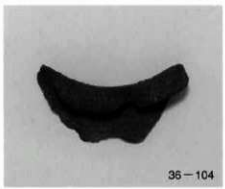

35－99

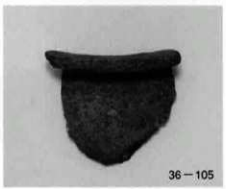

35－100

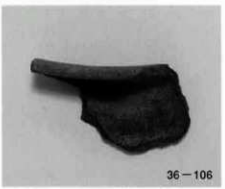

35－101

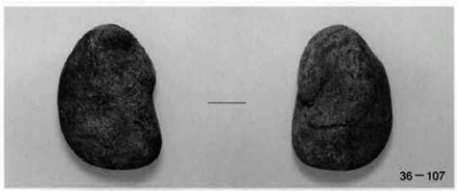

35－102

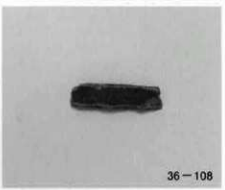

36－103

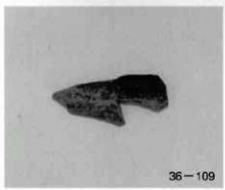

36－104

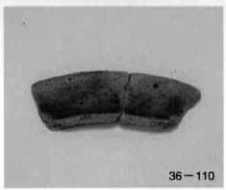

36－105

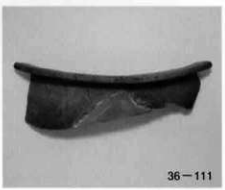

36－106

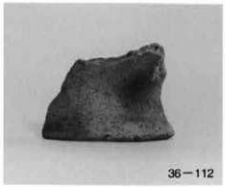

36－107

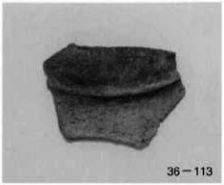

36－108

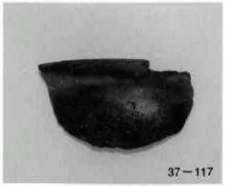

36－109

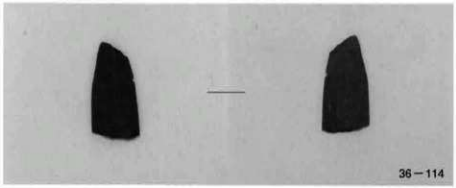

36－110

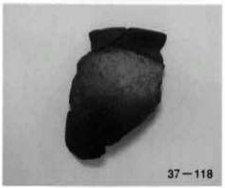

36－111


36－112

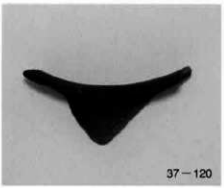

36－113


37－117

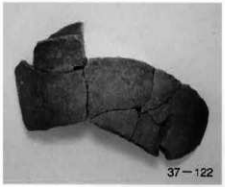

36－114


37－118

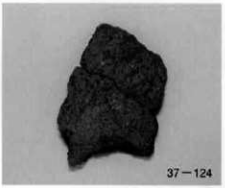
37－119

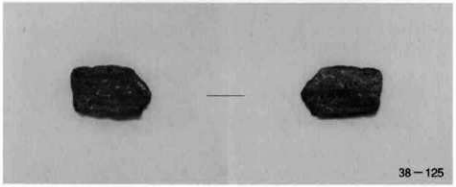

37－120

37－121

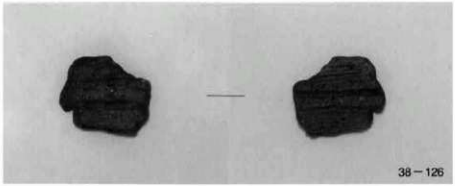

37－122

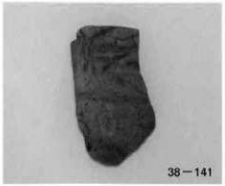
37－123

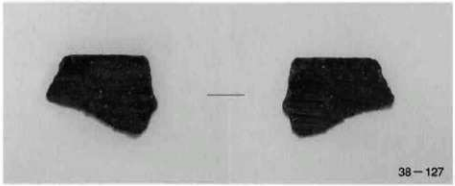

37－124

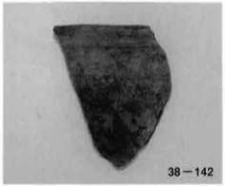

38－125

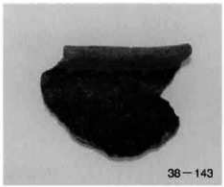
38－140

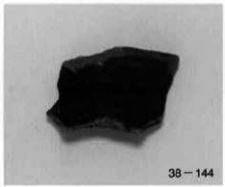

38－126

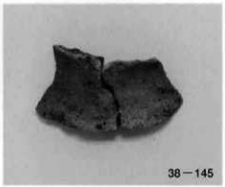

38－141


38－127


38－142


38－143

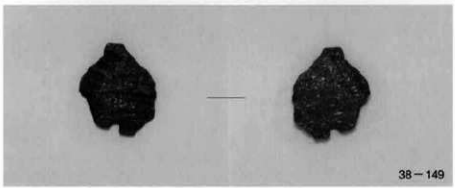

38－144

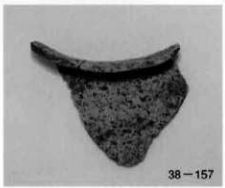

38－145

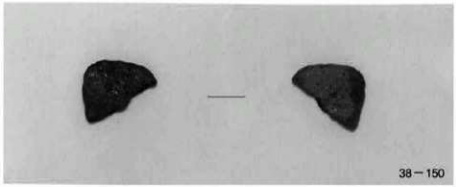
38－146

38－147

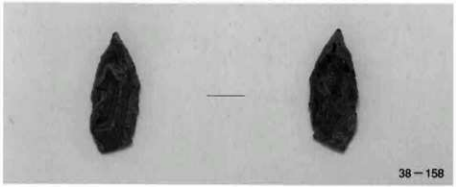
38－148

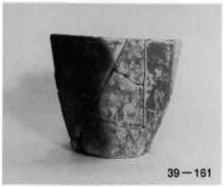

38－149

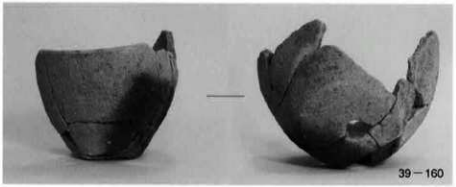

38－157


38－150

39－159


38－158

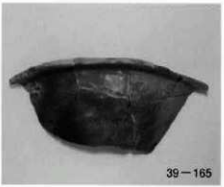

39－161


39－160

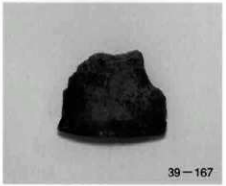
39－162

39－163

39－164


39－165

39－166


39－167

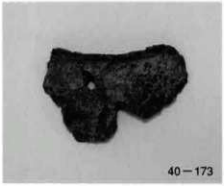
39－168

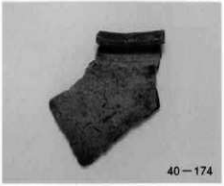
39－169

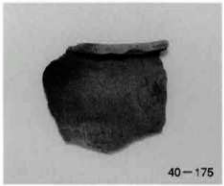
39－170

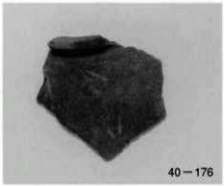
40－171

40－172

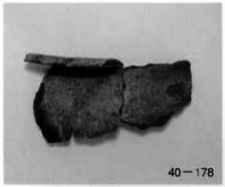

40－173


40－174

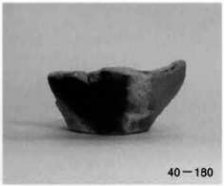

40－175

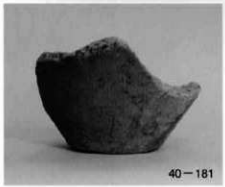

40－176

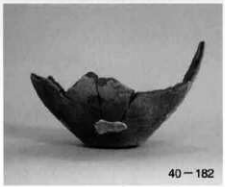
40－177


40－178

40－179


40－180


40－181


40－182

40－183

Pla.30　古島榎崎遺跡（第１次調査）

41－184

41－185

41－186

41－187

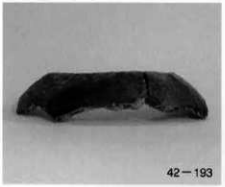
41－188

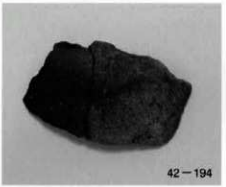
42－189

42－190

42－191

42－192


42－193

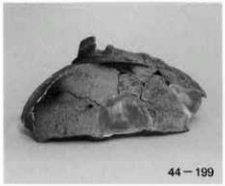

42－194

43－195

43－196

43－197

43－198


44－199

44－200

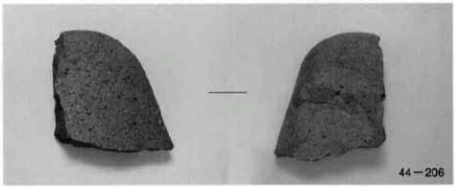
44－201

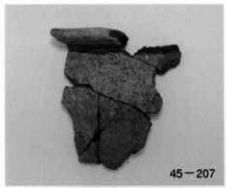
44－202

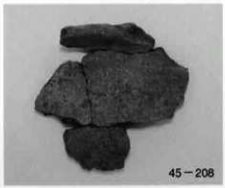
44－203

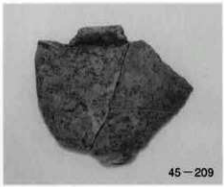
44－204

44－205


44－206


45－207


45－208


45－209

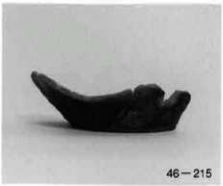
45－210

46－211

46－212

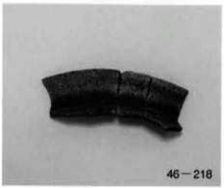
46－213

46－214

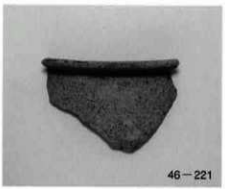

46－215

46－216

46－217


46－218

46－220

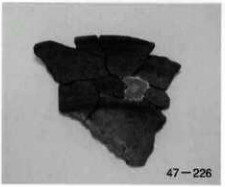

46－221

47－222

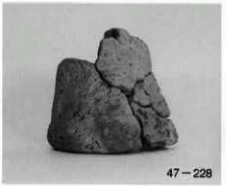
47－223

47－224

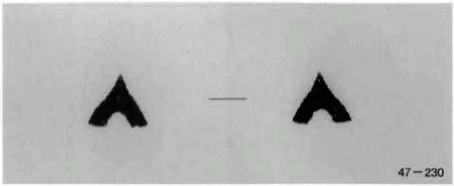
47－225

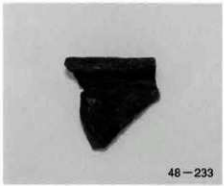

47－226

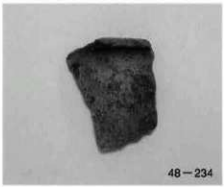
47－227

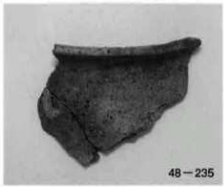

47－228

47－229


47－230

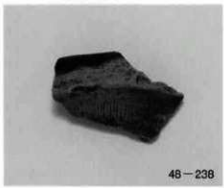

48－233


48－234

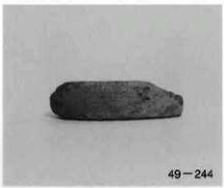

48－235

48－236

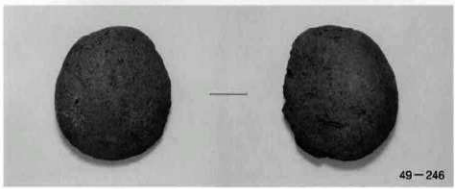
48－237


48－238

48－239

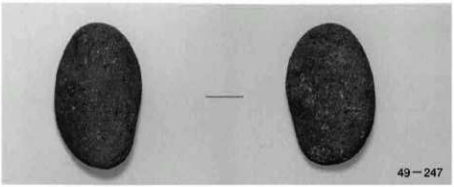

49－244

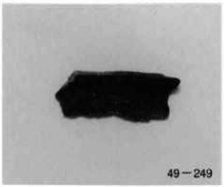
49－245

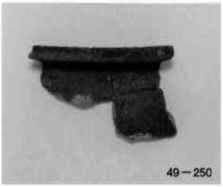

49－246

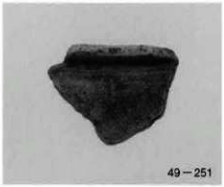
49－248

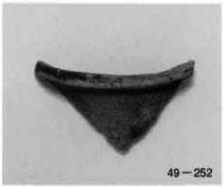
Pla.34　古島榎崎遺跡（第１次調査）


49－247

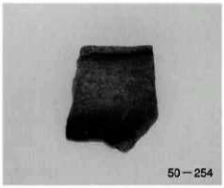

49－249

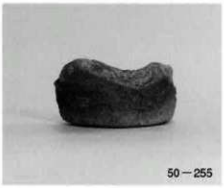

49－250

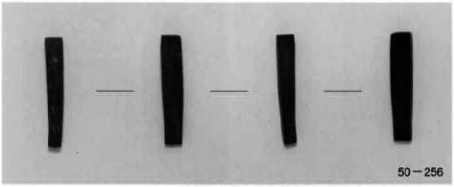

49－251


49－252

50－253


50－254


50－255

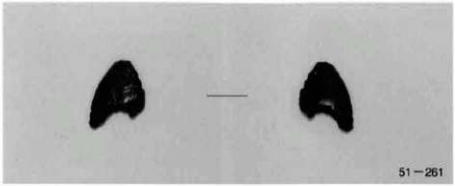

50－256

51－257

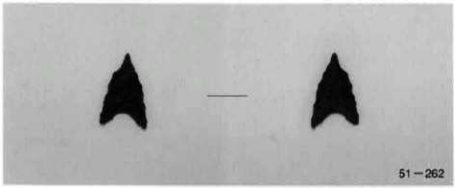
51－258

51－259

51－260


51－261

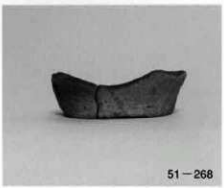
51－263


51－262

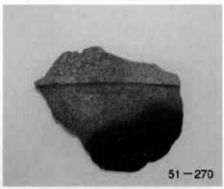
51－265

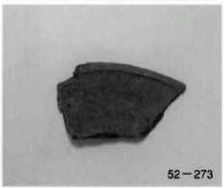
51－266

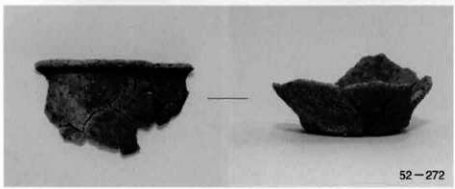
51－267


51－268

51－269

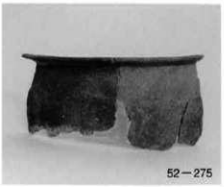

51－270


52－273

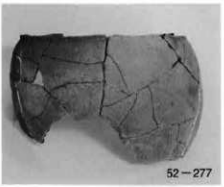

52－272

52－274

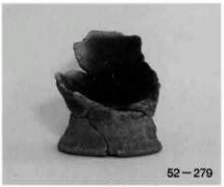
Pla.36　古島榎崎遺跡（第１次調査）


52－275

52－276


52－277

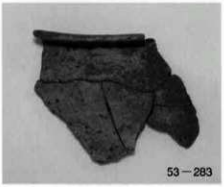
52－278

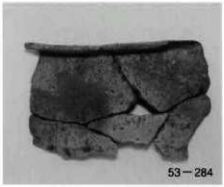

52－279

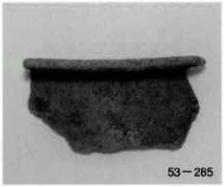
52－280

52－281

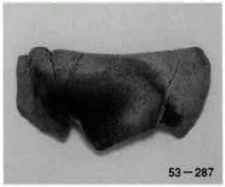
52－282


53－283


53－284

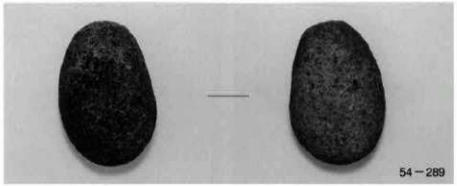

53－285

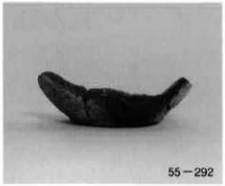
53－286

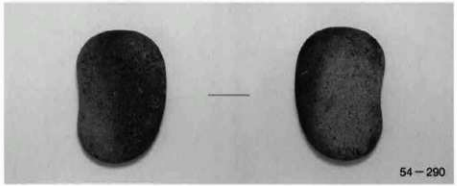

53－287

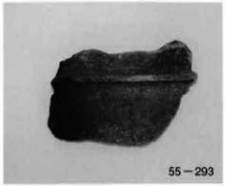
53－288

55－291


54－289

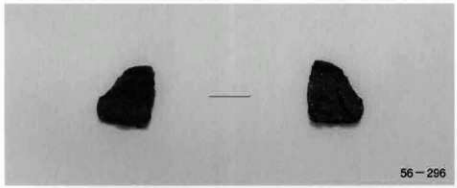

55－292

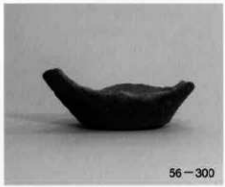

54－290

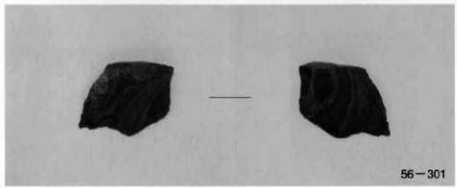

55－293

55－294

55－295

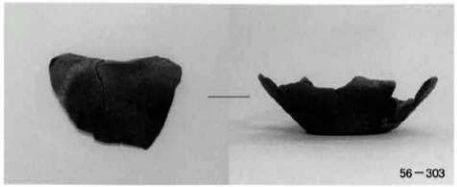

56－296


56－300


56－301

56－302

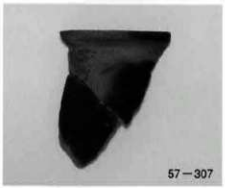
Pla.38　古島榎崎遺跡（第１次調査）


56－303

56－304

56－305

56－306


57－307

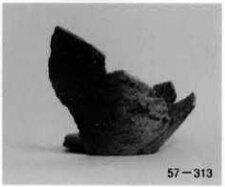
57－308

57－309

57－310

57－311

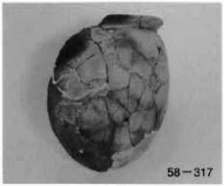
57－312

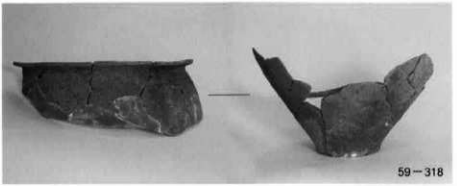

57－313

57－314

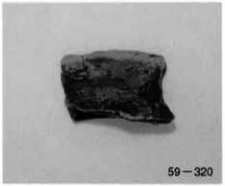
58－315

58－316


58－317

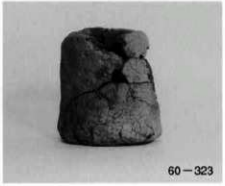

59－318

59－319


59－320

59－321

59－322

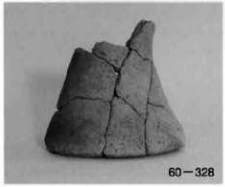

60－323

60－324

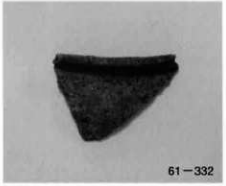
60－325

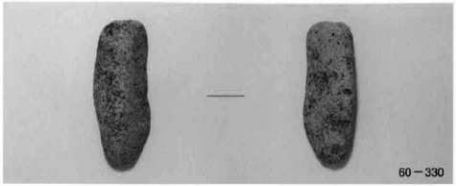
60－326

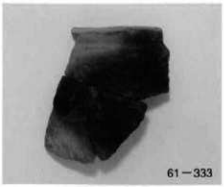
60－327

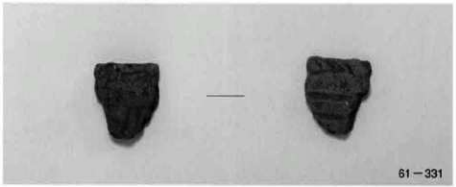

60－328

60－329


61－332


60－330

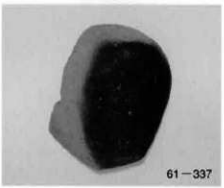

61－333

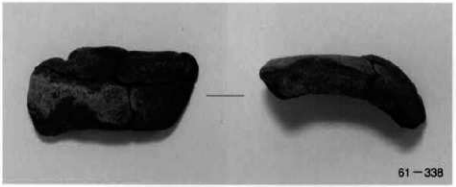

61－331

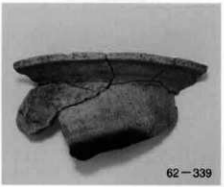
61－334

61－335

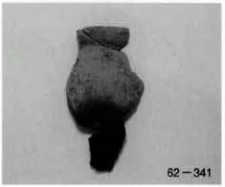
61－336

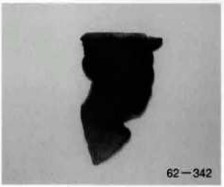

61－337

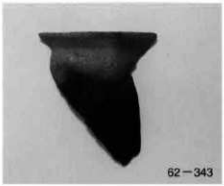

61－338

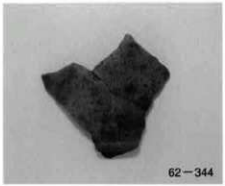

62－339

62－340


62－341


62－342


62－343


62－344

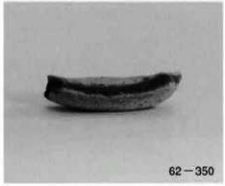
62－345

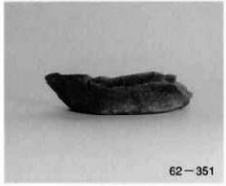
62－346

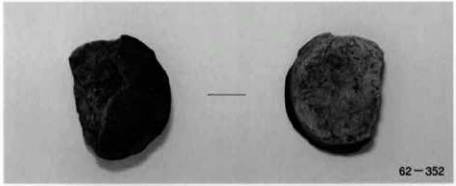
62－347

62－348

62－349

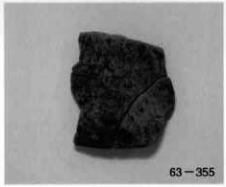

62－350


62－351


62－352

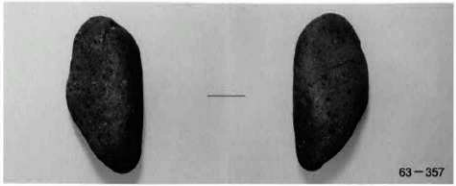
63－353

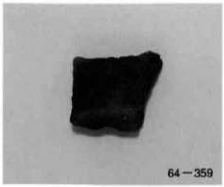
63－354

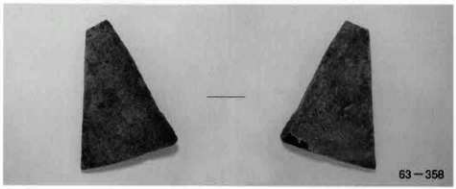

63－355

63－356

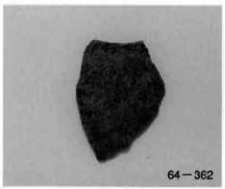
Pla.42　古島榎峠遺跡（第１次調査）


63－357


64－359

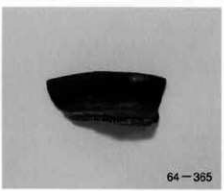

63－358

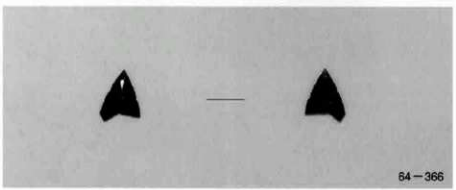
64－360


64－362

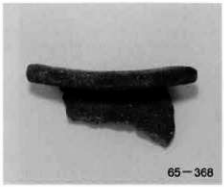
64－363

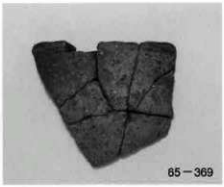
64－364


64－365

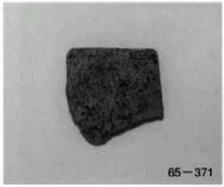

64－366

65－367


65－368


65－369

65－370

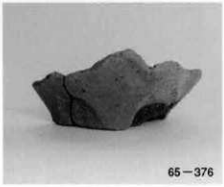

65－371

65－372

65－373

65－374

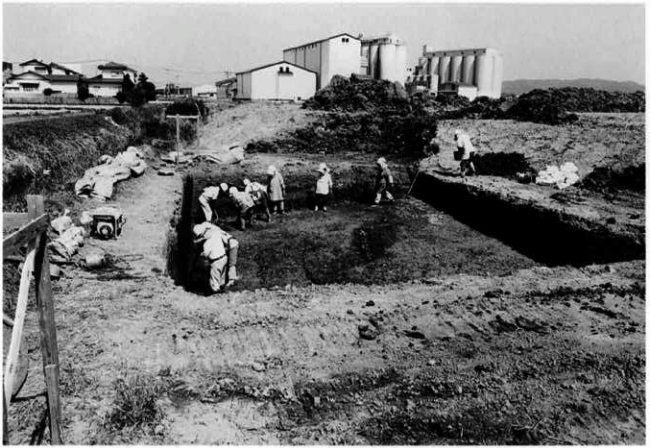
65－375


65－376

Pla.44　古島榎崎遺跡（第２次調査）

調査区設定（西から）

表土剥ぎ（西から）

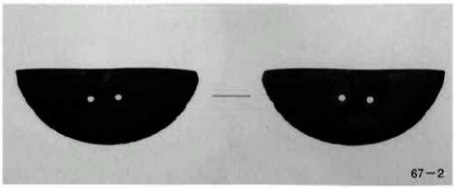


遺構検出（東から）

調査区全景（西から）

Pla.46　古島榎崎遺跡（第２次調査）

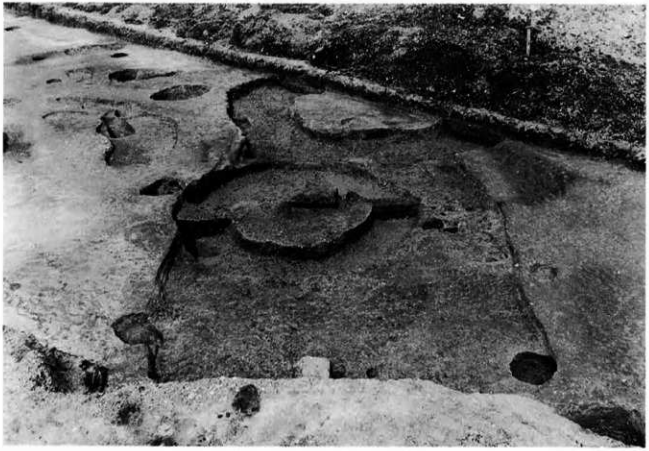
67－1


67－2

調査区全景（南から）

調査区全景（南西から）

竪穴住居3SI10床面（南西から）



竪穴住居3SI10完掘（南西から）

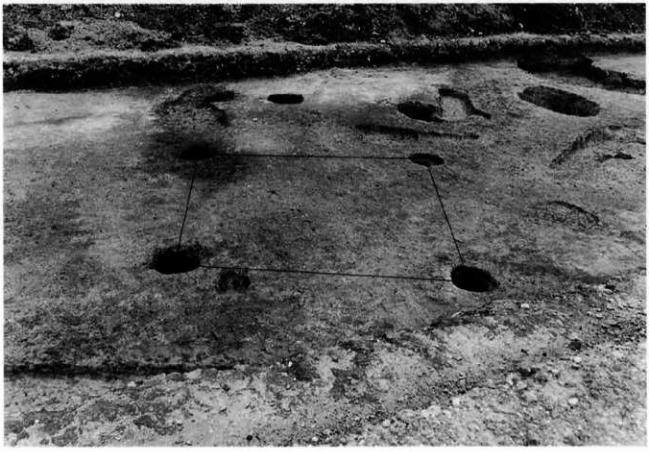
竪穴住居3SI10完掘（北西から）

竪穴住居3SI20（西から）

竪穴住居3SI30炭化材検出（西から）

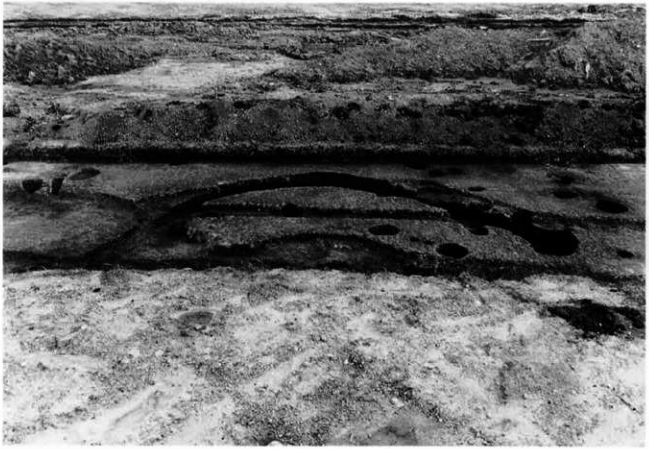
竪穴住居3SI30（西から）

掘立柱建物3SB65（南西から）



掘立柱建物3SB75（西から）

周溝状遺構3SX05・70（北西から）

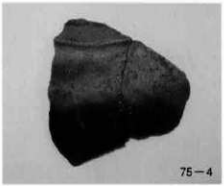


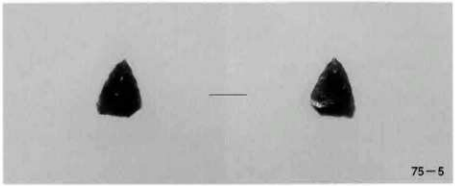
溝3SD01・02（西から）

75－1

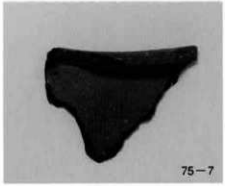
75－2

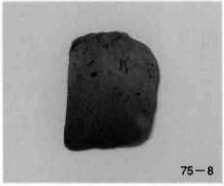
75－3


75－4


75－5

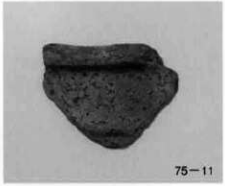
75－6

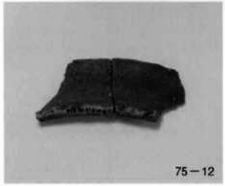

75－7


75－8

75－9

75－10

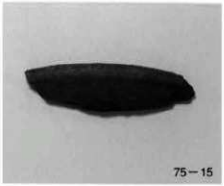

75－11

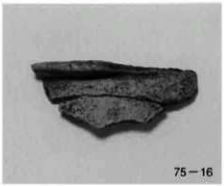

75－12

75－13

75－14

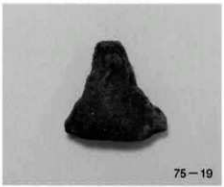
Pla.54　古島榎崎遺跡（第３次調査）

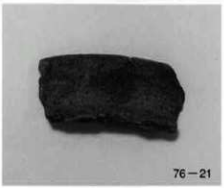

75－15

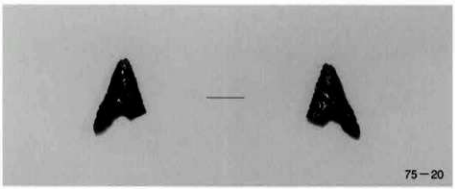

75－16

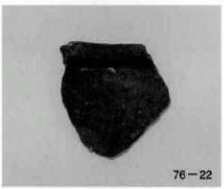
75－17

75－18


75－19

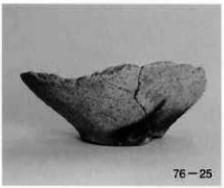

76－21


75－20

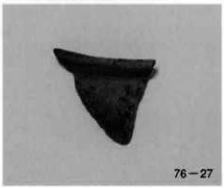

76－22

76－23

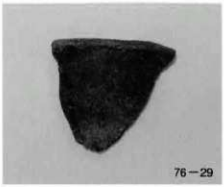
76－24

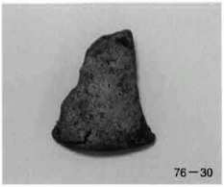

76－25

76－26

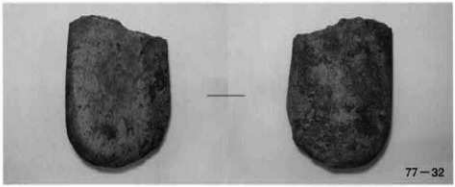

76－27

76－28

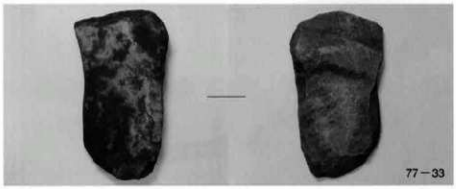

76－29

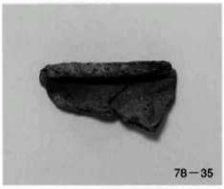

76－30

76－31

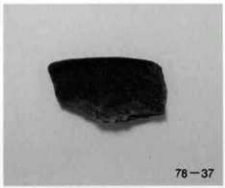

77－32

78－34

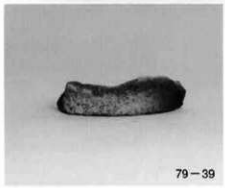

77－33


78－35

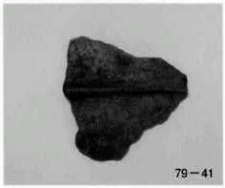
78－36


78－37

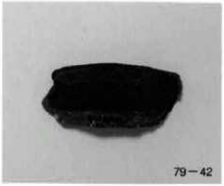
79－38

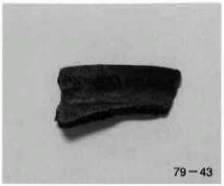

79－39

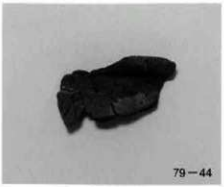
79－40

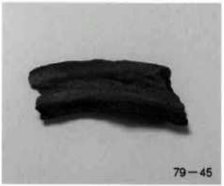

79－41

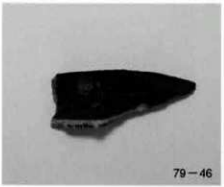
Pla.56　古島榎崎遺跡（第３次調査）


79－42

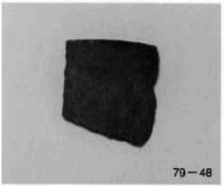

79－43

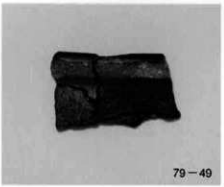

79－44

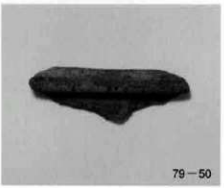

79－45

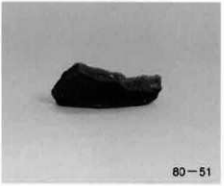

79－46

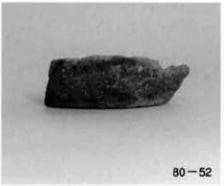
79－47

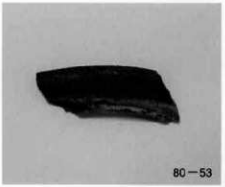

79－48

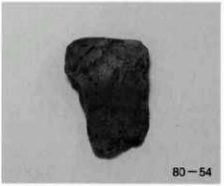

79－49

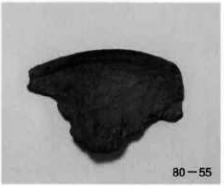

79－50

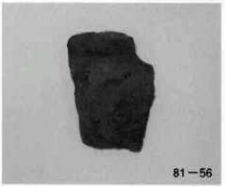

80－51

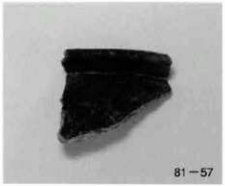

80－52

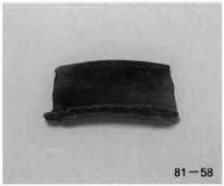

80－53


80－54

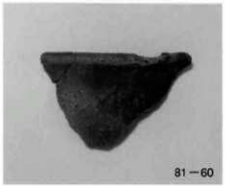

80－55

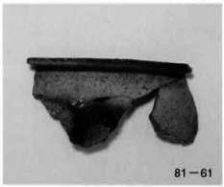

81－56


81－57

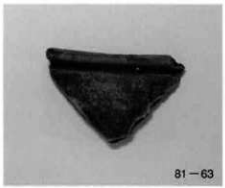

81－58

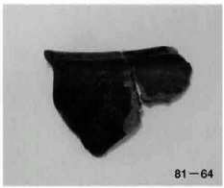
81－59


81－60


81－61

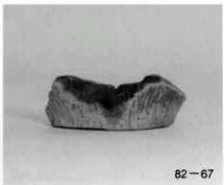
81－62


81－63


81－64

81－65

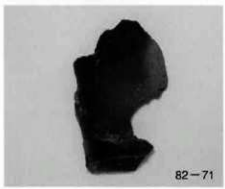
82－66


82－67

82－68

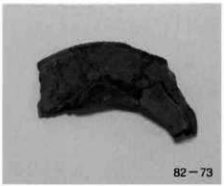
82－69

82－70


82－71

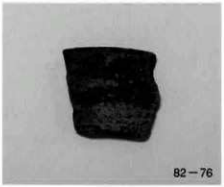
Pla.58　古島榎崎遺跡（第３次調査）

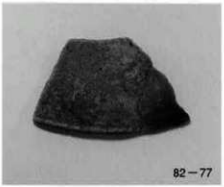
82－72

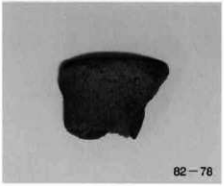

82－73

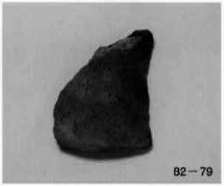
82－74

82－75

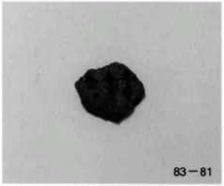

82－76


82－77


82－78

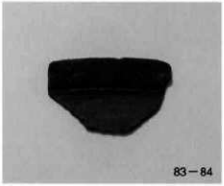

82－79

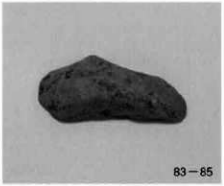
82－80

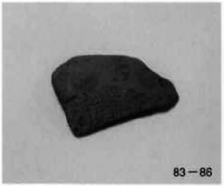

83－81

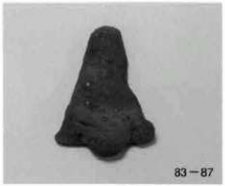
83－82

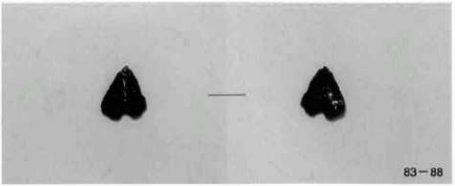
83－83

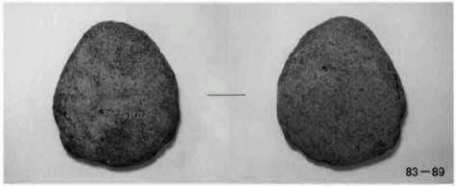

83－84


83－85


83－86

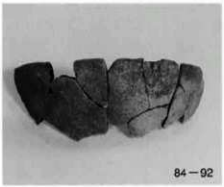

83－87

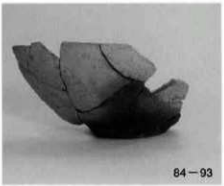

83－88

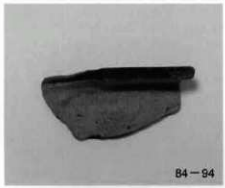

83－89

84－90

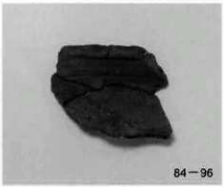
84－91


84－92


84－93


84－94

84－95


84－96

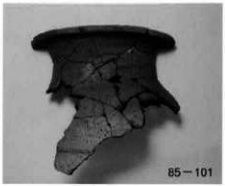
84－97

84－98

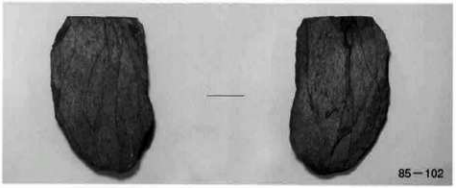
84－99

Pla.60　古島榎崎遺跡（第３次調査）

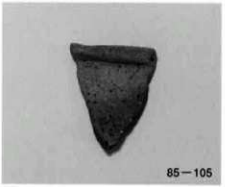
84－100

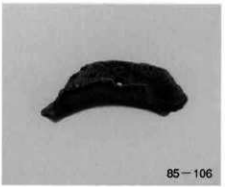

85－101

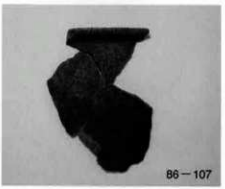
85－103


85－102

85－104


85－105

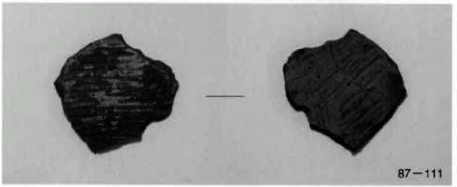

85－106

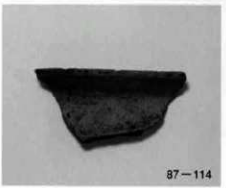

86－107

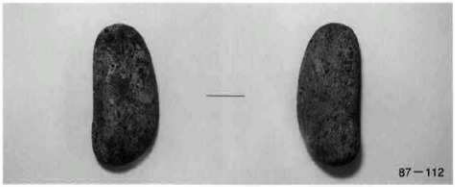
86－108

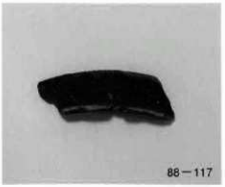
86－109

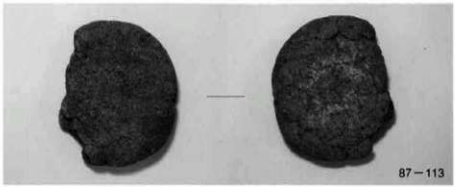
87－110


87－111


87－114


87－112

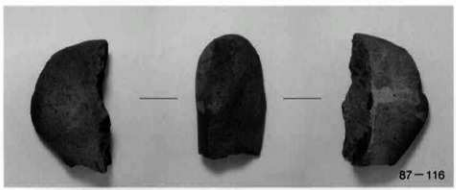

88－117

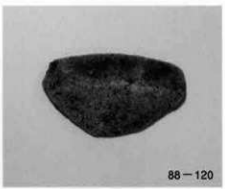

87－113

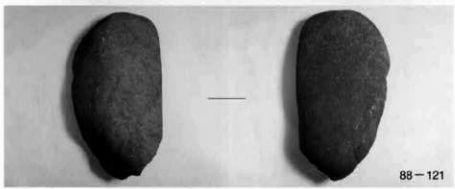
88－118

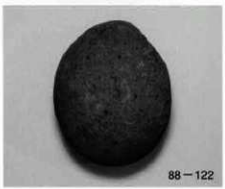
87－115

88－119

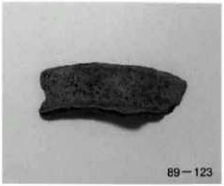

87－116

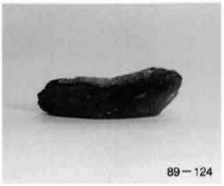

88－120


88－121


88－122

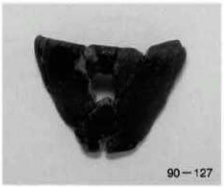
Pla.62　古島榎崎遺跡（第３次調査）

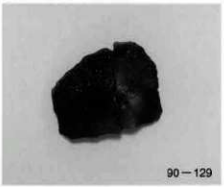

89－123

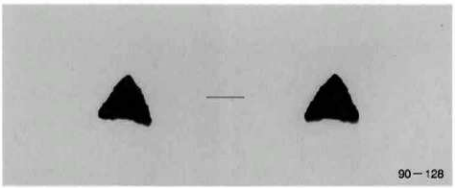

89－124

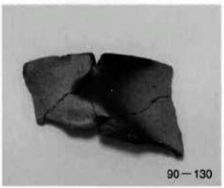
89－125

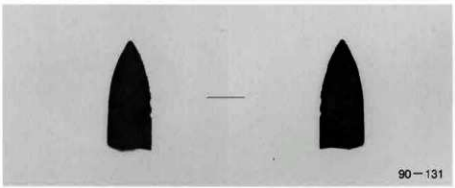
89－126

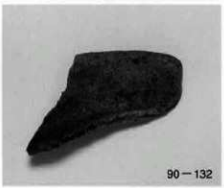

90－127

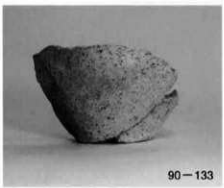

90－129

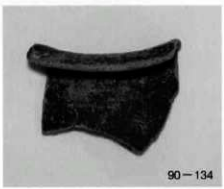

90－128


90－130

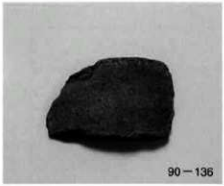

90－131

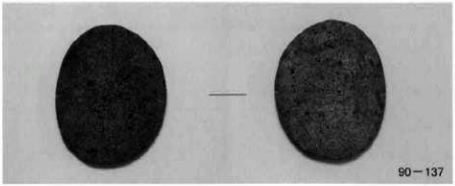

90－132


90－133


90－134

90－135


90－136


90－137

古島榎崎遺跡
筑後市文化財調査報告書
第72集
平成18年3月

発　行　筑後市教育委員会
福岡県筑後市大字山ノ井898
TEL 0942(53)4111

印　刷　有限会社　新幸印刷
久留米市小頭町10-2
TEL 0942(38)0898